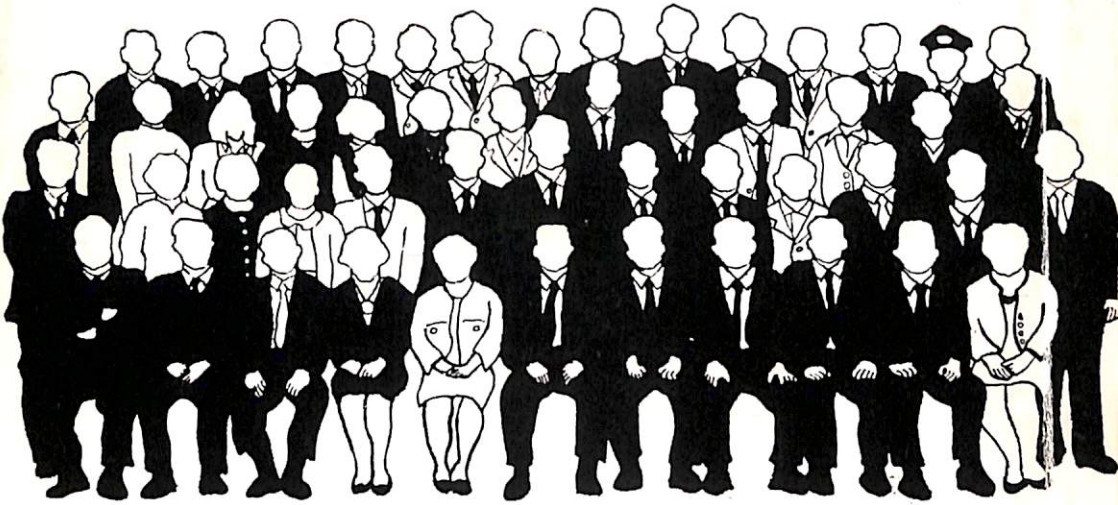
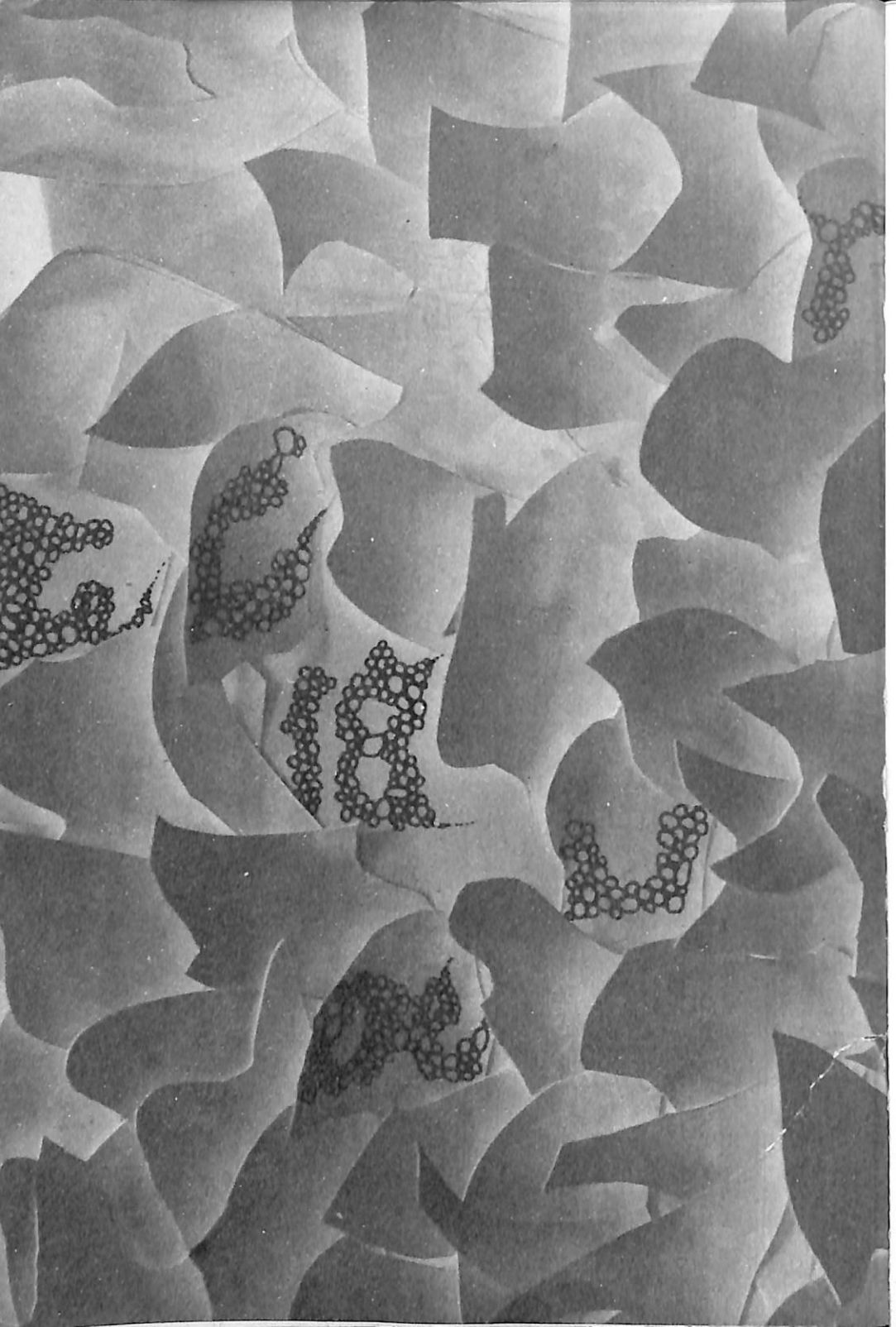
le coeur 18





表紙の言葉

――― 生徒の皆さんへ ―――

貴方は、学校の先生の名前を全て言えますか？
何故比の様にして生徒の前に出ないのでせう？
出る事は無意味なのでせうか？

――― 先生へ ―――

貴殿方が、比の様にして生徒の前に顔を並べる事が
年に一度位有っても良いではありませんか！
出る事は無意味ではありません！

裏表紙の言葉

――― 穢れ無き悪戯 ―――

若し　比んな事が有ったなら……。
貴殿方先生は笑顔で写真機の前に立てるでせうか？

――― 村井　龍 ―――

特集

プロローグ

第一章
雑感の中で

第二章
今、現在高校生

松高生の意見を
ワンダンに取り入れました。

第七章
さよならの総括

第四章
その中で……

第三章
しかし
現実は

試験

生徒会報告

クラブ

委員会

松高 1/18

先生に問う

第六章
我が志を
君に

沈黙は金ではない

第五章
昏迷の中での
創造

松高365日

本文中のワク内は、不満についてのアンケートからです。

校長先生から

BY ASAMI.KOIKE

「ル・クール」に寄せて

学校長　鈴木　雄四郎

1　「ル・クール」の象徴するもの

「ル・クール」も号を重ねること十八年、今十八号の発刊を迎えて感概無量のものがある。わが松原高校は昭和四十五年度に創立二十周年を迎えるが、学校としての成人の日とも言えよう。「ル・クール」が本校文芸部の機関誌として発足いたし、やがて生徒会機関誌として文芸をはじめ、広く本校生徒の文化活動、クラブ、委員会活動の記録誌として内容を拡充し、その活動成果を記して今日に至った。その生生発展の歩みは、そのままわが松原高校の進展の生きた魂の記録であり、わが松原高校の精神の象徴といっても過言ではあるまい。私は松原高校に深い愛着の念を覚え、そして二十年の歴史を持つ「ル・クール」の存在することを常に大いなる誇りに思っている。「ル・クール」の火は絶やすまい。「ル・クール」の火が永遠であるように、われわれの先輩が願い、そして残してくれた「ル・クール」の心、「愛」の心がわれわれの胸の中に、そして後輩の胸の中にと、常に赤赤と燃えつづけて行くことを願って止まない。

2　「断絶」「疎外」「不幸」の幻想

世代流行語の例に「断絶」とか、「疎外」とかの言葉が、マスコミを通じ、われわれの身辺に絶えずとびこんでくる。古代の人には、言霊（ことだま）の信迎があった。「吉き言」によって「吉き事」が実現し、「悪しき言」によって悪い事実が現象として起って来るという一種の呪術思想であるが、「ことば」の霊力は、その言葉を常に注入、刺激することにより、注入刺激されたその人が、その状態になると言う一種の催眠現象、幻想をひき起す状態は、二十世紀の今日においても、文明が異状に進展しているが故に、一層横行し、「人間」を脅かしているのではあるまいか。「お前は不幸だ、不幸だ、不幸だ」と絶えず刺激すれば、「不幸感」はその人にしのびより、その人を不幸の人と信じこまさせるように「断絶」も「疎外」も現代社会で絶無とは言い切れないが、自分がそうだと信じこむ前に、自分は幻想にとりつかれているのではあるまいか。現代において、いや将来に向ってたくましく生きるためには、自分が被害感を持った時、常に積極的にたしかめる意志と行動が欲しいものである。早まった焦燥と絶望ほど自己を傷つけるものはない。

3　対話をささえる「ル・クール」の心

闘争には対話はない。一方的な自己主張の衝突でそれを終息するのは「力」以外しかあるまい。対話は闘争ではない。対話をささえているのは「ル・クール」すなわち「愛」の心である。路傍の名もなき一木一草にも愛の心を抱き、枯木寒巌をも愛しうる人間が、そうもいとたやすく「人間」を見捨てさり、憎悪しうるものであろうか。断絶は自己への増長過信感と他人への軽蔑木信感の所産であろう。現代人の通弊として、自己に余りに甘く、他人には余りに厳しすぎるのではあるまいか。自己に対する甘さは、些細の認識、努力を以て完全なものと考えこみ、他人に対しては、自分に同調せぬが故に、その認識を浅薄とし、その人間性をも否定してしまう。自己に権威を感じるならば、他人に対しても同等にその権威、尊厳も認めて行くべきではないか、人間としてもっと謙虚でありたい。「草枕」を引用するまでもなく、その住みにくい浮世にあえいでいる人間同志とお互に見直した時、いたわりと愛憐の情がおのずと胸中に湧き起って来るであろう。しみじみと肩をたたき、励まし慰めあう気持、相手の不完全さも大らかな気持ちで許し合える寛容さが切望される。「ル・クール」の心、すなわち「愛」の心とは、まさにこれである。

沈黙は金ではない

ル・クール編集委員会

沈黙は金ではない！
今　この時において
すべてを自らの内に潜ませ
〝我れ内にあり〟　と　ばかり装い
何事にもいつわりのすがたをしめし
心の内で
〝我れの本心ここにあり〟　と　ばかりの
自己弁護
そして
〝来たるべき日には　この私は……〟
との自己逃避

いつまでそんな欺瞞が続くものか
そんな考え　すてちまえ
そんな自分は　殺してしまえ！
今　この時自らの手で

〝沈黙〟
それは〝動〟があってはじめて価値の生じるもの
それのみでは全く存在力のとぼしいもの

ひとつの小さな疑問から
ひとつのほんの小さな考えから
どうして？……
全ての出発は　ひとつの小さな疑問から

疑問からの出発！

小さな〝動〟を得たものから
大きなそれへ

沈黙は金ではない！

今　この時　このわれらには

沈黙は金ではない

一九五二年　〇月〇日　生まれる
五九年　四月　××小学校入学
六五年　三月　同校　卒業
同　年　四月　△△中学校入学
六八年　三月　同校　卒業
同　年　四月　都立松原高等学校入学

これは某二年生の履歴書である。よくみてほしい。年代の差こそあれ君のそれと同じところを。そう、その記念すべき年、〝松高入学〟ということを。

十四・五才。昔でいう元服の年だ。そして自らの将来を決める第一歩である。それまでの義務教育から自らのみちへ進むべき時であるはずだ。

しかし、おそらくそれを真に自ら考え、実践へと行動した者は少ないだろう。なぜなら、その時真剣に「なぜ、何のために高校へ行くか。」などと考えなかったであろうから……。

松高生の代名詞。それは〝無気力者〟そう言われる。いやそうなった原因を、そこに結びつけて考えるのは、過去への偶像にしからならないだろうか。

しかし、「その時の私はまだ幼なかった。」で、すまされるであろうか。

「中学の時、別に高校に行かれない理由も強いて無いし、ほとんどの人が行くようだから私も……。」

これが、うそいつわりのない答えであろう。

しかし、もう物事を判断する力がそなわった今、いやそうならなくてはいけなくなった今、過去の自らの過失をあなうめしなければいけないのではないか。〝高校生〟になってしまったからにはその責任をもたなければならないのではないか。

「なぜ、なんのために高校へきたか」

本当に、真に、うそ偽りなく自らに問い、認識し、そして実践しよう。

松高の代名詞〝無気力者〟。この汚名を返上するために。

だが

〝言うは易し、行なうは難し〟

自らもそう思い、友とも語る。しかし、それがなかなか成されない。

そこで、その処方箋第一。

まず、考え、思い、感じていることを内に潜めず外に問うてみよう。

第一章　雑感の中で

ある精神異常者の発作的発言

二年　熊谷正弘

時々発作的に笑い出したくなる衝動にかられる。みんな何て無駄なことをしているんだろう。五十人近くも人間が寄り集まって、そして一人の、いや一台の詰込式教育機の無駄話を、ある者は一言一句も聞きもらすまいと必死に、またある者は内職に没頭しながら、ともかく耳を傾けている。詰込式教育器、いや狂育器氏は、すばらしく気高いある理想を持っている。それは平均的で、極だった悪い事もせず、上から押しつけられた事をちゃあんと守る、いわゆる人畜無害人間を世に出す事だ。その方針に従うお利巧な人間もいるし、またそうでない人間もいる。そうでない人間は必死の抵抗を試みるが、結局はある尊敬すべき機械氏が待ち続けている学校へと行ってしまい、そして試験の直前には無意味だと知りつつも夜遅くまでお勉強。

無論勉強の全部が無意味だと言っているわけではない。しかしそのほとんどは記憶力の養成あるいはそれ以下で、考える余地を余り与えてくれない。要するに理屈なしに覚えればいいのだ。僕はなぜ勉強をするのだろう、などと考えた人間は、成績が急激に落下し、その結果妥協を強いられることになる。もうどうでもいいんだ。やけだ。考えることなんか放棄しちまおう。それが最高の幸せかもしれない。もうどうにでもなれ。

今、ちょっと前の文を続み返してみて、ちょっと極端な事を書き過ぎたかなと反省している。僕自身、先生の全部が全部、詰込式教育器だなどと思っているわけではなく、また好き好んで平均的人間を製造しているなどとは思っていない。しかし結果として僕達の前に存在する「現状」は、多分に前述したような（くどいようだが、その冒頭に書いた事柄は、少々極端に書き過ぎたようで、誠に申し分けない）ことになってしまっているのではないだろうか。要するに、僕が冒頭で述べた事は、生意気ちょうだが、先生に対する一種の風刺である。

今の松高は大ざっぱに言って平穏無事である。平穏無事ならそれでいいじゃないかと言う人もいるかもしれない。でも「平穏無事」の陰には、常に「惰性」や「無気力」や「単調さ」がつきまとうような気がしてならない。そして考えを発展させたあげく、たどりついた所にあるものは常に空しさだった。今僕は生きることの意味さえも見当がつかなくなってきている。

雑　感

二年　鈴木美代

君の生き方
あたりまえの一般常識的行動
それをしてきた人間がふっとたちどまって
うしろをふりかえる
そして小さな穴のあいていたことに気づく

横へ横へとその穴をひろげ
下へ下へと堀りさげていく
人は言う
「ばかな奴だ！」と
穴をひろげたものは彼らに向って
「ばかな奴だ！」とつぶやく
『興味』で広げたんじゃない
自分の足あとをみつけるために堀ったんだ
穴をひろげたものはつぶやく
しかし……
時がたつにつれて一般的常識的行動へのいなおりを考え
「おれがばかなのか？」と心の中でつぶやく
堀る手がとまる
堀る手がとまる
その場に腰をおろし
「おれがばかなのか……」とつぶやく
上をみる
しかし出口は遠い。

穴の中で腰をおろした人間は、人間の存在のまわりのさくと一般常識的行動について考える。そのさくの中に存在すると見られる一人の自分とそのさくの外から中を見ているもう一人の自分が存在している。

さくの中の存在を重視したとき、そこにおける行動は何らかの可能性をふくむものとなる。しかし、外から見るようなもう一人の自分において、その行動は「はかないな……」と言うものにしかならない。

さくの外からみるものにとってすべての行動の価値などないに等しいものとなる。すべてがはかない

「誰もそう考えないのか……。」

「どうして行動するのか……。」

さくの外からみるものにとって「すべての存在、行動など無に等しいんだ。」というのが、その底にあるのみなのだ。

ずっと以前たった一度、期末考査において全力をあげて勉強しテストに応じたとき、その行為の充実度において自己満足をおぼえたものだ。さくの外からみるものにとって、本当に自分の実力のためのテストであったかそれともその行為が単なる点をとるためのものであったかのいかんにかかわらず、そのはかないはずの行為に対してどうこういうことができない。

考えにおいては、すべて否定できるが、その行動の実存する場合に、まったくの否定ができないことに気づく。

しかし、ひとりだけちがった考えの人間がまわりの人間と一緒になりたいと（孤立からぬけだしたいと）否定したものに対して肯定しようとする……そんなものかもしれないなと考えながら行動の可能性をみとめようとしている。——今、さくの外のものはそう考えもする。

孤立が耐えられなくなった人間がどうにかしてぬけでようとする悲しさなのか

しかし、その精神的な孤立にしてもはっきりとした自信はなさそうだ。

多分そのさくは目にみえるものではないからかもしれない。

「カリキュラムの改正……。」

「空港の……。」

さくの外のものにとって、このことばが、ただのことばでしかないように思えると同時に

少なくとも現在の『形』の存在からすると（というよりそれをみとめたとすると）一つのすばらしい行動なのかもしれないと思える。

しかし……

さくの外のものの考えのかたすみには、すでにいなおりが存在してしまっているのかもしれない。

人は「ばかな奴だ。」と言い、また自分で、「ばかな奴だ。」とつぶやく、腰をおろしてた人間にとってその場所が決して、いごこちのいいところではない、しかし、ただ上をながめるだけで、でたいとも思うが、「いなおりでは……。」と思う。

また、（というよりむしろ）穴にはいっているということは今の自分にとって安心感を与えてくれることなのかもしれない。（これも一つのいなおりかな。）

さ、腰をおろしてじっくり考えよう。

かいぎ

二年　松尾　明

僕は会議を懐疑する。平和的で正しい判断はこれに限るというのが一般意見のようだ。しかし、実際話し合った経験から彼らはこう思うのであるが、僕にしてみれば大きな疑問だ。少なくとも僕のわずかな経験からすれば、会議話し合いはすなわちごまかしである。

これまで何回か（僕にすれば数多く）の結論の出ない話し合いをして来たが、思うにその結論の出ないという事は話す前からわかっていた事なのだ。だから意見の交換にすぎず、その話し合いの目的も、相手の意見を知るという事になっていた。しかし自分の意見に対する他人のアンチテーゼも、時間さえあればジンテーゼや、そのアンチテーゼのアンチテーゼという方向に持って行くことができたわけである。だから相手の意見が自分と同じなら話し合いの意味はないし、違っていれば永久水かけ論が展開するだけでこれも話し合いの意味がない。この話し合いで要求されるのは新らしく、かつ誤っていない意見だ。求めるものがそれならば、強いて話し合いをする必要はない。一人が話すのを他の者が聞いていれば良い。その方が伝達が正確だ、能率も良い。

そんなでまかしばかりの会議だが、それでも時々一方が他方を言い負かして黒白が、ついたようにみえる事がある。だがこの勝負は、頭の回転が早いか否か、口が上手か下手か云々にかかっている。善悪正誤が誰の目から見てもはっきりしている場合をのぞいては、負け側に豊富な時間を与えることにより、水かけ論をいつまでも続けることができるはずだ。又、話の最中、当事者は夢中だ。無事夢中と言うのかも知れない。極端なことをいえば耳から入るものの反応を口が示しているだけで頭は全く働いていないのだ。これでは、当然どこかで無理が生じる。そして見かけの勝敗がつく。ろくに考えもしないで口に出すことが悪い。相手の弱みだけをつけこんで勝敗を決めることも悪い。話し合いは詰め将棋ではない。王手王手はやめるべきではないか。

それでも、なぜ多くの奴は何かと言えば話し合おうと言いだすのだろうか。それは暴力の否定にある。なぜだか知らないが暴力——実力行使は悪い事だ、ずるい事だ、いけない事だと言われる。暴力ぐらい良いではないか。利己の発言には最適だ。そう言えば利己も一般には否定される。だが、しかし、けれども、

人間は平等だと言って、力のない者が暴力を否定するのは、それ自体利己だ。

以上、話し合いというものをけなしてみたが、どうも決定打が出ない。反対例ばかりであり、経験の不足も関係するからかも知れない。そしてもっと大きい事には、言語コミニケーションをけなしながらもそれを用いているからだ。しかしそれによってこれが言い表わせなかったのだから、やはり言語コミが悪いのであり、そうすると僕がいけない事にもなりかねない。作文の利点は一方的な所だ。

現在の学校問題について

二年　小島　豊

現在は多くの者が大学に進学を望んでいる。そして僕が思うには、彼らが自分の目的をハッキリと決めて進学するという者は、まず少ないだろう。

一つの波にのって自然と大学に入らなければならない様な周囲のふんい気によって大学にめざす者がほとんどであり、その流行になってしまったものに押されるかのように、高校というものが大学進学者のための、予備校になりつつあるということである。

まず我々の高校がそうであると思う。我々が三年になると文化系、理科系に分けられる。それは、本当に大学へ進学したいものにはすばらしい交錯かもしれない。しかし、我々の中に果して何人の者が大学を目ざしてこの学校に入ってきたのであろうか。たしかに高校受験の前には大学の事を考える者は少なかったと思う。そして、高校に入っている間に大学で専門に勉強しようと思う者がでてくる。そこでもって大学受験を考えるわけであろう。

しかし、高校を楽しむつもりの者とか、大学には行こうと思わないがいろいろな勉強をしておきたいとか思って入ってきた者はどうなるのだろうか。その人たちは学校側の決められた方針により文化系と理科系に分けられてしまう。それは、完全に勉強を専門的にしてしまう。つまり大学受験の勉強になってしまっても、果して不満がそこにおきないわけはないであろう。

自分へ

一年男子
○オレは何のために生きているのか
○なんでこんなに不真面目なのか
○〝バカな奴〟
○なぜ自分という物体が自分なのか

女子
○いやな奴だよまったく、ずうずうしくて
○もっとすなおになりたい
○人に甘えすぎる
○昔はもっと純情でいい子だったのに、どうしてこんなにひねくれたの

二年男子
○何にもない自分、ばかみたいにくらしている自分
○もっと勉強しろ
○しなければならないことがあるのを知りながらそれを行動にあらわすことができない自分の弱さがなさけない。

女子
○積極的な人間になりたい
○もっと責任をもっと自主的に行動したい。
○自分の意志がまったくなく、なんの目的もなくおし流されている。
○自分をごまかすな

三年女子
○責任をもつ自分を信じたい
○利己主義だ
○異性に関する偏見を持っている
○自己満足に落ちいりやすい
○うぬぼれるな
○何をすべきかわからない

ある出き事に、それらのいろんな不満を言うために教師との対話を求め学校改善のために行動した何人かの高校生は、校長に話し合いに行ったが、校長は頭からそれを受けようとせず、裏から逃げてしまったと言う。

こんな学校側の態度だから、我々はより以上の不満を持つのであり、バリケードによるストライキというものが起ってくる。ゆえに学校側としては、その相手にしないという態度がもっとも良くない事であると思う。

この様な現在の学校の制度を改善する為に学校側はもっとよく生徒の不満を受け入れる事をして欲しいものだ。現在の大学問題もこの様は事態から起ったものである。

我々の学校も今の大学紛争のようにならない様、早くからもっとこういう事について、考えて欲しいものだ。

そこに先生と生徒の対話が必要となる事はわかりきっていると思う。

いろいろ考えようよ

二年　大塚　勉

我々の学校では、ここ数年間弁論大会をおこなっていない。少なくとも声を大にして、弁論大会といえるものは。

風のうわさによると、弁士の書いた原稿は先生に見せねばならず、ある先生が思想的内容にふれたということである。

これは、あくまでもあてにならないうわさであるが、これがもし本当にあったとしたらどうであろうか。

生徒が原稿を書き、演壇に立ち、生徒の口で話す、あくまでも生徒の考えを言う自主的な弁論大会において、思想的内容にふれることは勿論、わざわざ原稿を見ることすら必要はないはずである。

これに似た問題が、掲示物、配布物の検閲である。

この問題についての先日の合同H・Rの先生方の答えは、非常にまわりくどく、簡単に言えば、じつに下らない小さなことであったと思う。

なぜあのように下らない小さなことのために、わざわざ先生の所に行って見てもらう必要があるのか疑問である。

あれぐらいのことなら生徒の自主管理で十

分である。

これまで自分の考えを少し書いたが、言いたいことは、検閲をなくせとか、規約をあらためろとか言うことではない。

昔のことを、ああやった、こうやったと言っても何も生まれない。要は、なぜこのように、問題になったのか、ということである。

そこでなぜこのような問題がおきるか、といったら、先生と生徒の相互理解のなさだと思う。

これからは、色々な問題を考えていく上で先生と生徒が一緒になって考えていかなければならないだろう。

これは、言うこともないことかも知れない。けれど実際に、一緒になって考えたことがあるか。というと思いあたらず、常に、対立あるのみ、のような感じがする。

今、はやりの断絶とか言うものだろう。

これからは、先生と生徒が話し合って今よりよりよい物を創造していかなければならないだろう。

この話し合いは、高校ならではの、貴重な勉強であろう。

受験勉強がどれだけ大切であるか知らないが、やらねばならない勉強は、それだけではないであろう。

話し合いへの懐疑

二年　安田義一

ここ一・二年、話し合うということに、少々疑問を持ち、話し合いを懐疑的に、消極的な手段としてしか見れなくなっていると自分で自分を思う。

そこで、ここに主題である「話し合いへの懐疑」について、人に伝えるというよりも自分を懐疑的な考え方からいくらかでも脱出させるために書こうと思う。

妥協を生み出すための話し合い、結果の決まっている大勢力と小勢力の話し合い、事件、問題の後始末的な話し合いなど、「話し合い」と言えばきれいに聞こえるが、裏では相手をだまそう、いいくるめようと考えているのではないか。

現代のように、核エネルギーが兵器に使われている以上、話し合いで決着をつけることは大切で、またそれ以外にないようにも思われる。しかし、ここでの話し合いは、平等ではなく、勢力にものを言わせてのものとなろう。

こうやってみると、現在では、心からの話し合いは消え去ってしまったように思われる。

いや、昔からそんなものはなかったのだ、相手を完全に理解し、納得し合うことが話し

合いでできるだろうか。このことを肯定し、自分の意見、考えをそんな簡単に変えることができるのなら、前までもっていたものはいったい何だ。そう、そんなことは「ウソ」だ。

話し合いでの納得理解とは、つまり心からの話し合いとは、自分の場合で見ると、話し合っていて、相手から教えられたとか、相手が同じ意見を持っていた場合、すべてに、すべての意見に共鳴したように感じ、相手と握手したがるような場合ではないだろうか。

だから話し合いを利用した生き方、つまり、納得理解して相手から学びとったものを、自分の考えを完成に近ずけるための材料として考えると、話し合いで白黒をつけるという重大性はなくなり、話し合いを人生の参考書としても考えられる。つまり話し合いから学びとるという態度もでてくるわけだ。

でも、ここでまたひねくれて見てみると、脳のない参考書のようだ。

話し合いとは、この程度、学びとるぐらいしか脳のない参考書のようなものなら、「話し合いのない断絶」とか「先生と生徒の話し合い」ということが無意味なことのように、自分には関係のないように思えてくる。どうせ話し合ったって事態が急変するほど相手の考えを変えることができるわけでもあるまい。話し合いによって「納得」、「理解」という手段で妥協しても、それはいかにこちらを有利に運ぶかという、たぬきとき・つねのばかし合いではないか。

話し合いとはもっと純粋で平和的な手段であるはずだ。それとも、おれが、極端な結果ばかりを求めすぎるのか。そして、結局、懐疑からの脱出は成功しなかったのだが。

教師と生徒

二年　奥住邦夫

教師と生徒というかたくるしい問題だと思うが、現代の社会において考えてみるべき問題だと思う。なかには教師たるものは学問を教えてくれればいいという人もあるだろうが、しかしただ単にそれだけでいいものだろうか。人間同志の交流である以上それ以上のものがなくてはならないと思う。つまり教師と生徒

生まれたことへ

一年男子
○人間ははじめから自由じゃない
○生まれてくるべきではなかった
○大金持ちだったらな
○十年後に生まれたかった

女子
○他国に生まれたかった
○もう少しまともな人間として生まれたかった

二年男子
○もっと整った顔に生め

女子
○私が生まれなければよかった
○生まれたこと自体くだらない

三年男子
○なんと下劣な世に生まれたか

女子
○フィンランドに生まれたかった

との関係だけでなく、人と人との間の問題ともいえるのだが、対話の減少化によるものたりなさがあるのではないか。

現状では、ベルがなると出ていく。そして、授業内容も黒板に自分のノートに書いてあることを、づらづら書くだけで、生徒としてはまったく入りこむ余地のないといった感じである。やり方も2～3年前に使った資料で同じことをくりかえしているだけである。生徒が抗議しようとしても対話をさけてしまう。これではあまりにもひどいと思う。生徒がそれなりにうまくやればいいのかもしれない。しかしそんなものだったら、もうある学習熟ではやっていることだが、教師は教壇には立たずに、スピーカーから、なんやかんやと学問がながれてくるのである。そのティーチングマシンによる一方通行の授業とたいしたかわりはないではないか。何年か先になれば、教養というものも、機械が教えるようになるだろう。しかし、少なくとも現代は、人間らしさのある授業がしたいものである。こうなると人間らしさということが問題になるが、それをもっとも簡単に得やすいのが対話だと思う。相互理解も対話によっておこるものである、それが現在では受身の立場の教師と、消極的な生徒によって相互理解などおこるわけがない。現代の教師と生徒、たくさんの問題がある。今さかんになっている学生運動も、その一つだろう。そういう問題を解決するにも、対話の必要性は大きい。

昭和ブルース

二年　岡　常人

「生れた時が悪いのか、それとも俺が悪いのか……」歌の文句ではないが、全く平和でつかみ所のない世の中である。

こんな世の中で最近よく「このごろの若い者は……」等といったことばをよく耳にする。確かに最近の若い者は骨が無さ過ぎるのかも知れない。今の四十代の人々から見れば、現代の若者の行動は、彼等の常識をはるかに越えたものが有るだろう。

だが、彼等の青春はまさに灰色だったに違いない。戦争に始まり、戦争に終り、鉄砲かついで行進する事しか教えられなかったかも知れない。

もしそうだとしたら、もしそのまま頭がかたまったとしたら、彼等には現代青年を批判する権利は少しも無い。なぜならば、鉄砲かついだ時代と、ロングヘアーにパンタロンの時代では天と地の差が有るし、また彼等の若い頃には、戦争と言う名のもとに、世論がまとまり日本国はむしろ今より国として充実していたかも知れない。だから彼等にはおのずから力の発散場所が与えられた。

だが今はどうだ、ヤングパワーの発散場所はどこにも無い。チョット行動すれば大人の規制に会う。こういった事が、ゲバルト、高校生の退廃などという事の一因となっている事はまちがいない。

つまり世の中が悪いんだ。

こんな世の中にした責任者は誰か？

それは日本人全員である。日本人が余りにも優秀すぎた。たった二十数年の間に、打ちひしがれた小さな苗木を、あまりにも大きく育てすぎた。

また二十数年という年月が、ちょうど苗木のような頃の父母と、大木と化した時の子供

との年令に相当しようとは、何と皮肉なことだろうか。

現在考えていること

二年　平岡　隆

今考えていることと漠然と言ってもいろいろあるが、やはり現在行なわれている学生運動のことが主である。つい最近まで大学はもちろんのこと、伝染病のごとく高校においても紛争があいついでおこっていた。

この現象は70年安保闘争を展開するための政治的な思惑から一部の極左学生集団が学校を占拠したりバリケードを築いたり、街頭に出て鉄パイプや火炎ビンを持って、ゲリラ英雄気取りで騒乱をおこしたりして暴れまくって社会不安を作り出そうとしているあらわれであると思う。学生運動と言うと普通は彼らのことをさしている。我々の学校ではそういう封鎖さわぎはおこらなかった。学校での友の中には封鎖に賛成、反対、無感心などといろいろいるが、賛成だという者の中には、日比谷や宵山などの頭のよい学校がやっているから俺達もとか、紛争を起こした方がカッコいいなどという無責任なものもいる。こういう者達は活動家たちの叫ぶ学園の民主化だとか、掲示物検閲制度撤廃などという美化の中におどらされて、政治活動の中に引き込まれてしまう。彼らの目的は何かと思っていたら「革命である」と言う。彼らの演説を聞いていると、大学生のそれと同じ口調で簡単な内容のことを、わざと難かしい言葉を使って、相手を自分のペースに巻き込んでしまう。狂心的に反体制を主張しているが、それを体制側に利用されているのがわからないのであろうか。例をあげるときりがないが、機動隊の重武装や大学立法などがある。それに卒業すると手のひらをかえしたように大会社、つまり大資本に入って行く者もいる。だから、ぼくの場合今の学生運動（反体制グループ）は非常にいやである。彼らから見れば、ぼくなどは体制におどらされている人形としか見られないかもしれないけれど、今、彼らの行なっている行為を比べたらたいして違わないどころか、彼らの方がおどらされている人形ではないだろうか。もっと妥協的になって孤立化を防ぐべきではないだろうか。そうしなければ体制の思うがままである。

俺の言いたい事

二年

このごろ「考える」ということがすごく少なくなったと言われている。だが松高という学校の校風がそうなのだと思う。

全国の学校では社会や学校、及び先生方に対して不満を爆発させている。それは、いろいろなことを自分達独自の考えをもとにして行動しているからだと思う。その考え方は必ずしも大人達とは一致しない、でもそれがあたりまえだと思う。生れた時代が違い、そしてまた育った時代も違う、それで考え方が一致するのならおかしなものだと思う。

今、社会を動かしている人や学校の先生は我々とは考え方の違う人達だ、だから不満を爆発させて当然だと思う。今までの先生と生

徒という立場では、先生の言うことを聞き入れなくてはならない、でも考え方が違う人の言うことを聞く事が出来るはずがないと思う。そこで、自分独自の考え方で行動すれば悪いときめつけられる。だから先生方の言うことを聞いていれば良いことになる。したがって自分で考えて行動することができなくなってしまうのだと思う。社会にでても同じなら、教育の場である学校にいる時ぐらい自分の好きなことをやって、楽しく過ごしたいと思っている。

高校生の政治活動を見つめて

二年　片山英世

ぼくは、高校生の政治活動について賛成とか反対とかはっきりした態度を示すことはまだできない。それは多分自己思想の確立が未完成というよりも、確立することに恐れをいだくからだ。それはともかくとして、単なる一高校生として考える時、ぼくは世の中のおとなに対し強い反発を感じる。

というのは、おとなは「高校生の政治活動はまだ早やすぎる。いまは勉強だけをしっかりとやっていればよい。もっと世の中のことを知ってから活動してもおそくはない。」といって高校生の活動を禁止しています。さらに活動するものを処分さえします。それも一面正しくも見えるが、何かふっきれないものを感じます。

社会が流動するにつれて、いろいろな矛盾や不都合がぼくたちの前に姿を表わします。そして、高校生は純粋な考え方で、世の中の乱れた政治を改革しようと、一生懸命行動しています。また、高校生の活動を批判するおとなの中に、政治を真剣に考え、日本の将来を真剣にみつめる人が何人いるでしょう。そんなおとなでも選挙権を持ち、一票を投じることができる。(それさえもしない人がいるが。)

しかし、高校生が政治的なことについて社会に影響を与える為には、デモ等にうったえるのでしょう。そして、それだからこそ、おとなの現実第一主義に、世の無感心なおとな達に、われわれ高校生が現実とはややはなれた思想的な政治体制を再確認させなければならないのではないでしょうか。ゆえに、我々高校生は未熟でも自分なりに政治について関心を持ち、自分なりに現実の政治を見つめたいと思います。

学生運動へ

一年男子
暴力はいけない
○破懐の為の破懐なんかやめろ
○統一を望む
○筋がとおっていない

女子
○もっとエスカレートすべきだ
○先生との話し合いをもっと多く
○主張が完全なら賛成
○やめた方がよい。今のままじゃ暴力と同じ

二年男子
○程度もんだいだね
○過激な運動をすると一般の人々に反感をかって逆効果になると思うからもっと考えて行動しろ
○興味本位、うさばらしで封鎖、授業防害、ゲバ行動するな
○暇とヘルメットをもってこい
○騒いだ後の街を見た事があるのか

断絶っていやなことば

二年　加曽利益男

今の時代ほど教授、教師の権威、価値が下ったのはないんではないだろうか。自分の教え子たる学生に、ある時は「ふざけんなおまえらに」とか、ばかよばわれされたり、どつかれたり、それはもう目にあまるものがある。このような状況下で、なんとかこのまま名誉職にあって静寂な生活をしていこうと、象牙の塔に頭をつっこんでいる教授もあろう。今の地を守ることに専念している教授、又積極的にこの無惨な事態を収容させようとがんばっている教授、いろいろいるだろうが、その中の誰がこのような事態を想像してただろうか。いわんや時代を溯った江戸、明治時代のどの学者、教授が考えただろうか。

現代とは、社会も制度もたいへん違うその当時は、すこし比較がナンセンスかもしれないが、師の立場にあった人は今と違い絶対の力を持っていた。師をどつこうものなら、すぐに破門するほどで、又弟子からは信頼と尊敬の的であったに違いない。それが社会、制度が違っているがどうしてこれまで来たのか。なぜ断絶の時代だなどといわれるようになったのか。

断絶の時代といわれる理由はいろいろあるが、一つには今、社会全体がそういう時代の流れの中にある、と考えられる。又一つには、双方に対話をしようという自主的態度がなく、信頼感を持てなく、進行過程においてアンバランスであったように思える。前の理由はどうすることができないにしても、後者はどうにかできなかったのか。教授は学生をどのように見えたのだろうか。学生の未来、日本の未来等を考えていたのだろうか。又学生も教授を師とし、信頼してたのだろうか。今思うに、ほとんどそのようなことはなかったといっても過言ではない。

指導者（教授等を含む）は常に青年の心をさ

○自分達の乱した街のあとかたずけぐらいやったらどうですか、今のままじゃ日本から出されちゃうよ
○暴力はつかうな、政府のおもうつぼだ

女子
○集団心理で行動するな
○高校での学生運動ははやすぎる。

三年男子
○行動する前によく考えることだ
学生の一人一人の目標がはっきりしなくなってくる

女子
○あまり過激になるな
○もっと効果的手段を
○「ナンセンス」を乱用するな
○学生同志がまず理解しあうべきだ

っし、つかんでなければだめである。そして栄誉栄達にとらわれず、青年の未来へのの道を身を粉にして開拓するようでなければならないと思う。そしてその指導者を師とあおぐ弟子は、師を信頼し、がむしゃらに師に近づき、師の恩を返すようでなければならないと思う。

ぼくは今一人の師に師事しているが、その師は特にぼくら学生たちの為にあらゆる分野を開拓なされてる。そしてぼくらを信頼し、未来の希望をかけ、育ててくれてる。この弟子への信頼、希望がぼくら学生（大学・高校）約五十万人もの心を一つに結んでいるんだと思う。要するに、大切な事は、師たる人が確固たる信念を持ち、弟子を信頼しきっていくということだと思う。又師弟間とは、針と糸の様な関係だと思う。つまり、針と糸がある目的に進んでゆき、目的が完成すれば針には価値がなく、残ってる糸に価値がある、という方程式だと思います。ぼくはこれを、前に書いた師弟間、師弟不二の方程式の実証をもって確信するものであります。

このように、私達のまわりには多くの疑問が、考えなければならない多くの問題が渦を成し取り巻いている。これらの他にも種々様々のそれが。そして、松高生の多くの者が、それを持っているに違いない。

その中で、私達の一番身近で全員で考えなければならない大きな問題に焦点をあわせてみよう。

第二章

今、現在高校生

私達の身分証明書は、松原高等学校の保証のもとに成りたっている。高校生として。

〝高校生〟　私達もそれを成している一員である。

〝高校生〟に違いない。

そこで、私達のいうそれは、社会のいうそれとは、いかなるものか。

現在その〝高校生〟である私達が、自らそれを問うてみよう。

私の高校感

二年　岡田貴子

ポカポカと春のあたたかさが、あっちの方から来るような、肌寒い季節の、ある日。つまり、高校合格者発表の日である。ザワザワ

とうるさい騒音の中で、自分の受験番号を見つけ出した時、まず一言。「あっ、あった！」その時の嬉しさ、喜び、安心感は、何事にもかえられないものである。また、それと同時に新しい高校という世界への不安、あこがれ、希望が、心の中に現われ始めた。

不安とは……。ある晴れた日の昼さがり、友だちが日のあたる窓ぎわに集まって、何やら話していた。私もその仲間に入る。話題はもちろん「高校」のことだった。その時、私はもっぱら聞き役。兄姉のいない私だからである。ステキな兄さんを持っているMさんが、「高校には、落第があるのよ。」と言った。それは、義務教育の時代に聞いたことのないことばである。私の心の中は落第ということばでいっぱいになった。ちょっと、おおげさかな。でも、このことが不安ということばの意味をすることである。

あこがれ……。あの頃。今から三年ぐらい前の頃。テレビでは。「これが青春だ」「でっかい青春」「進め！青春」「何々青春」というように、若い人たち、中学生の心をグッとつかむような青春ドラマが流行した。ドラマの筋書きは、高校生の心理、友情、愛情、先生との交わり等をユーモラスにスピーディーに表現したものだった。だから、私は毎回見のがさずに見た。そして、誰もが起こす錯覚を私も起こしてしまった。つまり、これはあくまでもドラマの中の高校であるのに、何かこれが高校というものなのだという気持ちになってしまったのだ。ドラマの中の高校にあこがれた。理想の高校にあこがれたのであった。

そして、最後の希望だが……。前に述べたように、私は理想の高校というものにあこがれてしまったのである。だから、希望も理想の高校へ通う理想の高校生になることだった。騒音のない静かな一画。のんびりとした雰囲気の中に一つのエネルギーの固まりが、グラグラと煮えている。若さを感じさせるものがある。そして会話。生徒同志はもちろんのこと、先生と生徒の楽しい、時には激しい、またやさしい会話がある。生徒は先生を信頼し、先生は生徒を信用する。そんな一画へ、毎日毎日重いカバンをさげてこんだ電車に乗って、何かを得るものを求めて通うことが、私の夢というか、希望のようなものだった。

そして今。現実はそんなに甘くはなかった。理想と現実はおお違い。当然、今の私はあの頃の夢おおかりし時の私とは違っている。高校に墓場を見たというようなさみしい感じである。みんなを引き寄せるような魅力がない。毎朝、起きて顔を洗うのと同じように、一種の習慣のように学校へ通うのではないだろうか。寝むい目をこすりながら学校へ出て来てつまらない授業だと思うとこっそり抜け出して、ゴロゴロしている者もいる。高校はみんなを引き寄せる魅力はないのだろうか。利己主義の固まりの一個の人間が、机へに向って勉強する。そして先生は生徒から、あんなに遠くに離れた所にいる。生徒が先生に話しかけても、なんにも聞こえない。先生が生徒を呼んでもとどかないくらいに二人は離れている。なんとかならぬものか？　お互いが、人間の最も深い所にあるものがふれ合えば、なんとかなるかもしれない。

今、私はまわりから取り残され、孤独、一人ぼっちである。考えてみれば、みんなも一なのかもしれない。私が感じているさみしさを　ひょっとしたら、みんなも同じように感じているかもしれなき。先生も感じるとよいのに……。

高校生とは

二年　Y・H

今の高校は、大学受験のために、予備校化している。勉強一本やりのつめ込み主義をやっていると世間の人々は言ってくれる。だが我校には、その風潮はあまりなく、のびのびと高校生活を過ごしている自分なのだ。なぜなら、この環境に甘んじて、勉強に対する真剣さや、目標に向かって自分をぶつけようという意欲が欠けているからだ。

ところが、ヘルメットをかぶり、学生運動に加わったり、学校封鎖を行なって教師と対立している高校生もいるのだ。彼らは、自分の意見を貫くために、行動を起こしているのだと私は考えたい。彼らは、自分自身の小さな問題だけに悩んでいるのではない。彼らは、自分たちの力で、社会を改革していきたいと闘志を燃やしているのではないだろうか。けれども、おとなは高校生までが大学生のまねをして、あばれていると、冷たい目を向け非難する。

では、高校生とはどんな存在なのだろう。選挙権がないから、おとなの世界に入れないし、こどもの世界からは脱皮している。若いエネルギーを貯えて、さまよっている。さとう菓子のような甘い楽園に依存している。そして、教師と親に保護されている存在だ。この時期に得られた知識や体験が眠って埋まってしまってはいけない。いかに活用し、役立てるかが、高校生としての大きな課題であろう。人生を開くかぎを渡される。この問題に取りくめる判断力と思考力が具わっていることを世間は認めているのだ。

自分の意志を強く主張する精心と社会への関心をもつ高校生が養われることは、これから踏み入る社会において、たとえば政治への無関心さがある現状より、より民衆の意にそった政治が行なわれることになるのではないか。高校生とは、おとなへの準備段階であって、勉強だけに能力を費やすのではない。よりよい社会を作り出す源となる、大きな力を持ち、社会に推し流されない人格をもつ人間なのだ。とはいえ、まだ時代の波、社会に適応している無表情の高校生ばかりだ。

高校生の生き方

二年　T・U

昔の高校生と今の高校生との生き方は、かなり違っているように思える。生き方というと何か荘厳な感じがするので高校生のあり方とでもしておこう。こういう問題はよくホームルームで提起される問題である。そして結論は?というと、むろんそれが出てくるものではない。つまり問題があまりにも抽象化しすぎているのである。ここでは具体的な結論には突入できない代りに、そこで、私なりの結論めいたものを出そうと思う。

私からみた昔の高校生の一番の特徴として教師に忠実であるということである。むろんそれは皆が批判するに至らないであろう。そして、教師と生徒との信頼しあった関係も同じである。しかし現在の高校生は、例えば紛争のあったA高校。一つの理由として高校生の考え方が民主主義的になりつつあって、生徒の教師に対する信頼度がなくなったことも考えられると思う。ある意味では高校生の考

え方が、あまりにも飛躍しすぎて教師の考え方と矛盾している点もあげられる。我校でも第七項と八項の問題が生徒会でとりあげられた。それは生徒自身にある生徒会の総務に、その許可権をやらせてはどうかという生徒の強い要望に対して教師は、すこぶる反対らしき態度をみせた。K先生のストリップの写真を正門にはられてはまずいという発言は、やはり生徒を信頼していないように思えるのである。一例であろうが、まさか生徒がそんな写真をはるわけがない。A高校では逆に、ある女の教師が「あなた達は、それほどまでに先生を信頼できなくなったのですか。」と、泣きながら嘆きのことばを発せられた。我校ではまだ相方が信頼しあっているらしいので紛争らしきものの影はみえない。A高校とはかぎらないが、相方が信頼できなくなるとどういう状態になるかよくわかるであろう。

何か批評文に化していったが、私の言わんとしていることは高校生の生き方、あり方として、まず教師を信頼することがあると私なりの結論らしきものが出た。そして、そうした状態において高校らしい行動をしてゆけばよいのではないかということである。

学校生活

二年　川辺澄子

17才が高校二年、今まで考えて見なかったことを考える年頃だと思う。

私は、毎日何をする為に毎日学校へ行くのだろうか。勉強する為、クラブをする為。勉強してどうするの。教養を身につける為、大学へのパスポートの為、色々考える。

大学へ行く人達は、勉強にうちこんでいる。そしてクラブや生徒会の為に学校に来ている人達は、それに一生懸命力を注いでいる。私は大学へも行かないし、クラブやサークルにも入っていない。だから、学校に来ても身を入れて打ち込むことがない。

学生は勉強が第一だという。しかし数学の方程式、物理や化学の公式、古文、漢文が社会に出て何の役に立つのだろう。それに日本語もまともに読み書きができないのに、英語を習っている。

だから授業もなげやりになるのかと思う。恐い先生の時は、先生の方に顔は向けていても、頭の中は大体授業に関係がないことを考えている。そして他の先生の授業の時も、友達と話をしたり、本を読んだり、次の時間にあるテストの為に英語の単語をおぼえたりしている。こういう授業態度は、先生に対して失礼だと思う。

そして休み時間は友達とふざけ合っているだけ、放課後も友だちと話をする位です。

「勉強する為に学校へ行かないのならさっさと退学して自分のやりたいことをすればいいじゃない。」

「でも、学校へ行くんだ。」

「じゃなぜ毎日朝早く起きて満員電車に乗って重いカバンもって行くの。」

「なぜなのかしら」

「学校に何かがあるから。」

「そうね、きっと何かがあるからよ。」

「何かって何ンなの」

「そうね、私は友達がいるからかしら。」

その友達がいるから、友達と話している時は楽しくて時間も忘れてしまうほどです。でも私には友達も数える程だから、もっといろいろな考え方をする人と友達になりたいと思う。

しかしそれだけだろうか。今の私にはそれだけしか思いつかない。これからも考え続けると思う。

学校生活

二年　A・N

私には、たくさん友がいます。クラスの中やクラブやその他にもいろいろいます。そしてその大部分は、クラスや学年が違うのもありますが、学校の中で仲よくなった人たちです。だから学校生活の上で、諸問題がおこったらその大小をとわず一つ一つをみんなで解決していかなくてはならないのです。学校内での問題は、みんなで考えなくてはいけないのです。

このごろ「生徒と先生の交流」のことや「授業のあり方」などの問題がおこっています。生徒と先生の交流というものは、学校生活において最も大切な問題だと思います。この問題がおこったことは私はたいへんよかったと思います。というのは、今の学校で極端に少なくなりつつあった先生との交流について、話し合いができるからです。今までは、先生は教え、そして私たちはそれを身につける。という上下関係の中で、つまり〝授業〟の中でしか交流というものはなかったのです。それもほんの少ししかなかったのです。それが改善されるのですから、学校が今まで以上に楽しく、有意義になるのです。今私が話したことは学校全体でも、一、二回話し合いました。とてもよいことだと思いますが、せっかくこのように機会を作っても出席する人は三年生が主体で、二年や一年は少ないということなのです。これからは、特に二年生を主体にやっていくようにしていったら、もっと活発になると思います。

授業のあり方という別の問題があります。私は、この問題でよく友だちと話し合いますが、考え方の違う人が多くてまとまらないのです。まだ話し合いが必要だと思います。

今日のように、いろいろな面での学生運動がさかんになってきて、〝学校封鎖〟や〝デモ〟やその他いろいろと人々から批判されている学生がいますが、そのような中で私たちの学

学校へ

一年男子
○トイレを水洗に。
○校舎を鉄筋に。
○プールをつくれ。
○封建制度の城内。
○ネズミ・クモをかってるのか！

女子
○芝生を植えて。
○活気に満ちた雰囲気がない。
○講演会などナンセンス。
○校舎をきれいに。
○健康管理の面がよくない。

二年男子
○トイレがきたないし少ない。
○グランドがせまい。
○盗難が多い。
○検閲制度廃止！
○食堂のメシがまずい。
○行事をもっと考えてほしい。

女子

校は、先生と話し合い、とてもいい雰囲気です。これからも、まだまだ学校生活の中には、いろいろな問題が山ほどあります。そういう問題は一人ではできないのですから、みんなで力をあわせてやっていかなくてはいけないと思います。これからもつづく学園生活をよくするために、みんながファイトを持ってやっているのですから、「僕はやんなくてもいい」などというような考えはなくさないといけないのではないでしょうか。ことわざに「蹇も積もれば山となる。」というのがあります。みんなでやれば、その力は巨大なものになると思うのです。

高校生

二年　安島太一

まず私は真の高校生とはどんなものだろうか？　ということを考えてみた。私自身も、高校生の一人なのでなかなか真実というものを見きわめにくい。最初に高校生ということばから頭に浮ぶことばをあげてみた。パチンコ、麻雀、喫茶店、タバコ、酒、エロ映画、ビリヤード、ボーリング、カンニング、学生運動、……その他。こんなようなものを数えあげたらきりがなく浮んでくる。私は間違っても勉強なんていうことばは出てこない。なにゆえであろう。普通に考えると高校生と

○つかない電気が多い。
○規律がない。
○ハンでおしたような人間が多い。
○なんとなく無気力。

三年男子
○たるみすぎだ、厳しくなくてはならない時には権威をふるうべき。
○時代遅れの規則に生徒をしたがわせるな。

女子
○学校は教育の場であり、生徒を圧迫する場ではないはずだ。
○学校は生徒の味方かそれとも権力の味方なのか。
○日曜日に学校をもっと自由に使えるように。
○制服廃止。
○二階の廊下に水道をつけて。

いうものは、勉強することが仕事のように思われているのに、でももうこんな考えは古いのではないだろうか。そしてすぐ昔の人々は昔の高校生と、現在の高校生を比較する。でもそれは比較にならないと思う。それは世間も変化してきているし、環境も違い、そして物の考え方や態度も変わってきているので。でもあんまりこんな事を言っていられる時ではない。何か高校生というのは反抗したくなるのではないかと思う。でもそこにはなんらかの原因があるはずである。そしてそれが時としてうやむやにされることがある。

別に理由もなく高校に来た人も多数いると思う。私もその一人であるが、でも理由というものをしいて言えば、みんなが行くからではないだろうか。だから早く言えばなんの目的もない人々が集まって勉強をする。それでまたとりわけ理由もなく、大学へ行くのではないだろうか。もし前のことが真実であったならば無気力、無責任、無関心でもしょうがないと思う。でも高校生の生き方とは、もっと物事を純粋に考え、そして理想を追ったりすることではないかと考える。そして高校生だけにしかわからない喜び、悲しみを体験し人生に対して考えが深まり、社会に慣れていくのではないのではないだろうか、我々はまだ考え方が足りないと思う。だからもっとよく考え、そして一歩でも理想の高校生像に近づくように努力しなければならないと思う。

高校生の主張と行動

二年　磯部真理

去年の終り項になって、松高生の不満というものが、生徒会・先生・学校側などにぶつけられるようになりました。

〝不満をぶつける〟事によって、必ず進歩はあると思います。無論やる事をやった上ですけれども。ですから事なかれ主義で何も言わずに惰性的に過ごしている無関心派よりも自分の意見を主張し、行動している人達の方が、はるかに立派であるし、勇気があると思います。

ただし、ここには問題があります。それは不満をぶつけている人達の態度です。現在は主張ばかりして、行働が伴わない人が、あまりにも多過ぎます。例えば、先生がベラベラと講議するだけでなく、みんなで話し合えるような授業にして下さいと要求したとします。ところが、主張した本人は、その方向へ持っていこうと努力せず、受動的、自分で働きかけず相手がしてくるのを持っているだけなのです。そして相手がしてくれないと不満をぶつける。そういう無責任な態度、そしてもう一つの問題は、無関心派と主張派の対立です。授業、H・Rなどで、主張派の人達がそういう問題を提議すると、無関心派の人達から〝また〟というため息に似た声がもれます。ですから、いくら主張派の人達が責任ある行動をとったとしても、人数がはるかに多い無関心派が協力しなければ、どうしようもありません。

すなわち、中途半端な気持ちで、今の世の中に乗せられて、ここが不満だから、ここが疑問だからといって主張するのではなくて、よく考えてから自分の意見を主張し、より多くの同意を取って行動すべきです。

高校時代

二年　依木邦男

われわれ高校生は、世間の人々からおとなとも言われず子どもとも言われず、ただ、反発を感じて何となく過ぎて行く高校生が多いように感じる。しかし高校時代とは人間が生きて行く時、一つの大きな壁に突き当たる時期なのだと思う。またこれからの人生を楽しい思い出にするのもまた悔いの残るものにしてしまうのも今ではないかと私は思う。

その貴重な時期に現在の高校生は政治活動に参加するなど。高校の方は、大学進学のための一つの道具に過ぎなくなっている。

現在のような教育制度では、高校生が教育にまた政治に大きな反発を持つのも最もだと思うが、その際、自分自身を見失うような行動を、とっていたのでは結果的に活動をしている意味がないし、それどころか、かえって逆効果になるだけではないか。

こういう社会の中で、自分自身の行動に責任をもって行動して行くならば、高校時代は、有意義になると思う。

私は、高校とは勉強をしてクラブ活動を精一杯やり、教師とうちとけてお互いに信頼し合い団体生活を送って行く。

そんなことが、すぐイメージとして出てくるが、要するに高校時代という時期を無駄にしないで、勉強とともに多くの知識を求めるためにいろいろなものに興味を持ちとりくんで行くことも、とても必要なことだと思う。

ただ三年間がなんとなく過ぎたというのでは将来あの時こんなふうに行動すればよかったなどと、悔いの残るものとなるに違いない。なにごとにも積極的にとりくみ、自分自身に責任をもった行動をして行く。それが、真の高校生の姿だと思う。

高校生活とは

二年　佐藤明博

人間が生き甲斐を感じる時、それは、何かに打ち込んで行動している時ではないだろうか。また、ある人はこう言うかもしれない。自分の欲望が満された時、何か行動してみて自分が最高の力をだしえたと思う時、一番苦しい時を越えた時。

今の松高生が、どんな時に生き甲斐を感じるだろうか。親指の運動をしていて、自己最高に玉を出した時。それとも、麻雀で満款を出した時。公園でデートしている時。しかし、親指の運動や麻雀やデートは、その時だけのものなのでしかないし、家に帰って自分のことを行なうことも、ほんの少しの時間でしかない。それに引替え学校での生活時間の方がよっぽど多い。したがって、学校の生活で生き甲斐を感じられればこれほどいいことはないと思う。

しかし、松高生の約九百人の内どれだけの人が、この生き甲斐を感じているだろうか。はなはだ疑問だ。

おそらく3/4以上の人が感じていないだろう。それでは何がいけないのか。まず第一に、より多くの人と接しないことだ。学校に入学したてのころは、高校に何かしら希望をもっていて、そして友情、H・R、生徒会、青春とかといったものを一生懸命考え、友と議論す

ることによって接していたが、時がたつにつれ考えることがばからしくなって、ついには友と離れていってしまう。それが後でどんなことになろうとは知らずに！

第二に、今の現状に満足してしまうことだ。半年、一年たつと学校にも慣れて、一応の成積をとりはじめてくると、ぼくはこれでいいんだこのまま落ずに高校を卒業すればいいと思い、高校なんてこんなものかと思い始め八時三十分までに学校登校、三時三十分に学校の門を後にするような、なんの変化もなくまた変化も求めなくなる。こんな生活が、高校生活なのだろうか。

高校生活とは、もっと大切なものだと思う。むだに時間を過ごしてはならない。こんなことを言っているといくらかの人は、又だれかと同じようなことをいっていると思うかもしれないが、もう一度高校生活とは何で、どうしなければならないかを考えてほしい。

ここに掲げられている〝高校生像〟君のそれとはどうでしょうか。お互いに話し合ってみよう。

第三章　しかし　現実は

入学した当時のことを思い出してみよう。いかにその時

「なぜ、何のために高校へきたか。」

と、いうものがはっきりしていなかったにせよ、何かしらの夢を抱いていたと思う。ほのかなあこがれと共に。

しかし、今、私達はどうであろうか？

無気力と無責任

二年　野上恵子

私の囲りをみると大部分の人々が無気力で無責任に思える。そういう私もその大部分の中の一人ではあるけれども。しかし激しい学生運動は高校生にまでおよび活動をしている。これらの高校生には気力があるからこそ学生運動というものにエネルギーをぶつけているのだと思う。でもそれは少数の高校生だけなのだろう。封鎖している高校でもそれは少数の生徒が行なっているのだから。大部分の高校生はそれに積極的に参加もしないし、反対をすることもない。ただ口でそれらの活動を批判するぐらいではないだろうか。これらの高校生を無気力というのではないだろうか。

クラスの大部分が無気力のかたまりのように思える。というのは、学校へ来て勉強をする。そして授業が終るとさっさと帰ってしまう。ただ勉強するだけで機械的に高校生活を送っているだけなのだから、あるいは、授業をさぼることだけを考えている人もいる。しかし無気力は自分からつくっているのではないだろうか。無気力は毎日をムダにする。

無気力は人が一度は通るものであると言ってそのままにしておかず、それを通過する仕方を考えたいと思う。

次に無気力についてであるけれども、無気力と同じように無責任というのもクラス、あるいは私の囲りでよく見られることである。責任とは「なすべき義務」という意味である。高校生の義務とは勉強だけなのか、違うと思う。無気力の所で述べたのと同じに、勉強は大切であるけれども、他のものに自分のエネルギーをぶつけるのも一つの義務ではないだろうか。だから責任のある行動をしている高校生は無責任とは言えないけれどもそういう人があまりに少ないと思う。このようなことから気力があれば、自然に責任ある行動もできると思う。

最後に無気力については「無気力ではある。しかし行動をおこす仕方に何か欠けている。」責任は「気力があれば、そして関心というものがあれば、責任ある行動、考え方ができる。」と私は思います。無気力、無責任からの脱出は、まず考えることであると思う。ただ考えるだけではいけないけれども。

責任感と懸命なる行為

二年　金子　裕

日本の政治状態へ

一年男子
○自民党のやつら頭がいい、社会や共産はなんだよ
○民意を尊重しろ
○共産党を禁止し、運備強化核をもつべきだ
○米の犬になるな
○個人、個人の自覚がたりないために一部の政治で国民の政治ではない
○皇族制度排止

女子
○もっと若い人が政治をすべきだ
○教育制度を改めてほしい
○政治家がなっていない

二年男子
○税金はなにに使われている
○国民のことなんかちっとも考えていない政治、あきれかえってなにもいえない政治、こんな日本に誰がした
○日本は政府で成立しているのではない、国民で成立しているのだ
○強国に対してゴマをするな

女子
○日米安保条約反対、自分の国は自分で守るべきだ。それでなかったら武装するな、経済成長だけを気にするな
○革命をおこせ
○帝国主義打倒

三年男子
○公明党が恐しい、宗教団体が背後になにを思っているか

女子
○この世代ごとの集団ごとの差、行動の違いに対しておえらがたは何を考えているんだろ
○エゴと欲ばりのかたまり

我達は、責任感、物事に対して一生懸命やることが必要だと考えることはできぬのか。それとも考えることもできぬほど現代の人間は堕落してしまったのか。我は、近頃学校のクラスの者達がいやになってきた。こんな言葉は実際使いたくはないのである。二学期も終る最終日、大掃除が行なわれた。我は整美委員という肩書きがあるので、掃除だけはやらなくてはと思い、みんなに掃除をやるように言った。ところが彼らの中で25人もいてやるのは2～3人、まったくこれが現代の高校生だ。年配の人に今の者は働かぬと言われても、まったく仕方ない有様である。我が「掃除をしろ」と言っても、すぐ理屈だ。口だけは達者だがやることなすことまったくブットバシたくなることばかりやってくれる。我も正しいつもりで口うるさく言うのだが、他の奴らに嫌われてもという気持が起こってくる。こんな感情はいけないのだが。また人間関係のむずかしさを知らされるようである。こんな姿は実にみじめで悔辱せざるをいえない状態なのだ。ところが、私に快感を与えたこともあった。1月31日の紅白歌合戦、また全国大学ラグビーである。紅白歌合戦では、ブラウンカンに映る歌手がめだった。彼らの真剣さ、実にすばらしかった。私を快くさせてくれた。また秩父宮ラグビー場で行なわれた全国大学ラグビー試合である。すごく豪快なプレーを見せてくれた。やはり普段からの練習の成果だろう。試合中に怪我する人もでた。また試合終了後、顔をほころばせる者、くやしい顔をする人も印象的だった。この景観が現在の世の中、社会、教室、家庭、自我には欠けているのではないだろうか。すべて安全な道を、自分本意な考え、自分がよければ人はどうだっていいような考えがあまりに多すぎるのである。現代はスピード時代と言われるが、安全な道、自分の利害だけを考える世の人を創造するだけでは進歩とはいえないのではないか。便利になりつつある交通も、逆に交通戦争を導き、経済発展の裏には、まだ社会の歪みが多い。まったく矛盾した世の中だ。しかし、こうして考えると、いかに責任感、一生懸命に世を過ごすということが、人間を正しく発展させるかが、目に見えるようである。私達は、この世の混乱を批判するだけに終わらず、さらにこれらのことを客観的に考え、行為として行なうよう努めようではないか。

権利と義務

二年　阿久津千佐恵

昔の人は義務ばかりをしいられてきた。忠孝、そして納税の義務。しかし、戦後、日本人は、権利を主張することを学んだ。基本的人権の確保。でも最近、権利の主張はするが義務の遂行は怠っている人がふえてきてはいないか？　もっと義務をみんなが自覚すれば現在の混乱のいくつかは起こらなかったんではないかと思う。

たとえば、学園紛争。なぜ学校に対する不満が生じるのか？　それは、学校と自分との気が合わないからである。人それぞれに好みが違う。そしてそれと同じように、学校にだってそれぞれいろいろな特徴がある。だから自分の好みに合った学校を選べば、不満はないはずである。しかしこの世の中に完全無欠なものはないのだから、いくら自分の好みに合っていたからといって不満が全然ないはずはない。でも、もっと私たちが慎重に選んでいれば、もっと不満をへらすことができたのだと思う。

学校生活とは団体生活である。それぞれの好みをもった人が同じ行動を強いられる。だからこそ、不満が生じてくるのだが、その不満をすべて満たすことは不可能である。そこで妥協が必要になってくる。でもその妥協ができないというのが今の学園紛争である。もし、彼らに自分には学校を選ぶ権利があったんだから、校則を守る義務があるのだと思う心が少しでもあったなら学園紛争は起きなかったでしょう。

権利の裏には、かならず義務がついている。私はそう思います。権利や義務は、団体生活をしているときにはじめて生じるものであると思う。離れ小島でひとりぼっちで自給自足の生活をしていれば、権利も義務もへったくれもない。そこには自分の意志しかない。

私たちは、権利のない義務に苦しめられたあとで、たいへん便利な権利を知った。そのために、その裏でなりをひそめていた義務を無視してしまっている。もっと義務をみなおそう。義務とは、そんなに苦しいものではない、なのにだれも義務をみいだしてはくれない。

でも、理想の社会とは、義務も権利も、そんな言葉や文字さえも消えてしまうような世の中かもしれない。

十七才

二年　生田　潔

今の高校はまちがっている
高校は、大学の予備校じゃないんだ
それじゃいけないんだ
そんな偉そうなこと口では言っても
テストの前になればいつだって
旺文社の参考書をひろげている自分
暗記だけじゃいけないんだと思ったって
二時、三時まで一生懸命暗記する自分
結局、いい点を取りたいんじゃないか
大学へ入る為に勉強しているんじゃないって言ってみても
結局は、大学入試問題を解いている自分
テストがいけないんだと言ってみても
テストがなければ何もしない自分
みんな、みえじゃないか
勉強するわけでもないし
運動するわけでもないし
中途半ぱに生きているクラゲみたいなもの

無気力から抜け出る法

二年　水谷糸恵

「平穏無事」、なんと聞き慣れたことばだろう。この昭和元禄と言われる時代において私たちはこれをあまりに無感覚にとらえてしまっている。まるで空気同然に。私が生まれた時からそうだった。そして十七才になる今日まで、ずっと浸りっぱなしである。けれどその自分自身にふと疑問を持つ瞬間、それが私にとって自分を取り囲む小宇宙、あるいはその反対に外から見た自分を考える第一ステップとなりうる。毎日毎日を平穏に、たいしていい事もなかったかわりに悪い事も起こらなかったから、しあわせです。なんて生きて行ってよいのだろうか。これから逃れるためにはどうしたらよいかと、ジリジリするほど焦っていた時期があった。と過去形で言うより、目の前にあるどうしようもない壁から来るある種のあきらめ感を除けば、今も進行中だと言える。「脱出」、これを逃避ではなくひとつの出発なんだと書いた本があった。日常生活からの、家からの、学校からの脱出。この考えは魅力的に心に響いたが、私には観念論でしかない。なぜなら勇気がない。私が本当に求めているものは何なのかという事が確実につかめない。だからここで、私はしんから小市民的な人間じゃないか、他の人を批判する能力など持ってやしない、と失望したわけである。しかし、こう考えるのはまだ早い。私は抵抗しようと思った。何に対して?目的がない。私たちを取りまく社会といったら学校だが、一体その中に抵抗すべき強力な相手があるだろうか。高校紛争は、受験競争によってゆがめられた教育というのが主な原因だと思うが、それも松高においてはどっちつかずのまま、うやむやである。あまりに手ごたえがなさすぎる。しかし、しだいに最も強力な敵が何であるか明らかになりつつある。それは、とらえどころのない無力感、無気力というもの。これに各人が犯され続ければ、今と変わらぬ世の中の事はあなたまかせ。批判精神もなければ、めんどうくさいの一言で投票にもいかないようなたくさんの大人たちができあがるのだろう。大人たちだけではない。何も考えず疑問も抱かずに、ただ皆が行くからという理由だけで大学へ行く人、それよりももっと、高校教育への矛盾を感じながらも、青春を謳歌しつつ黙々と受験勉強に励み、それでいて大学を改革するために戦います。なんていう人々に耐えられない。欺瞞を感じる。あ〜あ、結局は形を変えた無気力にほかならないのじゃないか。

何かをしてやろう何かをしてやろうというだけで、青春時代は何もしないで終わってしまう、とだれかが言った。それにしても、無力感などからは程遠い、「ああ、あたしは生きているんだ」、というような熱い実感が欲しい！

私達は今、こうして〝高校生活〟をおくりつつある。一生のうちでも貴重とされているこの時期を。

にもかかわらず、

「高校生活、いかに有意義な目的を持ち、充実して過ごすか。」

と、いう課題のまえに、私達はあえなく屈してしまおうとしているのではないだろうか。頭の中では、理想的な高校生像を作りだしてはいるが、実践がともなわず、それを単に偶像、虚像化してしまっている者。又は、口ではりっぱなことをぬけぬけ言い、さも自分がそうであるようにふるまう者。又、そんなことは微塵の程も考えず現状の自分に満足しきり、ぬくぬくとすごしている者ｅｃｔ……。

そして、それらの者＝私達は、更になにものかの中に埋没しようとしている。

なにものかは、徐々に私達の内に陣どり、私達をマヒさせ、その支配の下に従事させようとしている。

なにものかが……

第四章

その中で……

誰もが、現在送りつつある高校生活に対して、疑問を、不満を抱いている。その中で、私達は毎日学校生活を送っている。口々に言葉とも何ともつかないことを、ブツブツくり返しながら。

——怠慢、無気力、無責任、甘いンだよォ！

そんな言葉が充満している現在。もうそんな言葉は聞きあきた。誰かが引っぱってくれるのを待っていないで、自分の足を作おうよ。その第一歩を踏み出す為に、隣の人と手を組み合って、二本の足を四本に、一人の声を二人の声にと広げて行こう。

終りかけた今年度を、その中で……〟で過した一年を資料として——

試験、しけん、シケン

毎日の私達の学習を、試験ぬきで考えることはできない。試験、これは私達を大いに悩ますものである。私達の中には、試験は苦痛である。意味がない、何故点数をつけるのか等の意見があります。とにかく記憶力のテストと陰口を言われる位です。一体試験とは私達にとって何なのでしょうか。

我々の仲間達が、試験に対して採る態度を分析して見ると、三つの型に分けることができました。先ず第一に出て来るのは、試験第一主義者。この世は全て試験の点数に左右されんとばかりに、学校に於ける全ての課外活動を無視して、ひたすら勉強に打ち込む。本を読む時間をさいても、教科書、参考書だけは読む。その代り、試験に関係ないと知ると、選択科目は、念頭になくなる。そして雑教養一切を不用と信じ、試験の点数がよいと、下手なエリート意識を持つ。それだけ勉強すれば確かに成績は上るだろう。又、卒業後の就職もスムーズに進み、自分自身チョットした

満足感にひたれると共に、口うるさい親達も嬉ばすことができるだろう。しかし、一見よい心がけであるかのように思えるこの様な主義の者は、ともするとつまらない人間になりがちであると思う。全ての事物の中で、最も価値のあるものは何であるかを考えることなく、勉強し、よい成績を採ることを最善の事と信じ、一〇〇点、一番という数字にあこがれる。たまたま試験という機会がめぐって来るのではなく、その機会について、綿密な計算の上で突入して行くという形で、勉強が好きでとか楽しんで等という感とは、ほど遠い。ただ、例題のものまねと、暗気力でその存在を維持しているようなものなのである。

この様な生徒は、俗に秀才と呼ばれる。彼等は、前に述べた通りであるから、勉強以外に特別な知識はなく、あまり話題も持ち合わせることなく、味も素気もない、平べったいおもしろ味のない人間になってしまう。そして学校を卒業し、試験から解放されると同時に、本も読まないし、勉強も忘れ始める。昔の習慣から、当然活発な行動が取れるはずもないし、ものまねと暗記から成り立っていただけに、自ら作り出す、いわば創造性に欠ける。ただ華々しかった（と本人は思っている）昔をいつまでもタテにとって、時がたつにつれての、少しづつの昇級だけをよりどころとして、職場生活を過すことになる。何とあわれなことであろうか。

そして第二型。これは前者とは全く異なった、試験一切無視の態度をとる型です。その中を更に二つに分けることができ、先ず始めは、怠惰な為に無視せざるを得なくなってしまう型です。

これは、一口に言って逃げの体勢といっていいだろう。これは、今述べ、又述べようとしている内で一番の弱者に当ると思う。

そしてもう一つは、物事の理解を深めること（彼等流に言うと、暗記力をためされること）よりも人間的な成長を重視し、人間として高度のものになろうとすることに努め、試験という、紙による薄っぺらい点数評価に耐えられず、又それにどうのこうのと左右されている者達を馬鹿馬鹿しいとさえ思い、ある時は嘲笑し、見下すのである。そんな彼等、成績は悪いかも知れないが、人生の何分の一かを負うこの高校三年間の中で、人間として又、人生のうちで、彼等自身それなりに価値

試験へ

一年男子

○本当にその人の実力をためせるような問題をやってほしい。
○ないほうがよい。
○試験は受験問題中心としたむずかしいものを。
○ペーパー一枚で人間の価値を決めるな、他の方法はないのか。
○一日前まで六時間はひどい。
○日程、範囲を早日に発表して。

女子

○一時間目からはじめてほしい。
○ならっていない先生のはやりにくい。
○追試があることが望ましい。
○定期テスト反対。
○一枚の紙ですべて決めてしまうのはよくない。

二年男子

○定期考査は無意味。

のあるものを獲得出来たとしたら、それは素晴らしいことだと言わなければならないでしょう。

しかし、ここで注意したい事柄は、常に自分の意見を再確認して、おし進めて行かないと、無軌道になりがちだということです。又無軌道になっても、それに気づかず、言い訳がましく理屈をこねるのは、鼻持ちならないということです。

ここで先ほど大部ケナした、秀才タイプの長所について書き加えておきたいと思います。それは、試験を目標として勉強という一つの事に打ち込んでいるということです。それによって、勤勉、真面目、克己等の面が発見されますし、創造性には欠けますが、正確な知識をそなえているということです。

そして第三として、これは理想態型となりますが、人間的、精心的な成長を求め、またそれを実現しつつ、試験を見下すことなく二者をうまくかみ合わせ、両立させて行くことです。とは言うものの、こう書いた私自身、こんな事が可能であるかは、解りません。

現在松高の中に於て、試験についての討議がなされた科目があります。特に対象とされたのは、現国の採点法、倫社の出題形式及び採点方法ですが、試験に限らず、普段の学習の方法についても、疑問、不満を持っている人が非常に多い。そこでこの単元では、試験高校課程についての意見、及び二年山崎君から出された、英語教育についての疑問、希望感等と、それに対しての英語科の倉橋、丹沢両先生の御意見、返答を記載しました。

試験

一年　斉藤文夫

明日は、試験3日目
もうすでに、2日過ぎた
2日過ぎた今、僕は今だにやる気もあせりも感じない
ただ、食べて寝ての生活のくり返しだ。
でも、ふと友のことを思う。
死にものぐるいの姿
睡魔と戦っている姿
でも僕にはみじめに見える

○今の型はやめるべきだ。
○ふだんから試験をやるようにしろ。
○先生の試験だけに信頼することが不満。

女子

○紙一枚で決まってたまるか。
○勉強しないのが多いからどんどんやれ。
○何のためにするの。

三年男子

○廃止。
○試験中、先生はウロウロするな。

女子

○点数本位はやめろ。
○試験制度はイヤダ。
○論文式の問題は点のつけ方をもっと慎重に。
○カンニングした人が出るなんて。

又そんな姿は学校でも見られる
一夜づけした真赤な目
教科書から離れない目を
それほどまでに友はうちこんでいるのにその姿をみじめに思う僕
何故？　何故？
今迄、何もしなかった為、無関係なことばかりやっていた為に居なおってしまったのが今の僕なのか？
逆に、僕の姿こそみじめなのか？
それとも、友も僕もみじめな姿をお互いにしているのか？
試験というものの為に？

試験について

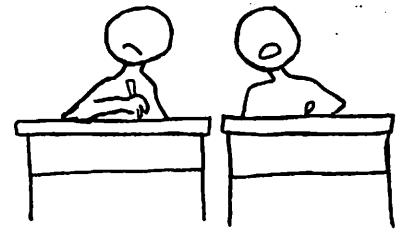
二年　M・H

今までの中間、期末その他数々な試験を受ける時、平均十日前ぐらいからあわてて勉強して試験当日になって、やまが当った、はずれたで大さわぎをして、ものの一週間もすると勉強したことの大半を忘れてしまう。そして進学、就職の試験を受ける時期になってあわててもう一度、勉強し直さなければならない。こんな事で試験はいいのでしょうか。

私が友達に「試験をやるから勉強してもすぐ忘れてしまうけど試験は何のためにするの。」と聞いた時に、ある先生が「試験のために勉強することは悪の骨張だ。」とおっしゃったことを友達は、はっきり今でも覚えているそうです。でも実際、嫌いな苦手な科目などの勉強は、切羽詰らなければ勉強しないし、試験が終れば、大半を忘れてしまう。また好きな科目でさえ日常の勉強は、最低の予習、復習ぐらいでおわってしまう。よっぽどくり返して勉強しなければ身について役にたたない。こんな事で良いのでしょうか。このようなことを考えることになったのは、同じクラブの友達から「試験は何のためにあると思う。」と聞かれて、いろいろ話しをしているうちに感化されてしまったのかもしれない。それともこんな考え方をしているのは私だけなのでしょうか。かと言ってこれといった方法もなく今までの慣習のレールにきちんと乗って脱線もしないで進んでいる。

また、これまでの試験でカンニングの問題がクローズアップされてきたが、カンニングをやっている人もこれまでに何人も見てきた。その人達の方が点が良いとなると、頭にきてしまう。そのような人達は、どんなつもりで高校になにしにきているのだろう。試験のために勉強もしないのだから。

私は、試験制度を変える必要があると思う。みんなが、不正なこともせず、自分の為に本当に勉強してその成果をためす試験が、真の姿だと思う。また、そうしなければいけないとこの頃つくづく思うのです。



高校課程への疑問

二年　熊沢尚登

昨年大学紛争の波が高校にもおしよせ、世にいう一流高校が封鎖騒動を起こしたと聞いている。その原因は、各高校において異なっているらしいが、都立上野高校では、学校側と生徒側の相互理解により教科の選択制をとり、ゼミナール形式による授業を行なっているとも聞いている。その方法においては、いくつか問題点があると思うが、これは生徒においていいことだと思う。

現在の普通高校においては、男子一九科目を勉強しなければならない。中学までは一般教養として勉強するということはわかるが、高校を準大学とするならば、将来自分の進むべき職業につながるものをより勉強した方が良策ではないだろうか。科目ごとに見てみると、国語や古典、これは日本人として必要なものであるから文句はあるまい。英語、これも将来充分に役立つことができるので文句はない。しかし社会、理科、数学、芸術、これらの科目を見ると社会人になるのに必要な基本的事項というものは、中学に於て終えているはずである。それを自分がなりたい職業にあまり関係ない高等的なものを無理矢理、頭に入れたって何の得があろう。ただ暗記力を試すようなものではないだろうか。

一学期の期末に書道のペーパーテストがあった。大昔の書道の名人とその作品名を答えさせる問題であったが、これこそ馬鹿らしいものそのものである。常識として王羲之ぐらいは知っているのは本当であるが、ぼくは書道の先生になる訳ではない。

高校一年では、まだ将来の事を考えていない人が大部分であると思う。自分もそうであった。故にこの時点では、国語、数学、英語、体育だけを、中学の復習を混ぜてやり、高二になる時、自分の将来の職業を考えて、社会、理科、芸術、家庭から幾つか選択すればよいのではないだろうか。いわゆる大学の課程を貸りるわけである。

今まで自分で考えたことをベラベラと書いてきたが、この考えにもたくさんの疑問点や問題点が残っていることがわかる。しかし現在の教育方法には、何か一本抜けているように思えてしょうがない。これを一つ一つ解決していって、明日の教育をになうのが私達の世代の任務であると思う。

外国語教育で感じること

二年　山崎正喜

現在外国語の教育に対して持っている疑問や希望を書いてみたい。

疑問の第一はなぜ中学から大学まで英語を学ばねばならないかということである。その理由としては、将来教養豊かな国際人となるため、ということらしい。しかし大学を出ても英会話ができず、英会語専門学校へ行ってはじめてできるように成ったということを、僕は聞いたことがある。こうしてみると僕には中学時代は高校受験のため、高校時代は大学受験のために英語を学んでいるように思える。元来ことばを学ぶ時には会語から学ぶのが本来なのだろう。それを現在は読み、書くことから学んでいる。これでは将来雑談によ

って世界の人々と話し合う国際人となりかねない。だから僕は中学高校にかけては会話中心の英語教育を望む。そして大学で読み書くための英語を学べばよいと思う。

第二の疑問は英語を教えること自体にあると思う。だいたい現在われわれが英語と言う言語を学ばねばならないということはどこからきたことなのだろう。僕はこれは戦前のイギリス、戦後のアメリカ合衆国という英語を国語とする、世界に大きな影響力を持つ国のためだと考える。そのため日本でも英語を学ばせることとなったと僕は思う。しかしそれでは日本人全体が英語を話す人々としか話し合うことがゆるされないこととなってしまったのでないか。日本全体の中にはフランス人やドイツ人やロシア人などと話し合いたいと思っている人もいるにちがいない。そのような人たちは英語を学びそしてまた学ぶといったためんどうなことをしなければならないのだろうか。ゆえに僕は外国語を学ぶことは数種の内からの選択にすべきであると思う。

第三に希望することは、全世界の人が同一の言語によって話し合えたらということである。その言語はまったく新しいもので、簡単で学びやすいものでなければならないと思う。現在使用されている言語は例外などを多くふくんでいるから。また現在では英語が最もポピュラーなことばとなっているのに、と言う人があるかもしれない。しかし英語を使用する人間は全世界で五億人をこえないだろう。残りの全世界の人口の$\frac{4}{5}$の人々が協力すれば世界共通語を実現することもいつかは夢ではなくなると思う。そうすることが世界の平和にすこしでも役立つと思う。そしてそんな時が来たら日本国民はいつまでも英語に固執するようなことがなく世界の国々に先駆けるようになりたい。

提案に答えて

英語科　倉橋淑子

提案は、三つの項目から成りたっている。第一は、英会話に重点をおくべきであること、第二は、英語以外の他の外国語を含めて自由選択制にすること、第三により簡単な世界共通語をつくりたいということである。特に第一の提案についてくわしく答えたい。

言葉は本来話すことをその基本的事項として含むから、会話が出来るということは、現在の社会状勢から考えても必須のことである。会話は、学校教育の中で大いにとりいれられるべきであるし、48年度から実施される新教育課程には「会話」がとりいれられているから、漸次その方向へ行くことは明らかである。ただ、現実の実施面においては、次のような問題がある。その第一は、会話の授業は一級当り二〇名が限度である。第二は、指導教師は native speaker がもっとも望ましく、それが無理としても、外国へ行った経験のある教師であること。第三には、ラボのような設備があること。この三つの点は、現在の状況から判断して早急に実現は不可能であろう。正しい会話の授業を行うために、教師の一人として、潤沢な教育予算と、教師の研修の機会を確保することを心から願っている。次に学校教育の本質論から考えるとき「会話」が、外国語教育の中で、根幹となる位置を与えられるべきものかどうか考えてみたい。学校教育は、単なる技術指導をその目的とはしない。教育は、目先の要求によって左右されてはならず、例えば、今日のめざましい技術革新の時代にあって、現在、企業が必要とする知識を学び、新しい機械の操作を学ぶことが時代にあった教育であるとするなら、その生徒が卒業した時点における社会は、より進歩をとげ、それらの知識は用をなさないであろう。学校教育とはむしろ、基礎的な力をつけ、いかなる新しい知識をも吸収し、理解する応用能力、態度を身につけること、更にいえば、現代社会の加速的発度によっておこる人間疎外を克服し、情報社会の中で自己を確立しうることを最終の目的とするものと考える。つまり、教育の課程は、文化遺産の伝達受容ではなく、生徒が自己の能力を社会的な力として確認し発展させていく形成課程である。学校教育も含めてすべて教育は、終極的には、自己教育に止揚されるべきものである。

第二の提案についていえば、英語以外の外国語を自由撰択出来るということは、大いに結構である。その主旨に異論はないが、現代の都立高校においてその実施は、きわめて困難である。しかし、独自の教育課程を編成し独自の教育予算をもつ私学においては、その例が見られるし、そこにこそ私学の独自性も又存在理由もある。理想論でいえば、勿論都立高校に於ても、英語以外にドイツ語、フランス語などはいうに及ばず、従来軽視されて来たアジア諸国で用いられている言語をこそ学ぶ機会が欲しいものである。

第三の提案については、一つの言葉の生成と成長の歴史に与えられる重さを考えるとき、より簡単な世界共通語が英語にとって代るとは思えないし、言葉は人間と共に生きているものである以上、大まかな規則をあてはめることはできても、例外のない規則はつくりようもなく、言葉を簡素化し、単純化する極限は記号となる他ない。遠い将来、英語にとって代る世界共通語がもし出来るとしても、私はその言葉が、生きているが故にもつ不合理性をもってほしいと思うし、それ故にこそ理性と感性を兼ねそなえた人間の心を結ぶ伝達手段となりうると思う。

疑問に寄せて

英語科　丹沢栄一

進　路

一年男子
○三年になってクラスを別けるな。
○自分の進みたい道を歩ませろ。

女子
○もっと早く、先生や先輩と共に話しあいたい。

二年男子
○進路に従ってクラスを別けて。
○自主性を認めろ。

女子
○予備校じゃない。

三年男子
○まわりでガタガタいうな！
○テストの点と螢雪時代とてらし合わせて未来をおしつけるなんて。

女子
○欲しいのはアドバイス、絶対的な答え・強要じゃない。

「外国語教育で感じること」嬉しく拝見しました。第一の疑問は、英語教育の目的についての疑問で、大学を出たのに英語もろくにしゃべれない。いっそのこと中学・高校の英語は全部会話にしたら……、という御意見だったと思います。

ところで、日本の英語教育の歴史は、英語の実用面と教養面をまさに交互に強調してきたと言えます。少し長くなりますが、概略申し上げると、イギリスの軍艦が長崎に到来してから、何はともあれ英語の話せる通弁（通訳）が要請された幕末の頃。西洋文明吸収のために英書講読に専念した明治初期。訳読主義の反動として生じた明治後期の実用主義。そして、最近では敵勢語として使用を禁止されていた第二次世界大戦中。終戦後再び世界に伍する為に要求された教養主義及びその反動等が考えられます。

こうした英語学習（英学）の流れに立って、英語教育を考えてみますと、実用面と教養面とを融和できる能力・資質の養成を、私達は目標としなくてはなりません。英語が話せ、読め、書ける能力は一朝一夕には向上しませんが、具体的には、現在比較的着過されている音声面の指導を強調し、バランスのとれた指導をすることが急務でしょう。ただ、君が言われるように、中学・高校の英語教育が会話中心の授業にすることは、現状の弊害を補う一助とはなりますが、やはり一面的になるのではないかと思われます。今後、高校に於て、英語会話、時事英語、速読、自由英作文等の領域が当然考慮されると思います。

第二の御指摘は、英語だけが外国語ではない、という趣旨かと思われます。結論から申しますと、その通りですが、英語を無視しての外国語教育はあり得ないということです。

現在、英語が中学・高校の教育課程で行われている理由は、御指摘のように、英語が世界に於て大きな文化圏を構成し、他の言語に比して、理解する人口が格段に多い事実があげられます。更に、御承知のように、ヨーロッパ、アジアの多くの言語は、インド・ヨーロッパ語族に属し、何らからの共通点を持って居ります。その中で、英語は比較的語形変化が少なく、非常に受容性に富む言語として、代表的な言語の一つとなっています。私達はこうした文化的・言語的位置づけをしてから、英語を学んでいると言えるでしょう。

私達は、英語だけが外国語だなどとは決して考えては居りません。例えば、現在の学校制度に於て、中学でも高校でも外国語として英語以外の言語を扱ってもいっこう構いません。事実、カトリック系の学校では、一貫してフランス語が、英語以外に指導されています。私は英語をまず第一外国語として中学・高校で「必修科目」として（現在は「選択」）、高校の二年頃から、是非とも更にもう一つ外国語を学習して頂きたいと思います。世界情勢から判断して、英語・ロシア語・中国語が重要な外国語になると思われます。

第三番目に、世界共通語を提唱しておられたと思われます。バベルの塔以来、人間は言語を異にしたと言われ、その為に幾度となく誤ちを繰り返しております。世界の人々が意思を疎通し合うことのできる言語があればなあ、と誰しも願っていることです。

現在迄に、世界共通語の多くの試みがなされてきましたが、エスペラント語程、影響力のあるものはありません。私の調べた範囲で申しますと、ポーランドのザメンホフという人が一八八七年公表したもので、主としてヨーロッパの言語の中から、共通の単語を一九

〇〇語選び出し、それに接頭語、接尾語を加えて自由に新語を形成するものです。文法組織は非常に簡単で、母国語の$\frac{1}{6}$の時間で修得できるとさえ言われています。

ところで、そもそも言語は、歴史的・地理的・文化的背景を持つものですが、残念ながら、人工語にはそれを余り期待できません。エスペラント語がエスペランティスト（推定約四〇万人・一九六七年）の間では隆盛をきわめているのに、未だ本当に世界語になりきれないのはこうした理由のためと思います。

現実の問題として、多くの言語が世界に存在しています。言語を異にするということは、人が個性を異にするのと同様と思われます。個性を無視して、人間性を理解することは不可能ではないでしょうか。同様に、言語の相違を認めた上で、改めて言語を見直してはどうでしょう。棚からぼた餅式に素晴しい世界共通語を待望するのではなく、現実の外国語を学習することによって、人間同志の相互理解を一層深めたいものです。

君が指摘された疑問に対して解答にはならないかと思いますが、参考にして頂ければ幸と思います。

松高　1/18

我が松高、一、二、三年合わせて十八のH・Rから成立しています。そのどれを取り上げても、決して同じものはありません。そのホーム特有の雰囲気は、戸を入っただけで感じられます。ここでは、その対照的なクラス二つの例をひいて、現在の松高のH・Rのあり方をさぐってみようと思います。

「今の生徒会をどう思いますか?」

「別に何とも……」

「H・Rの状態はどうですか?」

首をかしげて、

「……」

後は意味のない笑い。

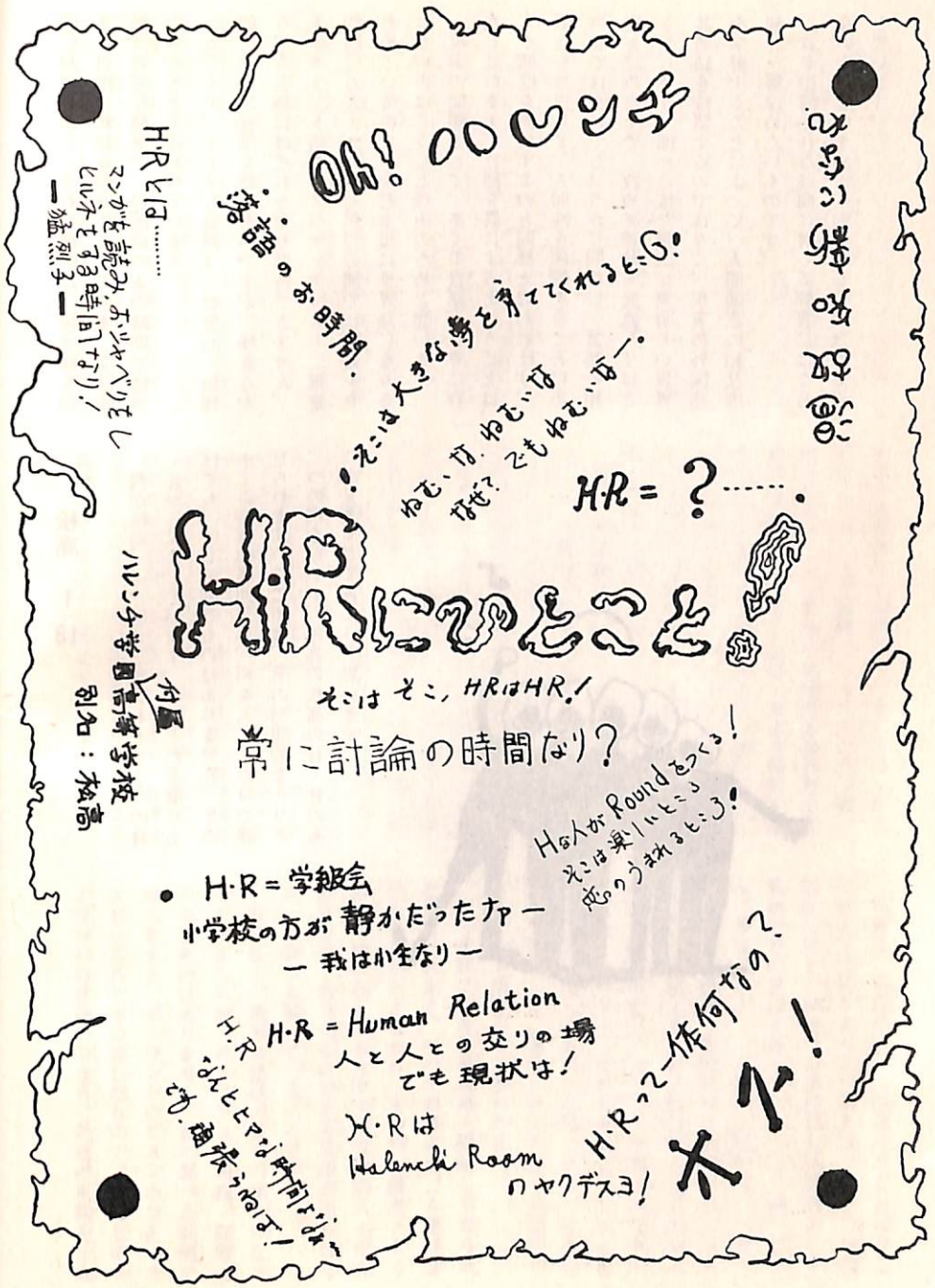
そんな生徒があまりにも多すぎやしませんか。ウソだと思ったら、先ずH・Rを思い出して下さい。

意見が出なくて困っているあの議長の顔を、下を向いて一心に内職をしている人を、関係のないマージャンの話等に花を咲かせている人を ―― それでいて私達は、アンケートの答えには、チャンと「H・Rは必要である。」「生徒が自主的に運営して行くべきものである。」と書いているのです。時には、一体松高生は、現在の高校生活について考えていないのではないだろうかと、疑問に思うこともあります。

身近な例で私のクラスの、H・R風景をとらえて見ますと、議長一人が大奮闘。「何か意見ありませんか?」 みんなは下を向いて、いるだけ。手を上げて意見を述べるのは、いつもお決まり。そして議長が指名し始めると、「今考え中です」「〇〇君と同じです」「わかりません」が続く。断続的な話と沈黙のくり返しで五十分が過ぎてしまう。チャイムが鳴ると、そこここでホッとため息が出るという程。我クラスの連中にしてみれば、水曜の六時間目は、さしずめ魔の時間というところでしょう。しかしみんなはH・R終了後「ああ 今日はシラケた」と言う。最近では「今日もシラケた」に変りつつある。そしてその原因を私達は〝自覚が足りないからだ〟とする。

世の中、自分が進歩、成長するのを望まないものはいないだろう。成長ということばを使ったが、これはもちろん、身長、体重ののびを示すものではありません。どこかの教科書にあった「精神的向上心のない者は、馬鹿だ」というアレです。

学問以外に〝自分〟の範囲を広げる方法としては、本を読むこと、そして考えること、その適切な方法をとって行なうことはできるでしょう。しかしそれでは、自分の殻の中でのできごとに終ってしまうことになるのではないでしょうか。それを内外共通に、通用するものにするには、何らかの方法をとって、外に出し、外界の他のものと比較して来るこ



とが必要なのです。自分の考えを、外界に伝達する方法として、ここでは、話すこと、書くことを上げておきましょう。

となると現在　私達はとかく書くことに手を抜いていると思います。現に、このル・クールに寄せられる原稿についても同じことです。書くことよりも、早く、簡単に伝えることができる〝話す〟方に大いに頼っているせいでしょう。

また、結局一人一人が考えねばならないのだという点に立って考えると、そのことに対して一番の刺激となるのは、他人がこれだけ進んだということなのです。したがって、それを知る為には、意見交換が必要になって来るのです。

そして、その意見交換には、雰囲気作りも大切な一事項であるということを、ほとんど全員が身を持って体験したクラスがあるのです。

ではそれを御紹介しましょう。

（参考・このクラスは、二年C組。担任は体育科の清水先生です。）

H・Rって何だろう

―ある模範クラスの記録から―

まあ皆さん僕の話を聞いて下さい。

この波乱に満ちた世の中で、松高と言うすばらしく、そして美しさに満ちあふれた（外見だけではなく、むろん中身もです。）学校に入って来た事を誰れも悲しむ者はいないと思います。たとえいるとしても八百人前後でしょう。

そしてそこには優秀な諸先生方の愛情に満たすばらしい教育のもとに非常に楽しく学問を学ぶ事ができます。したがって他校に見られる教師と生徒の間の断絶と言う様な事は、大半の生徒を除いては全くと言っていいほどみられません。

一等船室の様な、各教室内は夏は暑く、冬寒いと言う点とも勉強しやすい作りになっていて外気を一杯取り入れた、そんな自然環境の中で僕たちを強くたくましく育ててくれます。

まず校門を入ってごらんなさい。僕達の将来を予想するかの様に高く天にむかってスクスクと伸びる木。その下で弱々しく咲く花。

上を見れば常に未来に向って進むすこしばかりくるった時計。ピカピカと顔のうつる廊下を夢みながら戸を足であける時そこには僕を待っていたかの様に僕の瞳を見つめる彼女達の軽蔑の目、いや尊敬の目。そして一歩進めば我がクラス、我がH・R。

そうですH・Rです。

しかし皆さん。そんな松高のH・Rって何んだと思いますか。

「だめだめ。百科辞典を見たって。でてるわけがないでしょう。それごらんなさい。」

この辞典にも出ていないH・Rっていったい何でしょう。

僕はある模範クラスの、H・Rの状況を調べてみたんです。まあ聞いて下さい。

一週間の授業の中にH・Rという授業があるでしょう。その時の事でした。

まず初めにクラスの中から強制的に決められた議長が一言ポッンと言いました。

「何か議題はありませんか。」

「……。」

十分過ちました。二十分……。三十分……。

議長が言いました。

「何かありませんか。」

四十分……。　五十分……。

その間みんなの口はチャックでしめたように開こうとしません。しかし五十分たつと皆すこし開き出しました。そしてポツリと言ったのです。

「時間が来たので終ります。」

むろん議長が言ったのです。

これぞ松高の模範クラスのH・Rです。

しかしです。そんなクラスにある日突然すんばらしい事が起きたのです。

移動H・Rです。それは僕たちの毎日の行いによって、また校舎にあわせて先生方の間だけの意見によって千倉に立てられたそれは美しい僕達の為の別荘へ行ってH・Rをやろうと言う事でした。またこれは松高はじまって以来の事でもありました。

いやなんとすんばらしい事でしょう。

いままでもまとまっていたクラスをよりまとまりを深めようと言う事でした。この様にすばらしい考えを出したのはほかでもない担任の先生でした。

やあ、やはりすばらしい松高の先生です。

それではすばらしい考えを出して下さった先生のH・Rに対する意見、移動H・Rに対する意見を聞こうではありませんか。

二・C担任　清水　博夫

ホーム・ルームの持っている意味は非常に深いものであり、かつ現在日本の教育の根幹をなすものでありますので、もっとも研究され現実にも立派に経営されておられる先生が適当かと思われますが、恥をしのんで理想と現実に悩む姿を書きます。

現在、高校ではホーム・ルームの時間が、週一時間設けられ、先生も生徒も当然として受け取っていますが、戦前の日本の教育になかったものであることを先ず指摘しておきたいと思います。そして戦前は教科指導が学校教育の全てであり、教科外指導はほとんどなされませんでした。戦後はその過りをあらため、学校教育は教科指導と教科外指導の両面から成り立っているという考えからホーム・ルーム活動として、誕生したのです。

そもそも、ホーム・ルームというのは一八七〇年代にアメリカの中学校に発生したといわれ、学級より、小ちい生徒集団で構成され家庭的な雰囲気のうちに、生徒の活動や先生の指導が行われる基盤とされているものです。従って、現在われわれがおこなっているホーム・ルームとは構成の上では異なっていました。それは教科書指導と学級事務処理の場である学級と未来の夢を育て、現実の悩みを話し合い、過去を語るホーム・ルームと区別されていたことを意味します。そしてそこには先生と生徒の関係ではなく、親と子、兄姉と弟妹という関係が成り立っていたわけです。それが現実ともなれば学級事務処理の場、又、先生からの一方的な道徳性の押しつけや教科指導の補助機関になりさがっている傾向が見られる場合と、生徒の自主活動の場であるから先生は干渉するなとばかり雑談と自習時間の代用とレクリエーションにのみ力をさくホーム・ルームができてしまうことは本来の目的から著しく、はずれるものです。そのこと

はホーム・ルームを構成している人達がもっとも注意しなければならない点です。

ではどうすれば理想的なホーム・ルームが現在のような構成の上でできるかを考えなければならないと思います。文部省の学習指導要領にも目標・内容等でしめされていますが、それをそのまま棚ざらしにせず、長所を十分取り入れたホーム・ルームの性格にあったものにして具体的な運営プランを作成していかなければなりません。

次に、二年C組でおこなっているホーム・ルームについて概略述べ反省を加えて御批判をいただきたいと思います。二年C組では、朝のS・H・R　水曜日のL・H・R　それに放課後の終礼をおこなっています。松原高校では年月も浅く、はじめてのホーム・ルーム教師となった私には生徒諸君との話し合いをするいとまもなく、半ば強制的に実施しました。そして私の案としては朝のS・H・Rを大切にし、完全なものにしたいと思い、一学期は自由題による三分間スピーチ。二学期は各行事に対しての参加心構えや反省を主にし、三学期は輪番に「一日一言」を読解しいろいろな角度からの物の考え方をかじれるようにしました。そしてその中からホーム・ルームのまとまりや考え方が生まれ、自己の未来の開発に、又公民としての資質の向上に役立つべく、努力したつもりであります。唯、反省としていえることは一学期のできはよかったと自負しておりますが二学期は十分とは思えませんでした。

L・H・Rは　本来ならば年間計画を当然四月当初に作成しなければなりませんでしたが企画委員会の要望を入れ前期と後期に分けました。著しい社会的変動の中ではやむを得なかったと思っています。その運営方法についてはH・R議長を中心に企画委員会にまかせましたが前期はともかく後期においては私との話し合いが十分できなかったことが残念でした。しかし、まだ十分時間的な余裕がありますので、よくなることを信じています。

又、一つの新しい試みとして十二月十八・十九日の両日にわたる宿泊ホーム・ルームを実施しました。動機は二方面に分かれておこなった修学旅行の功罪の罪の方が深くなっていったからです。希望の方面に行くことは非常に良いのですが　それが成功すればする程ホーム・ルームの中に二大潮流が出来ることになったのです。それを稿正し再び全員心の通い合うものにするためにも、共にいつくしみ、語り合う場が要求されたわけです。その結果は十分な成果が収められたと思います。又、私との垣根も少しは低くなったと思います。終礼は　私が学級担任としてのその仕事の処理の場として設けたものです。ホーム・ルーム教師としての顔と学級担任としての顔の使いわけのように受け取られるかも知れませんが、なかなかうまくいきませんでした。これからの期間大いに努力し十分な成果を上げるようにしたいと考えています。

最後に、よりよきホーム・ルーム実現のためには初心にかえり構成人員の減少、又施設、整備の充実が是非必要であることを附記しておきます。

しかし、この様な意見を生徒はどのようにとっているのでしょうか。一部ですが聞いてみたいと思います。

去年の四月一日。僕はあの感激を今も忘れられません。ああ、あの日の朝、僕は一年をもう一度やりなおす可能性を打ち消しながら校門をくぐりまきた。時計台のすぐ下の大きな広場に群がる大群衆にもまれて、そして見たのです。はっきりとこの目で、僕が二年のあるクラスに入っていることを。間もなく、各教室ごとに分かれ、僕はそこで新しいクラスメートと顔を合わせたのです。もう一年近くになろうという今ごろに言うのは恥かしいのですが、とても良い仲間たちでした。そして担任の先生も。あの日から毎日、僕は新しい気持ちを持ってクラスに臨み勉強に励んできました。そうやって僕が今に至る事ができたのはひとえにクラスメートの励ましと援助のおかげでありましょう。しかし、外の者から見ればかなりまとまっていたこのクラスにも、一つの大きな問題があったのです。

事の初まりといえば七番君でした。ある時彼はH・Rでこう言ったのです。

「僕たちは一見まとまっているように見える。他の者もそう言う。しかし、これで良いのか諸君。現在のこれは本当のまとまりではない。まとまるには心の結びつきが必要心となんだ。」

彼をはじめクラスの者はこれについて考え、話し合って来ました。そしてついに十二月十八日に千倉の寮に行って、一晩同棲する事になったのでありました。

新宿の所定の場所へ行くと、大方の者はもう来ていた。黄色のネッカチーフ、真っ赤なセーター、緑、青、ベージュのズボンにピンクのアノラック、そしてスケスケにミニにパンタロン。できるだけ高校生らしく質素なスタイルをして来た彼らは、一段ときわ立って見えた。

列車の中。前日までのテストの事、千倉の事、女の事と話しがはずんだ。話題は尽きない。中には話しに夢中になって大声でわめきたてる四十七番さんのような人もいたが、とがめる客はいなかった。

館山から千倉まではバスである。みんなは争ってゆずりながらバスに乗り込むと、シート

カバーをはずしたり、そなえつけの花びんを取ったりしてバスの中をきれいにした。バスの中は楽しい。みんなガイドの説明をソッポを向いて聞きながら、ガイドさんをけなして楽しんだ。やがて歌を歌うことになった。他の人を引きたてようと互いにゆずりあって楽しい沈黙が続いた。ここで初めてみんなの求めていた本当のまとまりの精神が表われたのである。七番を初めクラスの者はそれをみとめてとてもうれしそうだった。

やがて寮に着いた。とても大きな集容人員五十名程度のビルディングだった。広大な庭には一周三十メートルのトラックが取れ、近くの海岸でちょっと大きな波が起ると、しぶきが建物にまでそそぎかかった。廊下は二百三十番の紙ヤスリのようになめらかで階段はロッククライミングを思わせる上りやすい急角度だった。

まもなく自由時間となる。それぞれの小グループをたくさん作って、彼らはとてもまとまっていた。中には僕のように一人でまとまっている者もいた。やる事の何もない、とても充実した時間の後、前後左右の人と膝をつき合わし、背中をくっつけるほど広く、ゆったりとした大広間で夕食をとった。小食の四十一番さんは、おかわりを五回しかしなかった。十数杯もの飯を食い続けていた五十二番さんから食物をひきはなして、滑水先生の世界史特別授業が初められた。みんなは興味を持って、あくびをしながら話しに耳を傾けた。八番君は

「全然おもしろくない。こんな所に来てまで勉強する必要はない。」

とは言わなかった。又十六番君は、

「これはきっと世界史の先生のさしがねだ。オレたちに無理矢理世界史をおしつけようとしているのだ。」

とは言わなかった。それから二十四番君も

「こんな事でクラスがまとまると思っている。先生なんて単純だ。」

とは言わなかった。その特別授業も一時間程で終り、みんな残念そうな顔をして喜びながら各自の室へ帰って行った。僕たちのとなりの部屋では八番、十一番、十七番、二十三番、二十四番、二十五番君たちがギターをたたき鳴らして、最新のヒット曲〝パラパラ〟をそれぞれの個性的音階でわめきちらした。その力のこもった声には現代をになって立つ若者

H・R

一年男子
○学校側の圧力を受けない自主的H・Rを開きたい。
○形式的にすぎ中味がない。
○雑談でいいじゃないか。

女子
○参加への空気なし。
○自主的H・Rへの努力がたりない。
○H・Rのとき話すことがないなら帰らしてほしい。
○寄空ホームとか、千倉へ一泊するH・Rをしたいよ―。

二年男子
○議長はもっと自主性を。
○一部だけでなく皆の意見を述べる。
○遊びの時間じゃないんだ、討論の場なんだ、もっと考え、意見を出し合って人間一人一人が密接な関係となっていきたい。
○無関心ばかりなのがいる。

ソウルがあった。またもう一方では、一番、二番、三番、四番、五番君達が男女かまわず外来者を稽古台にしてプロレスの訓練に余念がなかった。二番のコブラツイストに威力はなかったが、赤い死の仮面――四十二番さんの体当たりは強烈だった。

そして金と暇にものをいわせた十九番と、その金につられた六番、七番、九番、十三番、十四番、十五番と連中は十九番の8ミリで寮内をロケして回り、『彼と彼女の場合』『あなたごのみの』等、数本の〇〇〇フィルムを製作した。

二階にいる女子は何をしているのか、何の物音も立てず、あかりも消えていたようだった。いったい何をしていたのだろう。不思議、実に不思議！いまだにそれを解明した者はいない。

夜のため外出は禁止されていたので、みんなそれを守って、外へ出る者はほんの十人程しかいなかった。

時刻も十二時を回って、となりでかき鳴らすギターとはり上げる声のほかは何もない静寂の中で僕は本当に来て良かったと思った。誰かがぽそりと、

「つまらないなあ。」

と言わなかった。その夜は明りを消し、一睡もせずに眠った。

朝がきた。朝食のあとは話し合いの時間だ。題材は安保問題、世界史は必要か否か、我々は松校に何を求めるか、パチンコはどこが良く出るか、自由課題などにわかれたが、自由こそ人間の特権とばかりみんな自由課題に集まった（？）三十分たっても口を開こうとする者はいない。僕はだんだん楽しくなってきた。まったく良いクラスだ。良い担任だ。この旅行もすばらしかった。ウヒウヒ、ウヒヒヒ、ヒーヒヒヒヒヒヒ、ギャハハハハ、ウヒウヒ……。

みなさん！クラスがまとまるという事は、かくもすばらしいことです。楽しい学校生活を求める君、今年もまとまったクラスを作ろうではないか。

また次のような意見もあったのです。

とにかく大きな事をやった。今までのホーム・ルームのイメージを百八十度転回したと

○だらだら話し合って結局、中途はんぱに終ってしまう、もっと有意義に使え！

女子
○先生がしゃべりすぎる。
○皆で積極的に意見をだせ。
○H・Rについてもっとみんなで考えなくてはいけない、そうしないかぎり現体制打破はできない。
○わからなくても一生懸命に聞くべきなのに

三年男子
○討論を大いにやってほしい。
○無責任な議長はやめさせるべし。
○生徒会や他のH・Rとのつながりがない。

女子
○一人一人の自覚を望む。
○みんな無気力だ。

言っても言いすぎではないだろう。だからといって今まで我々のクラスがすばらしくまとまっていた現れかというと、かえってその反対だ。文化祭・体育祭というまとまりのチャンスを逃したことも事実だ。これではいけないと一部からこのすばらしい名案が出て行なわれたわけだが、とにかく有意義な一泊二日の移動ホ後ム・ルームであった。またこれを実行するにあたって、担任の先生の暖かい指導を感謝せずにはいられない。

F・T

以上の様な事から考えると単なる play に思われるが、しかしこの様な事からH・R活動を見いだすのも一つの方法ではないだろうか。あなたのH・Rをもう一度見つめて下さい。

Y・T

かなり文章が適当で、どこまで信用していいのかわかりませんが、実のところ、これは大変成功と言われ、他のクラスはうらやましく思っている程です。クリスマス会、新年会等を利用して、クラスの仲間の親交をはかったクラスもかなりある様です。

とうとう一年間沈黙を守ってしまったクラスもあるでしょう。しかし五十人という人の集まり、その中には貴方が知らなかった何かが秘められているのです。そんな点に於ても、H・Rの重要性を考え、一年間、冬は冷房、夏は暖房の教室で、一緒に過した仲間から、お互い何かを得て、高校時代の証拠としようではありませんか。

先生に問う

ル・クールでは、十五号以来先生方の原稿が一つも載っていませんでした。

そこで今号では、昨年中に対話がないと叫ばれ、私達も事実、授業中以外はとかく敬遠しがちであることから、先生方の原稿を少しと思い、その方法として「なるべく多くの先生方に、私達が一番聞きたいこと」と、このアンケートを作成しました。

このアンケートをお渡しした時、先生方は

先　生

一年男子
○勉強をおしつけないでほしい。
○わかるように説明して。
○コンピューター、教える機械。
○生徒との対話を深めよう。
○先生の方から接近して欲しい。
○もっと権威をもて。

女子
○生徒の理解できるような授業を。
○ベルがなったらすぐやめて。
○自分一人でやってるみたい。
○もっと親しみやすく。

二年男子
○年の差だね。
○ティーチングマシンにならぬよう。
○対話を。
○生徒の政治活動にもっと関心を。

女子
○授業には五分以上遅れて来るべきではない。

ほとんどといっていい程口をへの字に曲げて、うなっておられました。紙などには到底書ききれる問題ではないとは思いました。が、あの先生があんな事を書いておられたということを思い出して、先生方に話しかけるきっかけとして利用できたら幸いです。

委員の不てぎわから、先生方全員にお答えいただけなかったことをおわび致します。

項目の内容

① なぜ教師になられたのですか。
② 教師としての生き甲斐はどんな時に感じられますか。
③ 教師として何か不満はありますか。
④ 生徒に何を望みますか。
⑤ 今一番学校でしたいことは何ですか。

斎藤先生

①子供の時にそう思って以来、ずっと他の職業を考えなかった。
②そう見えるかどうかしらないが、けっこう楽しくやっている。
④創造的意欲。夢と、それを支える力。
⑤将来まで文学を語りあえる若い仲間を得たい。

清水先生

①敗戦により軍関係の学校がなくなり、教師になるための学校へ入学したから。
②生徒の成長を知り、目標に向って進み達成されること。もう一つは生徒に信頼されること。
③学校の施設、設備に対しては、一日も早く新校舎ができること。自分自身に対しては研究する時間が欲しいこと。
④目標をはっきり定めて着実に歩むこと。常にぐらぐらしていると思う。
⑤いろいろしたいことはあるが、一番おそろかになっているのはクラブの指導なので、それを十分やりたい。

末松先生

○ただ前に立ってベラベラしゃべってベルがなれば帰ってしまう、味もそっけもない。
○サラリーマンになるな。
○誠意をもって接しなさい。そうすれば生徒が従う。
○興味をそそられるような授業を。

三年男子
○甘すぎるかもしれない。
○ティーチングマシンじゃないか。

女子
○現代の若者を知って。
○生徒との対話を。
○先生同志のまとまりがない。
○先生であるより先に人間であって欲しい。
○生徒を威圧することだけ考えていても前進はない。

①子供が好きだから。
②授業を去る時。
　生徒と話をしている時。
③月給が安いことの他はちょっと思いつかない。
④高等学校の生活を楽しくすること。
⑤変な質問で、質問の意味がよくわからない。

外川先生

①偶然の機会から。
②成長発達する者を見る喜びに――
③生徒諸君に、もっと自由な伸び伸びとした。
　学校生活を送らせてやれないこと。
④自己の持てる力をもっと伸ばして欲しい。
　努力不足。
⑤環境施設の向上整備。

高井先生

①子供心に世の中でいちばんえらいのは先生と思ったから。
②授業をすること。
③授業、担任以外の雑用が多い。
④もっと勉強して授業中に質問をして下さい。

玉置先生

①好きな道だったから。
②いつでも若い世代の新鮮な未知数の青年子女に接しられることと学んだ知識、考え方などを通して人間的なふれ合いをもつことができることは張り合いのあることだ。
③「らしく」ない生徒が多すぎる。
④一、目先きの損得だけで割り切りすぎる風潮に流されることなく情操豊かな視野の広い人間になってほしい。
　二、どんな場合でも人の迷惑にならないかを考えて行動すること。
⑤家庭科クラブを楽しいものに。

丹沢先生

①高校三年の時、友人の義妹の家庭教師をやりながら、人間的触れ合いを感じ、教師という職業の一端を知ったため。ちなみに私は商業高校生で、それ迄は将来サラリーマンになろうと思っていました。
②人間の基本的欲求の一つに自分の言っていることを他人に聞いて欲しいという気持があります。自分の一挙手一投足が他人に影響を及ぼし得るのに、教師程、その可能性の大きい職業はないと思います。
③自分の器がなかなか大きくならないことです。これは、自分のことが十分わからないとに他人を指導できるか、という自己憶着に通います。
④どんなささいなことでも真険に取り組んでもっともっと悩んで欲しい。案外私達は笑い等によってごまかし、生きる苦しみから逃避しがちではないかと思います。
⑤早くクラス担任になって、自分の組を持ちたい。何か、現在の状態では、小言を言ってもひとことのような受け取られ方をするのが残念なのです。

橋本（雄）先生

①スポーツが好きだったので、体育の教師になった。
②君達の成長を見る時。
③施設の面でたくさんある。
④情熱。
⑤クラブを強くしたい。

林先生

①教育報国のため。
②生徒の成長を見守ること。
③教員生活としては不満はない。ただ生徒が自己完成を目指して一層積極的に努力するように励んで貰いたい。
④潔く正しく強く人生を創造するように――
⑤生徒と共に楽しみ共に悲しみお互に励ましあって行きたい。

授業

一年男子
○つまらない。
○時間割りを考えろ。
○教科書以外のこともやってほしい。
○マスプロ教育反対。

女子
○先生の自己満足。
○もっと発言をとりいれて。
○興味のもてるものを。

二年男子
○生徒の意見を取り上げろ。
○テスト本位であってテストのためになんとか範囲までおわらせようとすすんでばかり。
○参考書的な授業ではおもしろくない。
○生徒よ。もっとまじめに受けようぜ、先生も一生懸命だよ。
○生徒どうしの意見のやりとりがない。

女子
○受験勉強でなく真実の学問を。
○すばらしい、ヒマといおうか、とにかく講義ばかりじゃヒルネの時間だね。
○生徒を指名して答えさせるべき。

三年男子
○範囲に決めたところまで勉強するのではなく、やったところまでを範囲にすべきだ。

女子
○我々生徒は甘えすぎている。先生から知識をむさぼりとるぐらいの意欲があってもよいと思う。
○こんな受験本位のつめこみ主義の授業なんて……。
○個性のない先生・個性のない授業。
○人間形成の授業をやれ。

永浜先生

①「君子有三楽。父母俱存兄弟無故一楽也。仰不愧於天俯不作於人二楽也。」（孟子）必ずしも英才でなくてもよい。」こちらも必ずしも君子ではないが「教育」はやはり一つの楽しみだ。

②生徒の学ぼうとする意欲が満ちあふれて真剣な顔が並んでいる教室に入った時の喜び。

③生徒が拒否反応を示し受け入れようとしない時。

④責任を転稼しない。やるべきことは責任を持ってやる態度。公徳心。真剣に学ぶ態度。

⑤学校が古くても材料が悪くても、生徒と教師の努力によって、少しきれいな学校にならないものかと清掃係の一員として特に痛感している。「山高故不貴以有樹為貴、人肥故不貴以有智為貴」（実語教）　鉄筋コンクリートの立派な建物があるのがよい学校ではない、たとえ古い校舎でもそれはそれなりに住みよく勉強のできる雰囲気を努力して作って行く、そういう学校こそ貴い学校だ。

広見先生

①私の「人間」に最も適していると考えた。

②大いにあり。

③不平はない。あきたりない感じがするのは、生徒の意欲不足。何かに積極的にうちこむ迫力が乏しいこと。

④あせるなかれ。ローマは一日にして成らず日々の努力を大切にせよ。

⑤先生と生徒が気軽に笑って話しあえる施設と時間を設けること。

保坂先生

①教える事が好きであったから。

②学習効果がすこしでもみられた時。悩み等相談にこられ、共に話し合ったりして生徒の悩みが少しでも解消されたとみえた時。

③現在の教師すべてに教育愛、人間愛がないような言動をとられた時。

教師として生徒を信じたい気持を持っているのにそれを裏切られた時。

④先生と話し合いたい事があったらどんどん話し合いに来てもらいたい。先生の人生観、教育観を変えるような言動をとってもらいたくない。

⑤自分で納得し又生徒からも納得されるような授業をしたい。クラブをもっと一生懸命やりたい。

弓家田先生

①学校で学んだことが一番生かせる職業だから。

②自分の教えたことが生徒の上に卒業後でもよいから生かされていることを感じる時。

③生徒に対して自分の気持がすこしも通じない時。生徒にやろうとする気持が見受けられない時。

④自分のしていることが、どの様な結果をもたらすかということをよく考えて行動してほしい。松高生としてのほこりを持ってほしいと思う。

⑤特別にない。

松高三六五日

四十四年度

四月
八　日　始業式
九　日　入学式
十　日　対面式
十四　日　オリエンテーション
十九　日　クラブ紹介

五月
一　日　実力考査
二　日　遠足　一年
　　二年
　　三年
八　日
～　球技大会
十二　日
十四　日　生徒総会
二十九日
六月　～　中間考査
二　日
十四　日　三者懇談会

役員選挙

選挙等とカッコイイことを言っても、立候補者がいるわけではなし、したがって当然立合い演説で自意を表明することもない。ただ総会のついでに、「これがこんど会長に立候補した××君です」と紹介されるだけ。そして投票の段になると、ただ名前をそのまま列記する。そしてめでたく御当選。ああ悪循環！選管の委員が前もって目をつけていた人を、四六時中追っかけ回して、むりやり押しつけ立候補をさせる。みじめないけにえ達。そんな悪習慣の中に、今年度後期は全て自らの立候補、その上会長候補が二人という近代松高史まれに見る出来事が起った。「こんな調子が続くとヒョットして……」と思いきや、さにあらず。二人の会長立候をおもしろ半分にどちらが当選するか賭をする連中が出る始末。真面目に二人の意見を聞いて決めた一票も、鉛筆を倒して決めた一票も、そして賭の為の一票も、全て松高では同じ一票となってしまうのです。立合演説、〝やる気〟のある連中の全員立候補、対立候補出現で一時はもり上った雰囲気も、松高生の持続しないという特性から尻つぼみになってしまいました。青写真なし、押しつけ立候補なし、賭け投票なしの選挙はいつになったら実現するのでしょうか。

オリエンテーション

オリエンテーションは二回開かれたが、一年生の集まりは悪く、またおもしろくないものだった。生徒会の委員長は「あの、えーとその、どうしようかなー。何を言おうかな。」と大変にたよりなく、何を言いたいかわからかった。ひじをついてしゃべる態度の悪い上級生がいたり、高校生ってこんなものかと思った。クラブの発表にしたってつき並で、センスのある会話はなかった。また構堂の上からクラブの名を書いた風船や紙をまいたが、構堂の中が散らかっただけであった。わたしたちは構堂にすわらされスカートやズボンを汚した上、つまらない話しを聞かされた。来年の一年生には、こんな思いをさせたくない

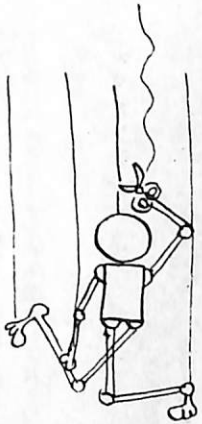
七月
八　日　～　期末考査
十一　日
十九　日　終業式
九月
一　日　始業式
二　日　実力考査
二十七日　文化祭
二十八日
十月
五　日　体育祭
十四　日　生徒総会
十七　日　～　二年生修学旅行
二十一日
二十九日
十一月　中間考査
一　日
十一　日　開校記念日
十二　日　生徒総会
二十五日　マラソン大会
十二月
十三　日

と思う。また、わたしたちは思わせてはいけない。

三者懇談会

今回の三者懇談会で話し合った事柄は、最初は家庭内でどの程度対話があるかということで、だいたいの人は対話を持っているようで、父親と話さない人は、重大な問題は話したいのだが機会がない、ということでした。その次に学生運動についても少し話し合いましたが、これは発言を求めても、それについてあまりくわしくない、お母さん方たちばかりでしたから、活発な意見は出ませんでした。このような席で学生運動について話すのは少し無理だと思いました。最後に、現代の教育についての意見が出ました。これにはやはりわたしたちの時代と先生方の時代の考え方に少し違いがあるように思えました。先生がたの時代には（これは一先生の発言）親は子供を理解しようとか、子供に理解させようなどということは問題にせず、きびしくしつけるということが、当時の普通の家庭教育だったそうです。また、その時代に育って今は親に対して本当にありがたいと思っている、とのことでした。確かに現代は、そのような一面を見ならうべきところもあると思いますが、このような複雑な社会、矛盾だらけの社会だからこそ、子供を理解し、時には暖かい目でみまもってくれるような教育が必要ではないでしょうか。

（敦賀　裕子）



十七　日　～　期末考査
二十五日　終業式
二十六日　～　スキー教室
三十　日
一月
八　日　始業式
三十一日
二月　～　スケート教室
一　日
二　日　～　三年生期末考査
五　日
七　日　映画教室
三月
十　日　～　一、二年生期末考査
十三　日
十五　日　卒業式
二十五日　終業式
二十六日　～　スキー教室
三十　日

生徒総会

朝のH・Rで「生徒総会があります」と伝えられて、まず聞かれる声は「ちきしょう、またかァー」「ああ」「ひまねェ」「マンガ予約しとかなきゃあ」ざっとまあこの調子。そしてその日の昼休みは列をなして帰るというありさま。狭き門を突破出来ずに、学校内に軟禁された者達は、イヤイヤ、イスをひきずりながら、マンガ片手に体育館へ向う。五分待ち、十分待ち、十五分、二十分……やっと始ります。しかし、すでにその時遅し。寝始める者さえ出て来る。

内容は、お決まりの総務及び常任委員会の所信表明・予算案提出・その他中間報告・反省報告・質疑の順。マイクの囲りには、三年生がゴソッと集まって交代に何かをわめく。手きびしい批判や質問が出ると、マンガを読むのを中断し、拍手。返答に、誰かが壇上にあがると、又拍手。一年生は、役員、委員長と三年生とのやりとりを別世界の出来事のようにポカンと聞いている。果ては、問題の内容もわからずに、人数の多い方、順番の早い方に手を上げる。それにもかかわらず、その問題は生徒総会で議決されたととられる。これでは何の為の総会かわからない。今の松高の生徒総会は何の為にと問われたら、お昼寝をするため・マンガを読む為・議案書で飛行機を飛ばす為だと答えるだろう。恥しいけど現実だもの……

マラソン大会

定期試験と一、二を争う松高最悪行事の一つ。男子八・三キロ、女子七・三キロという結構走りでのある距離。今年は天候に恵まれあののどかな多摩湖の湖畔をアゴを出して走るより、大好きな人と一緒に散歩でもした方がずっと合っている様なお天気でした。

走行中大した事故もなく、三年連続優勝が出

た程でした。本当にみんなよく走るものだと毎年感心します。が、反対に走っている私達にとって最も小憎らしい存在は、「あと〇〇キロだよ」とかシラジラしい顔で「頑張ってネ」とか言うあの見学者です。でもうらやましいですネ、チョッピリ。私も三年に一度は見学者になって皆様の応援をしてみたいものです。今まで何だかんだと言って来ましたが、ここで言い忘れてはならないことは、あの走り終ったあとの　快感です。長い距離、人はマラソンは自己との戦いだと言います。自分の中に存在する精心と、肉体の一致を見る時、それが走り終った時のあの気持ちにつながるのです。それを知る為に走るのです、八・三キロを、七・三キロを――――

委員会ル・クール

「ああ!!　なぜ?　私としたことが、」と言ってもう遅かった、ル・クール関係の友をもったことがいけなかったのか、どうせ私なんか何もしらないしやることもないと思ったのがあまかったのか、依頼した原稿を取りに行ってもなかなか出してくれず、「予算を二十万も取っていて何をしてるんだ!」などと言われ、「あたしやめたいよ!」などと言おうものなら、「何を言ってるの、そんなことじゃこまりますよ!」と、こわい女委員長にメガネごしに奥からにらまれりゃ、誰だって逃れられない。

そうグチばかり言ってはいられない、口を動かす暇があったら手を動かし、目を動かし

原稿を読み、規定の原稿に清書し、校正しなければいけないのだから、なにせ締め切り真近で放課後ずっと応接室に入って手を動かしているのだ。

私がル・クールに入って良かったと思うのは、友との関係などで、広範囲の人の話を聞けたことであろう。

とにかく、今、非常に忙しい、真面目、いや人が良すぎるせいか　あまりやりもしないくせに皆と同じように遅くまで学校に残っている。だが、もう三学期、残り三ヶ月でこれから解脱（このことばは倫社で習ったので使いたかったのである、御了承願います。）できる。

「春休みよ、早く来い!　……。」

この本が出きあがったらきっと、さぼっていたせいか、さぞ感激の涙を肩を震わせながら流すことであろう。迄、御期待!

学校を　教育を　先生を　高校生を!

ル・クールが斬る!　ル・クールが斬る!

生徒会報告

後期生徒会会長　武岡哲郎

今期の生徒会活動の以前と異なることは、学校側やPTAと話す機会を多く得たことだ。それによって、生徒会に内存する問題がより深められたと思う。我々が公開質問状や合同ホームについて学校側と話していくうちに、「相互理解はできるのだが、どうも平行にしか話しが進まない。」という状態につきあたったのだ。これをそれぞれの立場によるものではないか。学校側は管理者として一にも二にも安全策を主張し、生徒会は自分達の自由な進歩を第一に考える。たしかにどちらにも一理あるのだが、やはり安全ばかり追いかけていたら、いつまでたっても進歩はしない、要は新しい試みを、考えうるだけの方法を用いて安全なものに近づけるということではないか。現実には我々の合同ホームルーム開催の要求が、数週間にわたる話し合いや、担任による家庭訪問というオマケまでついた後に受け入れられた。

表面的にはたしかに我々の要求が通ったのであるが、この間約一ヶ月、我々の気勢を削ぐには十分な期間だった。結局、我々が学校側にうまくしてやられたのだった。

学校側は生徒が何もしようとしない時は、「自主的にやらにゃアカン」などと理解のあるところを見せるが、さて、生徒が活動しようとするとなると、マッタをかける。

いったい何を恐れているのかと言うと、彼ら自身現在の高校、ひいては教育制度に問題

があることをよく知っているが、生徒が事実を知ってさわいだり、へたをして学校の体面にかかわるようなことになり、自分達が責任のある判断を下さなければならないような立に追いこまれる事を恐れているのだ。

文化祭の時、三年がフォークゲリラの集会をやった。もちろんマジメな話し合いである。しかし、「討論に加わって下さい。」という生徒の呼びかけを、校長みずから無視した。あの、いつもは、諸君の自主性ウンヌンと、理解のあるところを露骨に示していた彼が?である。

校長がこうだから、あとの教師たちの態度も、〝追って知るべし〟である。どういうわけか、中庭の方を窓を細く開けてうかがっていたり、集会の端の方でコソコソと、見えかくれしていたのは、みんな〝松高教師〟であった。この中にあって、ただ一人、あの、〇〇〝あたま〟がトレードマークの林先生だけが、発言して下さった。これは、我々にとってショックだったと同時に、この学校に良心的な先生がまだおられるということを認識し得た安心感を与えてくれるものであった。(もちろんこれはほんの一例である。)

今までに書いてきた事は、我々生徒が、我々自身の手で行動することによって知ることのできた事実である。もし、公開質問状が出なければ、学校側との話し合いは行なわれなかっただろうし、三年生が集会を開かなかったら、我々の教師像は、もっと違っていただろう。「事実は、行動によってのみ知ることのできるものだ。」ということを、我々は再認識した。ボケッとして、毎日学校へ来ているというだけでは、真実は顔を出してはくれない。教科書の、死んでしまった活字の羅列は、我々にただ覚えることを強要し、何の真実をも教えてはくれない。我々がそれらを読んで、理解したと思っても、真実を知ったと思っても、それらはコトバのアソビに終ってしまうだろう。なぜかといえば、それらは、意志というものを失っている。それらは我々に生気を失うことを要求する。しかし、我々は生きているのだ。生き、生きようと欲する者にとって、真実を知るということは、当然の欲求であり、又それは、彼が彼自身の生きている手で捕えるほかないものである。

だが、教科書が無意味だと言うのではない。教科書は我々に、物の考え方、まとめ方、そして忍耐という大切なものを与えてくれる。

生徒会

一年男子
○総務の生徒会。
○会長の言ったことが実行されていない。
○もっと強力な組織にしてほしい。
○仕事しているのかなあ。
○集会のときもっと早く始めろ。
○生徒との間にミゾがあるんじゃないか。

女子
○全々別の世界に存在するかんじ。
○なにをやってるかわからない。
○生徒会とは名ばかり、よくもまあこんなでくの棒が集まったね。
○一般生徒の声をきかない。
○生徒総会は出たい人が出ればい。

二年男子
○生徒会総務に望むのがムリ?
○一般生徒と離れ、生徒会だけで物事をおしすすめている様だ。

しかし、それだけである。教科書を過信してはいけない。世の中には、自分は基礎を固めてから真実を知るのだ、という人がいる。そして、そういう人に限って宝クジなどを買い込み、モシカシタラ当たるカモ?などと思うのである。しかし、現実は、彼が宝クジに当たるより、その日のうちにでも、車に当てられて天国行きになる確率の方が、よほど多いのである。基本的なことをやってから……という考え方は、彼がゼッタイにある年令まで生きられる、という前提なしには成り立たない。彼が交通事故にでもあって、今にも死のうという時ははたしてどう思うであろうか。「自分は、短いながらも人間的な一生を過した。」と思えるであろうか。そして、学生は本分を果しさえすれば良い、というような、学生が学生である前に、人間であることを無視する考えも同様である。

ここまで、ゴタゴタと書いてきたわけであるが、いったい何を言いたいのか、というと、「生徒一人一人が、真理を追求しなければ、何も知ることはできないし、何も変えることもできない。」ということノミである。

後期の生徒会活動というものは、一部の人間が、一般生徒の手のとどかない所で、カッテに活動するものとしてではなく、生徒一人一人が、考え、そして行動することを、前提として計画された。しかし、甘かった。たいていの問題は、我々の手を離れて、各委員会やホームルームでの討論という段階までこぎつけると同時に、モヤモヤのうちに消滅して行った。

そして、我々にしても、最後まで努力するということに欠けていた。この際、我々というのは、結局、この自分自身なのだ。この場合、リーダーシップが欠けていた、なんて欺瞞的なものは、初めから関係がない。以前は、一人の人間がリーダーシップを取って、ほかの人間をついてこさせれば、それで良い、と考えていた。しかし、これは一種の専制政治であり、個人の主体性を無視した行為である。ほんとうの自治とは、それぞれの個性からほとばしる、生気に満ちた情熱によってしか、行ない得ないのではないか。しかしこれは、自分の能力にとって、又、なまけ根性にとって、全くケタはずれに大きな仕事であった。

現実に、自分が生徒会長になった時、それまでに考えていた事とはウラハラに、現実の

○一般生徒への自覚をさせる。
○役員のやつらの態度が気にいらん。

女子
○生徒総会の回数が少ない。
○現体制打破。
○何もしない集合体だね。
○自分たち特別な人間と思わないで。
○生徒会のための生徒会?

三年男子
○武岡、なにやってるんだ!
○生徒総会への強制参加はおかしい。

女子
○会長の独裁になるな。
○今の生徒会には少し期待してるわ。
○もっと身近に、ビラなどを利用するべきだ。
○玄関の黒板を活用しろ。
○もっと計画的にバッチリやれ。

変革を急ぐあまり、総務のみんなに、自分のやり方を納得してもらおうとした。リーダーシップを取るでもなく、本当のみんなの意志としてでもない、非常に中途はんぱな状態で、ただ自分だけが空転してしまった。しかし、この時は、自分なりに努力していたのである。その後、合同ホームルームもどうやらすんで、我々に緊張の後の無気力状態が訪れた。もっとも、それまで毎日のように会議会議で、みんな、八時前に家に帰ったことのないような毎日だったから、心身共に疲れきっていたことも確かだが、それ以上に、別に何も変え得なかったのに、話し合いや、合同ホームルームをやっただけで、自分達が何かを変えた様な錯覚状態にあったのかもしれない。だが、この様な状態はほんのつかの間のことだった。合同ホームルームは乗らなかったし、心得七・八状問題は各クラスでも人気がなかった。ある教師などは授業で各クラスを訪れては、七・八状はあたりまえのことだ、と説教して回っていた。たまたま、我クラスにも来たので、質問をしたら、それまで授業時間をツブして話していたくせに、自分の言いたい事だけ言ったと思ったら、「今は授業時間である。」とかなんとか言って、質問を無視した。こんなやり方にモンクを言ったら、とうとう彼は、「バカヤロー。」と叫んで、我々がボーとしている間に授業を始めた。彼は極マジメで有能な教師である。申し分のないティーチングマシンである。

こん中で、我々だけが空回りしていた。また自分には、松高生が、人間に見えなくなってきた。そして、松高教師も、彼らは、豚飼いと豚であったり、人形使いと操り人形であったりした。もしも本当にそうなら、我々のやろうとしていることなど、場違いもはなはだしく、マンガ以外の何物でもない。そして生徒会活動とは、ちょっと大がかりな、お遊び、そのものではないか。

七・八状の問題が、一応生活委員会に移行した今、我々は、すぐに次の問題に手を付けねばならなかった。予算問題のための調査と、PTAとの話し合い。そして、新規定の検討・七十年度年間計画の調整など、今から始めなくてはならない問題を、我々は、着々と進めてはいる。しかし、我々は、ちっとも一生懸命ではない。会長である自分が、やる気を失い、努力を怠った。そして、総務は非常に敏感にそれを感じ取った。

我々が合同ホームのことで、毎日学校側と話し合っていたころ、一人の、今までは全く生徒会室に入って来たことがないような男が、突如として我々の中に入って来た。彼は同じクラスのやつであった。彼がある時、友情というテーマで話し合った国語の時間だろうか。「クラブの中では友人が出来にくい。」という様な意味の事十言った。本人はその直後、「あれは反対の事を言ったんだよ。」とかなんとか言っていた。彼は事実、あるクラブに入っていたが、「ほんとうに話し合える友人などいない。」と言っていた。そして、クラスもシラケっぱなし。とても、話し合いなんてできる様にない状態だった。そしてその時、たまたま生徒会が激しく活動していた。というわけだろうか。いや、それとも女性関係か。どういうわけか、生徒会という所は、今までに、いくつものカップルを生産している。それはさて置いて、彼、始めのうちは我々の討論に参加し、とうとう学校との談判で担任との顔合わせまでやった。ところがしばらくすると、我々の無気力状態に、あきれ返ることになる。我々は話し合うことが少なくなった。それぞれが分け担された仕事だけをやり、「話し合い。」といえば連絡程度になった。そして彼は、その後あまり生徒会室に近寄らない。

我々は、確かに仕事は進めている。自分が何も言わなくとも、それぞれが彼ら自身の仕事をわけまえて、やってくれる。しかし、これはあくまで事務的な意味であって、本当に、それぞれが考えた上でやっているかというと、疑問が残る。ここまでは、分担してやれる仕事だから良いが、みんなで話し合って行かなくてはならない段階となると、なかなか意見が出てこない。

まず、普段の会話が少いから、なかなかうちとけない。どうしても、端の方で黙っていたり、関係の無い事をやっている者が後を断たない。やはり、クラスでも同様だが、普段の会話が無ければ、まとまりがつかない。

生徒会活動、又、我々の日常生活の根底である。会話を、現実の小さな改革の前に我々自身で軽視していたのではないか。いや、軽視というよりも、わかっていながら努力を怠ったのだ。

体育委員会

「自立」その前に「自立」……考える。疑問を抱く。

社会を考えるとやっぱり高校へ！

生活に困っていなければ！

なんとなく！

こんな人が多くだと思う。なんとなくスーット入学。

一応行ってみよう。おもしろいところかも知れない！

どうせ入って来たんだ楽しくいこう。有効に！

何かを得て卒業しよう。できればだけど。

努力しよう。よりよくしよう。できる限り。

権利を放棄しないで！

学齢に達した児童を国民の義務として、就学させるという義務教育はすんだ。

高校へ入ってまた何も見付けてない人。

ただボンヤリして日々を過ごしている人

一度考えてみよう。

疑問を持ってみよう。道は開ける。

前期が終ってもう三ヶ月、後期の委員長さんにバトンタッチ。

マラソン大会の仕事も終って、今は、春、六月になる。

体育祭の仕事をしているらしい。

僕と同じ仕事をしている。行事の仕事を。

去年の体育祭の運営について体育科の先生方は無知に等しかったのではないかと思う。

「無知」ということは委員会の方の計画を連絡しなかったからであるけれども。

自主活動！自立！

生徒同士の討論で「おまえは学校の御用聞きか！」「おまえ」という中に自分も入っているということを。この人は気づいているのであろうか。今の体育祭は「生徒会主催」という言葉をもっていない。これは、ある一人間が名前をもってないのと同じようなものだ。

その「生徒会主催」という言葉はその存在を示している。

生徒の自主的運営の体育祭。それだけでは空間にフワフワ浮いている状態。それを落ち着かせる言葉だと思う。

「生徒会主催」という言葉を得た時、体育祭はすばらしいものとなる、と思う。

「生徒会主催」という言葉だけで、その体育祭の内容が粗末ではだめだと思う。

それは「自主的運営」――「生徒会主催」

今は「生徒会主催」→「自主的運営」こういう状態ではないだろうか。

行事というものは、ある程度、僕たちの中から要求されるものではないだろうか。

球技大会において「試合に出られない人は何をするのですか。」このような質問を受けた。当然応援へまわるだけだ。全員参加でないのは明白である。

僕は球技大会というものは委員会としてやろうと決定する以前に、みんなから要求がほしかった。

委員会の方が「やるか」ともちかけると「やろう」という。返事がくる。いざやってみると、応援する人は人。なんか、さびしい感じがした。やっている人は応援がしたかったのではないだろうか。

ある人は「おまえは学校の御用聞きか！」と言い、ある人は「自分たちの行事だ、主催は生徒会ではないか！」と言う。

なんか矛盾してはいないだろうか。互いの行事だ。互いの協力して改善していこうではないか。

今年は春に体育祭をやろうと総務は学校側と話し合いをしているが、生徒同士の話し合いもしているらしい。生徒同士の結びつき、そして生徒と先生の結びつき。

次期委員長は去年の体育祭における失敗をくり返さないようにして欲しい。

ガンバッテくれや。

文化祭私感

今年も昨年と同じ問題を持ちながら、未解決のまま第十九回文化祭を開催してしまいました。どこが悪い、かしこが悪いと文句を言い文化祭執行委員会を責めればそれでいいというものではありません。それよりも前に、松高生の一員である貴方が自問自答し、そしてこれからどういう方向に進めばよいかを考えてこそ効果があるのではないでしょうか。

では先ず手始めに――文化祭とは何でしょう？　こんな問題を考えたことがあります

体育祭

一年男子

○運動会やってんじゃねえんだ。
○種目を考えろ。
○騎馬戦はこわいよ。
○準備期間をもっと長く。
○応援合戦は三年生だけで楽しんでいるんじゃないか、あんなんだったらする必要ないよ。

女子

○陸上記録会とは違うんだよ。
○後夜祭をやった方がいいな。
○プログラムがこみいっていてゆっくり応援をしたくてもできない。
○だれにでも出られる体育祭に。
○秋でなく春におこなうべき。
○文化祭の後なのであわただしい。
○練習期間が少なかったけど、いつもあんななの。

二年男子

○少なくとも二週間の準備期間を。
○進行をすばやく。

女子

○文化祭と同じころにあるのでいそがしいから一学期に行なって。
○応援はいいね。
○団体競技をふやそうよ。
○休むと体育の点がひかれるんだってね――。
○小学校の運動会のつづき？

三年男子

○体育教官の圧力を阻止せよ。
○形式ばるな。
○オオ！なんというマンネリズム、昨年とまったく変わりばえなし。

女子

○全員参加は不可能だし、全員参加でなくてはいみがない・・・。
○なんとなく間がぬけているね。

か。こんな短かくて簡単な質問、でもこれが一番の基本であり、又一番の問題なのです。

「ぶんかさい」という中には、祭(まつり)という字が含まれています。「祭」というそもそもの意見は『大衆の心情の帰結点としてあり、種々の大衆のいのりが込められているもの』だそうです。私はこれを『大衆のある期間のしめくくりとか出発点という様な形で一種のエネルギーが集約されたもの』と取りました。私達も各々一若者としての知的エネルギーと肉体的エネルギーを当然持っています。

そしてこの二つのエネルギーの何分の一を公に発するというところで、文化祭に「祭」を用いたのではなかろうかと、私のささやかな頭で考えるのです。

とは言うものの今年の文化祭を見ると、どうもそのエネルギーはあまり感じられなかったのですがネ。私が思うには、文化祭は私達が日頃費しているエネルギーの程度がどの位であるかを何等かの形(クラブの研究発表等)で表現する一手段としてあり、今までの様に、文化祭の為にどうこうするというものであってはならない。普段からクラブなりサークルで一生懸命活動している。それを発表するチャンスとしてめぐってくる文化祭において、結果報告なり経過報告という形で発表すればよいのだと思う。

近年の様に内容の浅い研究が出て来るのも、普段からの積み重ねでなく、文化祭の為の研究として行なっているところに原因があるのではないだろうか。

また文化祭には、見ている人には解らない意義もある。というのは、文化祭という日が回って来るまでの私達の研究及び行動過程です。つまりどうやって二日間の文化祭で私達のエネルギーの程を発表しようかとみんなで話し合っている時期です。普段から同じものにうち込んでいるのですから、お互いまとまり、通じ合っているのは言うまでもありませんが、その親密度が一層増すのがこの時期です。

特にクラス制を敷いたこの二年間はH・Rの中で新しい交友関係が生まれるよい機会であるし「オレもクラスの一員だ」という連帯意識も養なわれる機会だとも思われます。事実私のクラスでも「アイツが……」と思う様な人が非常に協力的であったり、又反対に

文　化　祭

一年男子
○練習日数が少ない。
○何のためにやるのかわからない。
○費用がたりない。
○参加者、不参加者にわかれた。
○先生方の参加を。
○エレキをやれ。

女子
○意義を考えてよ。
○形式的すぎるなあ。
○先生がうるさいよ。
○教室の割り当てをもっと考えてよ。
○後夜祭を楽しく。
○全定合流でやろうよ。

二年男子
○沈滞ムードだからやめろ。
○テーマを決めるべきだった。
○後夜祭どうにかならないかなあ。
○もっと金をくれ。！

女子

「あの人なら」と思う人が終業のチャイムと共にイソイソと帰ってしまったり……。色々な人間を知る機会にもなります。夜になり、電気をつけた教室でみんなで食べるコロッケの味も又格別です。えっどんな味かって？ウーン！むづかしいけど〝オレ達みんなでやってんだ〟って味だネ。

——となると我々は文化祭当日は何をやっているンだという事になって来ます。二日間の文化祭の「日」は、ブラブラと他の展示を見て回ったり、模擬店に入り浸りでいたり、友人の案内役をコレ努めたりで「これは…」ということはやっていない。同じ日に開かれている他校の文化祭を見に行く人も少なくないというのだからヒマな訳です。(追加・おこられるのでつけ加えておくと、当日一番の任事をしているのは、皆さんが楽しく芸能祭を見ている時、あの体育館の舞台ウラでは、スポットこそ浴びてはいませんが、舞台以上の大活劇を演じている人々だということです。)

ここで実際文化祭を開催する私達にとって大切なのは、私達のエネルギーの程を知って頂くことも去ることながら、文化祭という「日」より、その「日」に至るまでの過程の方がより重要だと思うのです。見る人側の文化祭批判に左右され、今回の文化祭云々という必要はないのです。形としてこそ表われないが私達一人一人が前に述べた過程の中で得たものが、文化祭の収獲だと思うのです。

という様なので、今回の文化祭沈滞の理由は、私流に言うと、一人一人が前に述べた身のエネルギーを全力投球していなかったということになるのです。「もっと内容のあるもの

○同じような内容のものがあんなにあっちゃつまらない(喫茶店等)
○やっぱり都立だけあってばらばらだね、ほんと感心しちゃうよ。
○もっと考えさせられるようなことをしなくちゃダメ！
○学校側でやることを制限するな。

三年男子
○祭という面ではいいが・・。
文化に関しては・・・。
○校外へのPRがなかったみたい。

女子
○〝楽しい〟だけじゃいけないと思う、文化祭とは何ゾヤ、これをあくまで追求しなくちゃ。
○遊び半分で済ましてしまう例年どおり。
○少し幼稚だね。
○もっと前から準備を！

に！」というのは、もっともな文化祭に対する意見ではあります。が、一気にここまでというとあまりに高い階段です。「なる」には「する」ことが一番なのです。それには全力でぶっかっていくエネルギーを養うことが今の私達がしなければならないことではないでしょうか。

総務とは？

生徒会室著

前回のル・クールを見ても、前々回のル・クールを見ても、総務の欄はいつも会長が書いておった。そのたびに松高の生徒会が不活発であろうという事が肴となっている。

〝総務とのつながりが少ない〟というのも、この雲の上の人の会長さんの文章を読むと諸君もおわかりだと思う。そこで、今回吾輩、ミスター生徒会室がとっておきのペンをふるうことにした次第である。ではまず自己紹介から――

吾輩はＲＯＯＭである。名前は生徒会室。住所は、東京都立松原高等学校内生徒ホールと警備員室の間町第一番街である。ＴＥＬは校内電話Ｂ９。ボディーは普通教室の三分の一程度の部屋で、外装は校舎と同じ様だが、内装は一九六九年、流行の先端を行った全学連風サイケ調。色は、黒・白・銀・緑を基調に、「安保粉砕」「安保育成」「体育祭つぶせ！」「自主管理中」等さまざまの文字が入り乱れて描かれている。貴方好みだろうって？　冗談じゃない、ここの常連がいやがる吾輩に無理やり着せたのである。この吾輩、本当は大のきれい好きなのである。

ここらで吾輩を慕って来る連中の話しをしよう。一般によく出入りするのは生徒会総務の連中やらその他の取り巻き。実際に執行に当っている二年生の出入りが主、それにつづいて三年生の一部と、一年生のごく一部。人数にして常連といえるのは　全校生徒の数十分の一位。吾輩は大変敬遠されているようである。前に述べた以外では、たまに印刷をしにくる生徒、何かを聞きに来る生徒ぐらいのものである。そんな吾輩も年に二度の衣替えをする。つまり、総務役員の前期　後期の交代期である。では吾輩の昨年一年間前期、後期に分けて紹介しよう。

四十四年度前期生徒会総務。あの頃、役員の立候補も目ぼしい者もいない状態で、選管の委員が集まって毎日何やら困っていた様子である。長年ここに住みついておるが、こんなに不活発なことは始めてじゃった。選管の委員は、誰かしら見つけると、一日中追っかけ回して、果ては吾輩のお腹の中へ無理やり

押し込んで勧誘していたものだった。そうこうしているうちにかなりの時間が経ち、どうやらいけにえも決定し、立合演説、そして投票にとこぎつけた。ここまで来るには、皆さんは御存知かどうかわからんが、涙を流した人もおった位じゃ。ところがそんな事をよそに、開票の結果の悪いこと。百票代で当選するというありさま。選管もいいかげん疲れたのか、票数はどうあれ〝早く押しつけてしまおう〟式、何と松高の選挙のアテにならないこと。吾輩はあきれかえってしまった。

そして大久保総務のスタート。それが全て初心者。あの時ばかりは、初心者歓迎とニコニコしてもいられなかった。初めて生徒会に首をつっ込む連中が、お互い初顔合わせでこれから半年、生徒会を動かして行こうというのだから、始めから無理はあったのである。

引き継ぎ、第一回顔合わせ総務会もうやむやのうちに、新一年の入学式、オリエンテーションと矢つぎばやに続き、総務連中はアタフタ。総務の中でガッチリとチームワークがとれていなかったのでそれもそのはずであろう。総務会の様子もぐっとおとなしく、出席人数も全員集合とは言えなかった。一口に言ってまとまりのない総務であったのじゃ。吾輩の目から見たその原因は、どうやら役員一人一人が、しっかりした自分の意見を持って主張することがなかったことが一番だと思う。

また彼等の話を聞いていると、たまには大変いい話しをしていたようである。がそれはあくまで話している当人達同志のためになることであって、生徒会運営には何ら影響するものではなかった。それにクラブを優先する者、趣味を優先する者も見うけられた。

この前期一番もったいないと思ったことは夏休みという、長い長い時間である。試験休み中はチョクチョク集まって、来たるべき文化祭等に備えての話しはしていたものの、七月も終りに近づくとピタリと来なくなってしもうた。連中、やれクラブだ、バイトだといいおって！　自分の日直の時も来ないという始末。ああ長い休み中、吾輩のお腹を誰かに貸しでもしたら、さぞかしもうかったことだろうと今さら思っとる位じゃ。そのくせ、夏休みも終ろうとしている頃に、ドタバタと文化祭のプログラムの準備等やり始めおって、原稿が集まらないの、お金が足りないのと言っていた。ドタンバになって即席でやろうとするのが今回の総務の悪癖であった。

いよいよドタンバもドタンバ、文化祭の二週間ほど前あたりから、連中ポスターカラーやらマジックやら買い込んでＰＲを始めだした。連日フォークダンスの講習会を開いたりもしていた。部屋割り、体育館の割り当て、立て看、マスコット、大道具小道具用のベニヤ板、角材等がつぎつぎと運ばれ、吾輩のお腹はみるみるうちに満腹となった。それにまあ、あの頃になってやっと吾輩のお腹の中も活気づいて来て人の出入りが激しくなり、目のまわる様なフル回転であった。その時である吾輩のお腹の中のインテリアが乱れに乱れたのは。そして騒がしい文化祭の準備を終え当日。連中、交代で吾輩のお腹の中の当番をしとった。

そして後夜祭。放送委員会との連絡不足等で思うように進まず、瞬間的内乱があった程、みんなが校庭でフォークダンスを楽しんでいる時でも、総務の女性二人が、寂しく文化祭を終えての感想を語り合っていた。

次に控えているのは体育祭。文化祭ほどに忙しくはなかったと見うけられた。体育祭について彼らの中には　「いっそのこと全面的

に学校にまかせれば」ともらす者もいた。いい加減疲れが出たというところだったのだろう。

任期もそろそろ終ろうとすると、今度は後期の役員選出に話題が変わって行った。役員達はもうこりごりだとばかりに一切逃げの体勢。もっとも彼等にしてみれば、最悪の半年であったろう。一応大きな行事も過せたし、そろそろ無関心派の仲間入りがしたくなったのも無理はないことじゃ。こう言っては何だが、この前期の総務にたづさわった者達の収穫は俗っぽい言い方ではあるが〝甘かった〟ということであろう。それにつけ加えるならば、二つのカップルが生まれたということが光を放っている位である。吾輩のお腹の中、長年何代もの総務連中が交代に過して来たが、今回の様なのは、初めてである。果たして世につれたのか、それとも質の変化か、吾輩には解らんネ！

前期とは打って変って、全員立候補で後期の選挙が始まった。沈滞松高が叫ばれる中に二人の会長候補出現に、みんなの眼は注がれたものの、相変らず無関心派、冷やかし派の間では賭けの材料に使われてしまった。反面立候補者の意見と、有権者の意見とをじっくり照し合わせた上での票がかなりあったようである。「あの位の立合演説会では全然足りない」という者も出て来、一部では選挙熱も高まった。吾輩も開票にワクワクしていた組なのである。

案外な有効投票数を得て武岡総務のスタート。三年生からも支持が多くかなりの期待を吾輩も持っていた。しかし時がたつにつれ、しだいにその期待も裏切られつつあった。前期と比べると一人一人が　あれ程度しっかりした意見を持ち主張することもできるつぶぞろいであったのだが、それが後になって、小さなミゾのできた原因になったのじゃろう。諸君間違っては困る。吾輩は　決してつぶぞろいである事を攻めているのではない。それどころか、前期の二の舞は踏まないであろうとほのかな何を持っていたのである。しかし、しかしだ諸君！ここに悲しむべき重大な欠陥が潜んでいたのである。正しく、武岡総務の癌と言っても過言ではないものが、それは結果論ではあるが、リーダーと成り得なければならないものが完全にリーダーと成り得なかったのである。誤解されては困る事がここで一つあるのじゃ。それは決して武岡氏が、努力を怠ったのではないということ。彼は彼なりに努力したのじゃ。が、彼には責任がない、一生懸命やった者に罪はないのである。そこはそれ、人間性の問題、生れ方が少々おかしかった？　親が悪い？　少々言い過ぎた、許せ。

何故リーダー格と成り得なかったか、吾輩は吾輩なりに考えてみた。

まず、言葉を発する割には、行動力が少々足りなかったのではないかな。行動が十分な意見の上に存在していなかった様である。それらが、微妙に、総務を一つの束にできなかったという事に関係している様である。

ここにある一人の男がいる。平凡で、生徒会には無関心で、それまでクラブに専念していた男。彼は何を思ってか、突然、吾輩の腹の中に首をつっこみ始めた。しばらくした、ある時、吾輩が空腹感に、ひっしに耐えていた時、一人火のないストーヴのそばにたたずみ、両手をかざしながら、ぽそぽそと言ったあの言葉、吾輩は赤面する思いで聞いたのである。「……。」と、そして彼の気持ちを悟ることができたのである。彼は　先輩に良き相談相手を求め、又人間的交流の中に身を浸

したかったのであった。彼の訪れが二年、いや一年早かったならば、彼の欲求は充分満たされたであろうに。毎日毎日、空腹感を感じなければならない現在の吾輩の腹の中では致底無理な注文である。彼はまさに悲劇の人物である。

今年も何人かの松高生が巣立ち、何人かの新しい松高生が生まれる。そこに時間の流れを感じないではいられない。読者諸君よ！一度は吾輩の腹の中をのぞいてみたまえ。そして何かをつかんでもらいたいのである。吾輩の存在をも知らぬまま、卒業していく者が毎年何人か必ずいるのである。それが毎年桜の花の咲く頃の私の悩みの一つである。

吾輩をみじめにしないでくれ、もし吾輩を哀れんでくれる者がいたなら、一度でよいから吾輩の腹の中をのぞいてくれたまえ、それだけで吾輩は満足である、又彼のような悲劇も起らないであろう。

それからもう一言、吾輩は君たちのものであり、吾輩が生きるも死ねもすべて諸君のその腕にかかっている。それをよく考えてもらいたい。

委員会

松高の中で、意欲不足、委員の過少、流会等の問題をかかえながらのこの一年、反省的に委員長に聞いてみました。

順番は次のとおりです。

① 委員会は月（週）何回開きますか
　流会はどの位でしょうか
② 会の平均出席人数はどの位ですか
　（学年別）
③ 会の仕事について
・どの様なことをしましたか
・成功・不成功にに分けたら、どちらでしょう。また各々の具体例も書き加えて下さい。
④ 一般生徒とのつながりはありますか
⑤ 前期の反省
⑥ 後期に望むこと
⑦ 最後に一言

評　議　会

① 定例、臨時合わせると、月一回。
② 一年……六、七人　二年……四、五人
　三年……三、四人
③ ・結論としてはわからない
　・不成功……自分の気力が足りなかったらしい。
④ ないと言ってよい。
⑤ 気力を持って向かわなくてはいけないと思う。
⑥ まじめに努力して欲しい。
⑦ P・Rの必要性を感じていない。

整美委員会

委員会は集りが悪かった。普通委員会を開いても、五～十人しか集まらないことが何度もあった。――できる限り連絡したのだが――全員集まったのは交化祭の前日の委員会のみであった。その理由は何だろうか。整美委員会の活動があまりにも事務的すぎ、大掃除・花壇の手入れ等、委員はやる気を失っていることにあると思う。しかし一担委員になった限り、たとえつまらなくても委員として責任

は果たしてもらいたいものである。しかし委員長自身にも大きな責任がある。それは、委員長だけ張り切りすぎて、委員に命令することが、副委員長を除いては少なかったということである。このことはかえって委員にやる気を失わせたにちがいない。今でも強く反省している。

十一月に美化週間を設け、掃除実態調査を行なったが、かなりよい成果を修めた。単調な掃除に変化をつけてよかったと思う。次期にもこのことを受けつがしていきたいと思う。

図書委員会

① 月に一～二回
流会とはせず、ミィーティングに変える。
② 十二、三人　一年……六人
二年……六人　三年……全々なし
③・カウンター当番、書籍整理、新聞発行。
読書会等に於て、本によって生徒同志のつながりをつくる。
・成功
④ ある程度ある。
⑤ 後に書いてある通り
⑥ 来館者の態度を改善せよ！
⑦ 皆さん、本を読みましょう

○前期の反省
委員同志のつながりが、スムーズにいかなかった。活動していたのは、一部の委員だけだった。三年生を、ほとんどといっていいほど無視してしまった。
活動は、奉仕的な本の貸し出しなどが主になってしまって、図書新聞・読書会などの、自主的な活動があまりできなかった。

○後期は
委員同志のつながりを密にして図書新聞読書会　H・Rでの読書活動など計画だおれにならないように考えています。

○一般生徒へ
図書館の本を借りないからといって、その人が本を読まないとは、言いきれません。けれど、せっかく図書館があり、本があるのですから多いに利用してもらいたいと思います。本あるいは、図書館について、希望・要望がありましたら、クラスの図書委員に言ってください。

委員会へ

一年男子
○活発にしろ。
○時間厳守。
○流会ばかりじゃないか。
○本当の姿がつかめない。
○委員の自覚がない。
○発表が少ない。

女子
○つながりを感じない。
○時間の浪費。
○出席率がわるい。
○一年しか出席していない。
○委員選出方法の改正。
○委員会の力が弱い。

二年男子
○H・Rで報告してほしい。
○委員会はやけに多すぎるんじゃないんですか。
○先生の委員会ではないのだ。
○報告をはっきりしてほしい。

返却日までに、必ず本を返却して下さい。長期借り出し新記録など作らないで……。

放送委員会

① 月一回
流会？　ある訳ないじゃない。
② 一・二年はほとんど出席。
三年生はタマに来る程度。
③・聞いてのとおり
・未定
④ あまりない。
⑤ 後に書いてあるとおり
⑥ 〃
⑦ 別にないナ。放送聞いてたむれ！

我々放送委員会の前期・後期の方針は「報道活動を重視して、もっと一般生徒に松高のできごとを知らせよう！」とした。これは去年の方針と同じである。やり方も取材活動を行なっていこうとした点まで同じであるが…一応我々は、その取材活動を撤底的に行い、かつ又、確実に事実を報道するために、委員一人一人に各委員会を割り合てて行なったのだが、結局、一年生の講習、それに文化祭、体育祭などに力を傾けすぎたため思うように方針の「報道活動」ははかどらなかった。それから今年は二年生があまりにも少なかったために力をいれてやった一年生の講習などがおもったようにいかず、アナウンス、ミックスの両方にシショウをきたしてしまった。なにしろ、放送委員どうしあんまり良くまとまらなかったためたて・よこの連絡がとりにくく（とれなかったのかな？）結局今年もまた、去年と同じようなまちがいや、それ以上の色々なまちがいをやってしまったようである。

月並になってしまうが、我々がこれからの委員会に望むことといったら、我々がしたような失敗を、二度とくり返さないで欲しいということだ。松高の生徒会にあって、何の束縛も受けない状態にある（一応生徒会の下にあるが…）。したがって、放送でやりたい事があったら、どんな事でもやれるはずである。しかし、ここで我々みたいに、ただ先輩達がやったことをまるで同じにやってくると、同じまちがいを起こしてしまう。ここで二度と

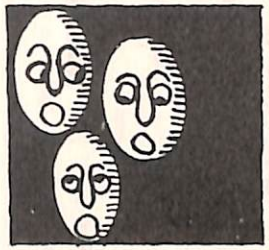
○一度決定されたことは実行したら。

女子
○出席率がわるいといっても流会にするな。
○考えるだけでなく行動も。
○形だけのものが多いのでは。

三年男子
○生活はくだらない上ばきだ、昼の外出だくだらないね。生活委員会解体。

女子
○形式に押し流されるな。
○ミィーティングをしろ。
○何だかちっともわかんないよ。放送でもいってよ、三年生なんてまるで無視だよ。

くり返さないでやるには、もう一度、放送委員会の〝やるべき仕事〟を考えて、計画をたて、慎重にやっていかなければならない。もちろん放送内部がまとまっていなければならないがね……。そうすれば少しづつでも進歩（?）していくよ。「放送委員会」それは僕みたいにチャランポランにはいった人には、つまんないかもしれない。しかし、一生懸命にやれば、これ以上、おもしろく、やる気の起こる委員会はないんじゃないの。もちろん、人の好き嫌いはあるがね……！



文化委員会

① 平均月二回　一回
② 一年……四人　二年……二人
　三年……ナシ
③・校内の文化的活動
　・成功……映画会「禁じられた遊び」
　その他……全定に関するアンケート
④ あまりなかった。
⑤ 映画会についてアンケートをとるべきでした。
⑥ 一般生徒とのつながりをもつこと。
⑦ やればやるほどおもしろくなる仕事です。

前期の反省として、まず私自身は、文化委員会というのは、広範囲に活動できる委員会であるのに、活発に、活動しようとしなかったことは、よくないと思いました。委員でありながら、委員であるという自覚をもたない人がいたことも、委員会が不活発になった原因だと思います。

これからの委員会は、委員長一人が動くのではなく、委員が一人一人役割をもって、委員を助け、一般生徒との結びつきを強くするように活発に活動してもらいたいです。一般生徒の方も、単に委員会がやることを受け入れるだけではなく、委員会に、どういう事柄をやってほしい、又、やるべきではないかということを働きかけてくれると、よりいっそう委員会がよくなると思います。

新聞委員会

① 二回　三回に一回位
② 十二人　一年……九人　二年……三人
③・　――
　・成功
④ ～　返答なし
⑦ 〔前期反省〕
この広い松高の中に、委員会と名のつくものは数多くあれど、私達新聞委員会ほど、団結心にあふれ、活動意志の強い委員会は他にはあるまい。前期も、この二つの力をおおいに発揮し、数えきれない程の多くの仕事を次から次へとかたづけてきた。

まず第一の大仕事は、一学期前半に実施された物置作戦であった。発行した新聞こそ、がり版で刷ったものであったが、毎月のように発行される新聞を手にとって皆さん、ずいぶん驚いたことだろう。

そして第二の大仕事とは、一学期の最後を飾るにふさわしい、二面タイプ刷り新聞の発行であった。さて、第三の仕事とは前期の最終時期に実施された、最も大きな仕事で大好評をはくした四面写真入りオフセット印刷の新聞発行であった。これは、松高新聞委員会の第二の出発点だといっても過言ではないだろう。

前期の失敗点といえば、一年生の指導をおこたった事である。今までの活動は、ほとんど二年生の手で行なわれたと言わねばなるまい。

〔後期への課題〕
『新聞』を発行するには、ある程度の技術を必要とする。その技術はというと、先輩や本を読んで得るのであります。だが、〝委員会〟と名がついている以上、人の出入りが極端であり、それゆえ、技術の引き継ぎというのは非常に困難なものである。結局は、本当に命を、新聞作りにかけるような決まった人々によって委員会は、運営されてゆく。しかし、それはいけないことなのである。

だから、新聞とは何か、なぜ存在するか、どんな働きをするのかなど数多くの根本的なものを考え直して、松高新聞の源をつかんで行きたい。

〔一般会員への希望〕
一発行した新聞は我々が汗と涙で作り上げたものゆえ、最後まで読んでほしい。そして、色々な意見を述べてほしい。
これだけである。
これだけを心から、希望してペンを置かせてもらう。

クラブ委員会

① ――
② 十人
③・クラブの運営
　・成功
④ 部長によって行なった。
⑤ 委員会が少なかった。
⑥ 頑張れよ！
⑦ 〃

選挙管理委員会

① 選挙のある時が決まっているので、月何回とは言いかねる。やる時で週に一～三回。
② 一年……三、四人　二年……二～三人
　三年……なし
③・生徒会役員の選出において、それをとりはからう。
　・未定
④ 余りない。選挙の時も余り関心を示さない為！
⑤ 補欠選挙ではよくやったと思う。
⑥ 松高生はもっと役員選出に関心を持ってほしい。
⑦ ――

生活委員会

① 一～二回　今まで三回
② 一年……大体　二年……二クラス
三年……たまに出席してくれる。
③ ・H・Rのこと
風紀のことなど
・成功
昼休みの無断外出のとりしまり
上ばき撤底
④ H・Rについて
ある程度ある。
⑤ 段々と委員会がもり上って来た。委員の招集のしかたを考えたい。
⑥ とにかく地味に活動して行ってもらいたい。H・Rのことを多く考えていってもらいたい。
⑦ 生活委員会は地味ながらも、よく活動して来た委員会です。生活委員会の重視を認められなかったのが生徒会の敗の原因だと思います。

生活委員会の前期の反省としては、前年と比べては減ったがまだ、出席方法が悪かったらしく、三年生の出席が少なかったし、流会が多少あった。風紀問題にとらわれ過ぎて、H・Rの問題を取り上げることができなかった。しかし、委員会は前よりも多くできたし、充実して結果も多く出たと思っているし、委員会全体の雰囲気が楽しく盛り上がったと思う。それで後期の委員会に望むことは、委員会はまず委員の出席度合が大きく影響するので出席方法を改良して、少しでも多くの委員を出席させてもらいたい。そして委員会だけの委員であった従来のようなものでなく、他の面でもつながりのある委員会組織を作って欲しい。そうすれば流会で頭をいためていた委員長の無駄な努力が省かれると思う。議題の選択で前期は風紀問題を多く取り上げてしまったが、今度はH・Rの諸問題を諸方面から分せきして議題を設定してもらいたいが、風紀問題を忘れず取り上げてもらいたいと思う。最後に、一般生徒への要望だが、今の松校生は自分自身の仕事に対して自覚が少ないように感じる。委員会不出席にしても、『自分が委員会に出席しなかったら、委員会での決定事項の伝達はできなくなってしまうことで自分達のクラスが学校という、クラス一つ一つの歯車で構成されているものから、取り残されてしまう、いや学校が円滑に動いてゆくのを、さまたげてしまう。』ちょっと、オーバーに書いたけれども、この位に自分自身の仕事に自覚・責任感をうえつけてもらいたい。そして、本当に委員会を考えている委員が構成している委員会は、少人数でも立派な意見も出るし、よい結果も出る、運営もスムーズに行くと思う。行くはずである。一般生徒は、生徒はもちろん先生方とも多くの対話をもってもらいたい。対話によって、奥底にある何かも自分自身で探しあててもらいたい。又、自分の関心をしめすことができる場所には、どしどし参加してもらいたい。一年生の諸君には、やがて学校の中心となることを、もっとみつめて、どんどん生徒会などに関心を向けて学校の発展につくしてもらいたいし、二年生は、最重要地位を自覚し、責任のある行動をとってもらいたいし、三年生の方々は現状を冷静にみつめて、公平な判断の上に立って良き指導者となってもらいたいのですが、委員会への出席もお忘ず!!

そこで一般生徒に一番言いたいことは、高校生活に何かしら行動した記録を残してもらいたいということを切に望みます。

クラブ

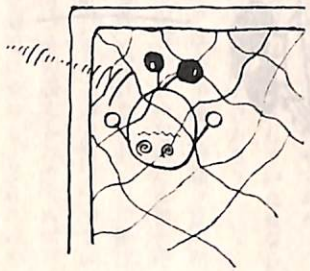
サッカー部

春のリーグ戦で二位となり、関東大会の出場権を得て、都の二次予選へいきましたが、リーグ戦で勝ち抜いてきたつわものばかりなので、一回戦にて敗れてしまいましたが、この試合をして城東地域のサッカーが、わかってよい経験を得たようです。また前後の試合をみてもよい試合ばかりなので、たいへんためになりました。

夏の合宿は、できたての千倉寮へ行き、千倉中学のグラウンドにて練習をして、最後の日にが、隣り駅のA高校と親善試合をして、五—二と勝ち、国体予選への希望をもちました。しかし、都の名門校とあたって、前半は、一点をいれ、一—一とよかったのですが、後半一点をいれられてしまい、もう一度やってみたいという気持ちでいっぱいでした。

新人戦においては、都の中学代表のイレブンを六人もっていて、ごうかなメンバーの駒大附高に前半我々が勝つのではないかというような場面が、二度もありましたが、後半にはいるや、疲れのでてきた我々を見て、続けて二点をとられてしまい敗北の道をたどってしまったのです。

以上が一年のおおまかな結果ですが、感じとしては、後半に点を取られているように、体力的な面で問題があるようです。技術面に関しては、他校と比較してもうわまわる点もあり、技術面に関しては、どうということはないように思われます。ただ接触プレーに、難点をつけてみればつけられるようです。このことを今年の目標として、前進していきたいと思います。



剣道部

練習は週に三日ある。基礎を重んじることが特徴であろう。だからどんな人でも、一年間普通にやっていれば有段者になれる。段を取りやすいということは、剣道が実にオーソドックスであり、いかに整っているかを示している。よって、その後の努力しだいでめきめき腕を上げられるというわけである。

今年の試合では、あまりかんばしくなかったが、それでも、一年生のあるものは世田谷区で三位になる高成績を残しているし、他の者でも、たびたび三・四回戦へ進む者がいるから、多いに期待できる。

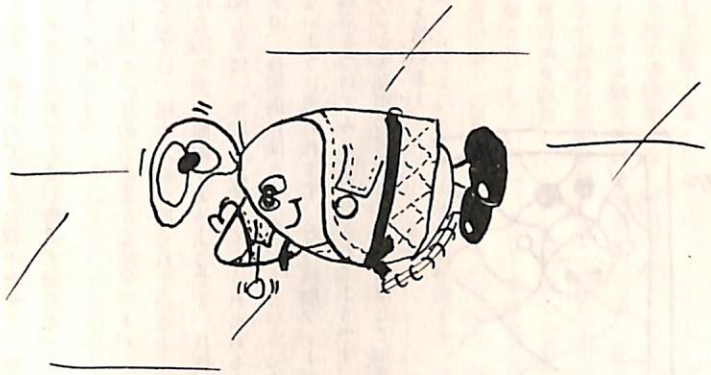
今は一年生が腕を上げてきたので、練習を実戦的に変えればと思っている。なお剣道部は部員は25名、有段者は二段が7名、初段が9名を数え、そうそうたる顔ぶれである。

柔道部

練習は、現在週三回やっている。練習内容は、始めに柔道の基礎である受身をする。受身は、体を柔軟にし怪我を防ぐのに重要である。次に受と取に分かれ、取が、得意な技を何回も繰返しかけて練習する。続いて乱取りである。自分の好きな技を自由にかけあうが、この時に最も緊張さが要求される。さもないと大怪我をおこす。「お願いします。」お互いに礼をしてがっぷりと組む。「ヤァ、ヤァ。」技と技、力と力の戦いだ。もう先輩も後輩もない。技のまさっている者が勝つのだ。最後に寝技をして終わる。寝技は、すばやい動作を得に必要とする。最後に礼をして練習が終わる。これが、一日のだいたいの内容である。

柔道は、肉体的にはもちろん精神的な向上にも役立。なぜならば、柔道の根本精神こそ、身体の健康と心の正道をめざし、かつ実行しているからである。

精神的、肉体的に鍛えられたい人は柔道部に来たまへ。我々とともに、柔道を通して心身ともに鍛えられた人間となるように努力しようではないか。



ソフトボール部

練習は週4回で、内容は、ごく基礎のくり返しを続けている。キャッチボール、トスバッティング、個人ノック、フリーバッティング、ランニング、素振りなど。

公式戦には1回しか出場できなく、夏の大会の時には、合宿でがんばったのだが、負傷その他が続出したので出場できなかった。特に今年は一年生の人数が少なかった為、後半は練習が低退ぎみであったが、最近は人数の少ないなりにもソフト部としての雰囲気が盛り上がってきたようである。

冬は、シーズンオフなので、足を鍛えることに重点をおいて柔軟体操など地味な練習をして体力を貯えるようにしたい。

クラブ内では最大の悩みである部員不足を解決することが、祈願である。

卓球部

諸君の中で卓球というスポーツを知らないという人はまずいないであろう。それだけ日本に普及し、多くの人に親しまれ、そして日本人の体質に一番合ったスポーツであると私は確信している。日本人の特質を考えてもらえれば理解していただけるだろう。柔軟性に富み、器用で、敏捷で、まさにぴったりという感が強い。

我卓球クラブの最大の特色は、他校に比べると、OB（卒業生）の出席が遥かに多い。コーチとして、クラブの事を真剣に考えてくれるし、その上、卓球が強くて、少々カッコ良くて。よって諸君の大部分が持っている欲求、すなわち上下の人間的な付き合いを満足させるに充分なクラブではないか。この卓球は。

私は諸君の中の卓球への認識不足が大変目立つと思う。台の前で棒立ちになってさえすれば、卓球ができると思い込んでいる者が案外多いのである。一度目の前で、大きな大会の卓球の試合を見てくれたまえ、卓球がどれほど激しいスポーツであるかを、諸君は知り得るであろう。

中学校でクラブに参加していなかった一年生にとって、高校の運動クラブは、必ずしも近より易い存在ではないようだ。しかし、なまじ中学校でクラブに加入していた者よりも、高校から始めた者の方が向上が速いのである。

我校の各クラブ全体を通して言える事は、全校生徒が少ない為に、クラブ加入者が少ないのである。そして我クラブも例にもれず、全体でも三十人そこそこ。しかし、台の数はすべてあわせて十台。そしてそのうち六台が我校にある。あとの残りは合宿所にある。

中学校で卓球クラブに加入していた者ならば台、十台は魅力であるはずであろう。

松原をはじめとして、千歳・千歳ヶ丘・明正そして玉川の五校で、五校対抗たる物を作っている。毎年春秋二回行なわれ、二年生は秋の五校対抗を境にクラブの主権十一年生に、引き継ぐのである。その設立された主旨は、都立校という同じ環境において、どれだけの成果を上げられるかを競うというもの。

そして、それがクラブを運営する上で大きな影響を与えている。我クラブのその戦績は男女共に目を見張るものがある。昨年、秋の五校対抗においても、男子個人戦で、優勝はのがしたものの、ベスト四に三人がくい込んだことは、他校を驚ろかせたものでした。

通例でこの学校でも、男子の力が女子よりも大であるのだが、我クラブでは、イコールに近いのである。誤解されるな！男子の力不足であるのではない。女子には、学年別都下ベスト十六位、渋谷区二位などのつわものぞろいだからである。それでいて、ガッチリまとまり、まいしんしているのである。

私一人の三年生から見て全く力強い思いである。

軟式庭球部

昨年度との比較という点において今年度の庭球部は著しい進歩の跡が見られるといってよかろう。

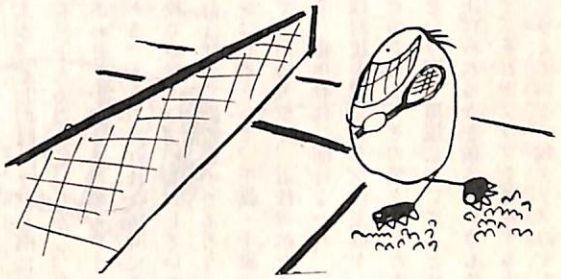
公式試合の成績も回を重ねるにつれて向上し、勝残り組も増えてきた。一面のコートで男女総数40人余の部員をかかえ他の学校と比

較して大きなハンデーを背おっているが、練習時間を有効に使うことに努め、朝早練習をしたり、夜おそく球の見えなくなっても月の光の下で、日曜も休まず外のコートを使ったり努力をしてきた。そして、わずかながらもその成果が表われてきている。これからも、このような地道な努力を続けて行きたい。

しかし、その反面、精神的な向上に欠けている。同学年間の横のつながりは例年の例にもれず密接であったと思われるが、毎年いわれてきた、たてのつながり、それにつづく部員全体の相互理解という点で努力が足りなかったようだ。その点では庭球部は、他の運動部にない特殊性をもっている、つまり一面のコートを男女で共有し男女合同の活動を行っていることだ。ゆえに部員の相互理解を深める為には、男女間の理解を計らねばならない。したがって来年度は上下間及び男女間の理解を深めたいと思う。

そして部員全員が一体となって、数々のハンデを乗りこえ進みたい。

お願い!!一面しかないコートです。学校の財産です。どうか大事にして荒さないで下さい。



バスケット部

我バスケット部の練習日は男子は毎日、女子は水曜が休みという、ちょっとハードスケジュールのようですが、月・水・金は外なので時間も短いのです。又、木曜は半コートのうえ、男・女別に使うのでおもうように練習もできません。

試合

男子―（公式戦）　＋試合中七勝

女子―（〃）

という結果に終ってしまいました。

いま一番まいっているのは、男女とも人数が少ないことです。男子は十二人、女子は十一人と練習するのにギリギリのせんなのです。

今年の夏、二年は男女一緒に海へ行ってきました。コーチもいっしょに、楽しい二日間をすごしたのです。ともかく、男女が仲良いのか悪いのかわからないクラブなのです。

ラグビー部

練習内容

三時三十分

校庭集合

校庭を一回りして準備体操

三時四十分

ランパス（ボールからボールまでボールを渡しながらおもいきり走る練習を五往復）

四時十分

（これからは日によってちがうのでそれぞれの内容を）

オープン（ボールをスクラムから出してバックスへつなぎ、フォワードからライン参加してトライへ）

キック（ボールをける）

アタックディフェンス（攻めと守りに別れて行ない、タックルも行なう）

タックル（手と肩を利用して相手を倒す）

七・七（七人一組で試合形式で行なう）

スクラム（フォワード七～八人同士で組合う）

ラインアウト（タッチの時、フォワードで行なわれるもの）

スタート（ハーフがボールを出し、走りながら他のものが取る練習）

ケツアテ（相手がタックルをしてきた時、オシリを相手に向け相手のタックラーをつぶす）

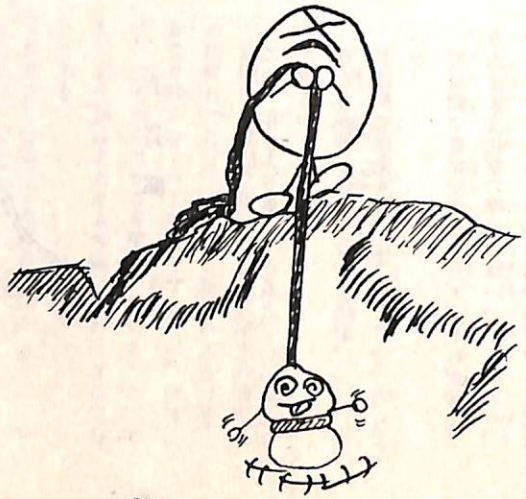
以上のようなもので

夏は五時三十分・冬は五時位まで

ワンダーホーゲル部

去年は例年通り、5月新人歓迎会、6月一泊したボッカ訓練。7月から8月にかけて一週間の夏山合宿。11月秋山山行と計四回の山行を行った。そして山へ行かない時は週三回のトレーニングである。

そして四回の山行のうち泊りであったボッカと夏山は連日の降雨に悩まされた。特に一週間の夏山合宿は、計画のまずさと部員の不手際のため燃料切れをきたし、料理も満足に作れないため、食う物も食えず雨の中を飢と寒さに苦しんだ。だからこそ日ごろのトレーニングはかかせない。週三回のマラソン、腕立て、腹筋ETCなどいささか単調ではあるがきびしい運動である。しかし、この練習あってこそ山へ行けるのだ。新部長一年B組の市塚君に、より一層の奮起を期待する。松高にワンゲル有り。



写真部

対話

これが我写真部です。対話して下さい。

現在の日本人で、カメラを知らない者はまずいないでしょう。それほど日本人は、カメラ、いや写真ずきなのです。しかし、ファインダーをのぞきシャッターを切る。そして写る。写真にする。これは誰れでもできます。しかも現在、ただ単にシャッターを切れば良いだけのカメラさえできています。人々はあまりにも写真を撮りすぎます。しかし、もう一度写真を考えて下さい。

写真は作るのです。何もない所から……。光によって。そして語りかけて下さい。そうすれば答えてくれます。

人々は絵を見ると何となしに『芸術』と言うことばが出てくるでしょう。

しかし、現代人の感覚では写真を見ても何も考えず、単に見るという状況だけの人が多いと思います。なぜでしょう。三次元の物を二次元に表わす。他の世界へつれてゆく。これはかわりないのです。

それはあまりにも人々が写真を撮るからです。

しかし写真は撮るものではなく、作るものです。

そして対話して下さい。

何もない二次元の世界へ。

暗い世界へ。

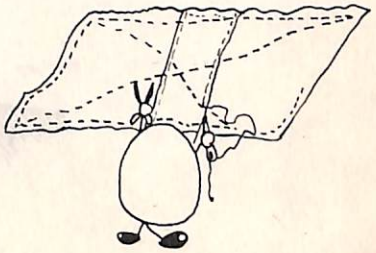
答えてくれます。一光が……。

出てきます。影が……。

対話して下さい。そして写真を作って下さい。聞いて下さい。答えを……。

対話。これが写真部です。

手芸部



この一年をふり返ってみると、いろいろなことがあった。

なかなか波にのらなかった活動。

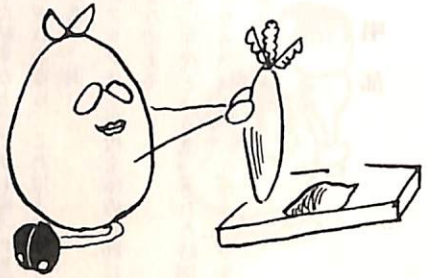
具体的に活動をどのようにしていったらよいか。

部員間で意見がまとまらず、それが解決できぬまま文化祭の準備にはいってしまった。今になってみると計画の重要性がひしと感じられるのだが、別の意味において無駄であったとは思わない。たとえ一部の部員ではあっても、親身に、自分たちのクラブの理想を話し合えたのだから。

文化祭の準備はバザーを行なうことに決まり、自分たちの知っている狭い範囲の技術でできるだけ数多く、いっしょうけんめいに作った。遅くまでの活動は必ずしも楽しいものではなかったが私たちの、いちばんまとまった時であり、その成果はかなり大きかったと思う。また文化祭当日は、顔を真赤にして必死で教えた、リボンフラワーの講習会がとくに印象に残っている。でも文化祭のバザーに欠けていた最も大切なことは、バザーの意義をあまり考えずに、意識せずに作品を作っていたことと、普段からの活動の総計という感じが薄かったことである。

そして普段の活動に欠けていたことは、個人個人のクラブに対する自覚がなかったことと、連帯感が薄かったことである。これからは、一年間の計画を綿密にたてて、部員全体の意志を活動にはっきり反映させてもらいたい。なによりも、これがクラブを自分たちのものにするものであり、活発にかつ有意義にしてくれるものであると思うから。

食物部



私達食物部は部員二十名で編成されています。活動日は週に一回です。部員達は全員女子ばかりですが、みんなで楽しくおしゃべりをしながら、部員の好みに合った料理を作って、楽しく活動しています。中でも、グラタンやケーキなどは、部員等が得意とするものです。

また、文化祭の時には、食堂を開いています。ですからこの時は、部員等が腕前をふるう唯一の時でもある訳です。この様に楽しいクラブなのですが、一年生の部員が少ないのがクラブの唯一の悩みの種です。

生物部

前期は、結局文化祭のための研究や資料集めに終わった。一学期から夏休みにかけて、かなりのスローペースだったため、二学期にはいってからはかなり忙しい思いだった。でも、文化祭はまあまあ無難に終わらせたつもりである。

まずかった点は、前にも書いたように、せっぱつまった時にならないと、真剣になってやらないことだ。現に僕自身も、解剖用具の柄付き針を使って的当てをやったり、抽象画ともイラストとも漫画ともつかぬものを書き、あげくの果てに生物部をつぶして漫画同好会を作ろうなどとわめいていた。これは、実にけしからんことだが、そのわりにはこのクラブは良くまとまっていたように思う。

生物部の欠陥その二、生物部の名薄を見てみると、この部には二十五人ほどの部員が入部していることになっている。しかるに、いつも出て来るのが十人程度とは、これは何事だ。少々たるんどる。特に夏休みなどは（これは夏休みという時期柄仕方のないことかもしれないけれど）一日平均五人程度しか出て来なかった。

さて、後期だが、後期は部誌を発行することに専念したいと思う。生物学などという固っ苦しいジャンルに捕われず、かといって生物に関係ない事ばかりでは、まるで三流文芸雑誌なので、そのへんは適度に調節するつもりでいる。なかには、スパイ小説を書くなどと宣言している御仁もいるので、どんなひどいのができるか今かわキョウミシンシンである。

化学クラブ

松高を象徴する程に、かつては全盛期を迎え部員数も百名以上あった化学クラブでも今となっては数人しかいない。その原因の一つに物事に対する無気力さ、時間に制約される学生の姿がうかがわれる。同時にそれは私自身の姿であるかもしれない。一般に文化クラブは運動クラブに比べると敬遠されるきらいがあるといわれているが、確かに連帯感等はうすいかもしれないがそれは単なる理屈にすぎないと思う。要は、集まる人間の頭脳の使い方如何である。特に自然科学系統というと頭からむずかしいと決めてかかっている。しかし、本当に実験を愛好し、自然科学を学ぼうとする人はクラブに入り発展させて欲しい。

入部した結果がどうであれ個々の思想、実践が生かされるなら、これ以上にまさるものはないと思う。

同時にクラブは、学校全体の一部に属しているかぎりである。

一九七〇年代という画一された時期に直面して新たなる気持ちで、化学クラブをよりよく発展させたいと思う。

合唱部

「歌を歌っていると、悲しい事も苦しい事も忘れちゃう。」そんな歌が好きな人ばかりが集まったクラブそれが私達の合唱部です。

毎週火・木・金曜日が活動日。放課後になると、音楽室から細々と歌い声が聞こえます。それと共に、笑い声が歌い声より大きく聞こえます。その位いつもほがらかで仲の良い部員。それは、技術の向上というより、部員間の交流・人と人との接触そんなものを重要視しているせいでしょうか。何しろみんなとても明るいのです。

音が狂っても、「へへ、音間違えちゃった。」という調子。でも、文化祭そして初めての試みだった教会で賛美歌を歌ったクリスマス＝イブ、その前になると、部員は真面目になり、当日は、不思議と前日よりはるかにじょうずになっているのです。

でも、ここで合唱部の事を、ガタガタと書いたところで、おわかりにならないでしょう。とにかく一度入ってみて、私達合唱部の魅力を確認してみて下さい。とても楽しいクラブです!!

美術部

美術というと、絵の上手な、特殊な美術的センスを持ち、その才能を伸ばしたい人の入る部であると考えている人がいるようです。しかし、実際我クラブに、そのような人はほとんどいません。私達美術部は絵が特別に上手ではありません。むしろ下手ですが、ただ絵が好きであるという熱意から絵を書いています。

しかし、今年は多いに反省させられる点がありました。団体性にかける活動内容のため、のんべんだらりとした雰囲気を作ってしまったということです。そのための活動に参加する部員が、だんだん少なくなってしまいました。画板、石こう、絵具・筆・パレット・ペインティングオイル・カルトン等、設備は十分であるが、思いっきり使えなかったのが残念です。これからの方針としては、部員同志の横のつながりを強くして、部員ひとりひとりが部員としての自覚、責任を持って各々思う存分たのしく活動していけるようにしたいと思います。

物理部

前期の活動内容は、太陽・月・惑星の観測及び写真撮影・星座写真・エンジンの構造研究等である。二～三年前までは、アマチュア無線が全盛だったが、最近では電気班の人員が、ほとんどいなくなり、現在では天文中心の物理部となってきた。

反省としては、その日の天気によって左右されやすい天文なので、思うように観測できなかったことがあげられる。

今後の方針としては、連続的な天体観測、天体写真の展示、科学雑誌への写真出品それに電気についての各種実験等だ。

物理部というと、専門的なことばかりやってむづかしいだろうと思っている人たちが多いようだが、決してそんなことはない。アインシュタインもなければ、ドップラーもない。もちろん相対性理論の「そ」の字さえもない。ただ僕たちは楽しんでやっているだけなのだ。だから、もっと気軽に部会や観測などを見に来てほしい。

ブラスバンド部

ブラスバンド部の一年は、十月頃の部長改選から始まると言ってよいであろう。

入学してから半年しか経っていない一年生が新部長となり、全員新たな気持ちで活動を始める。

そして四月、新しい一年生が入学して来るのである。

この時部員は、たくさんの新入部員を入れる為に、ポスターを張り、ビラをまくのである。

そして夏休み、夏季合宿が行なわれる。

これは、部員間のつながりを強めると共に技術の向上も大である。今までは、長野県の山田温泉で合宿を行なった。スキー場のスキー小屋を借りて練習をし、スキー小屋まで行くのに十分位山道を登る。それはよい運動になる。

きれいな花の咲いた高原で、うまい空気を吸いながらラッパを吹くのは、とても気分のよいものである。この高原での合宿は、とても楽しく、思い出深いものである。

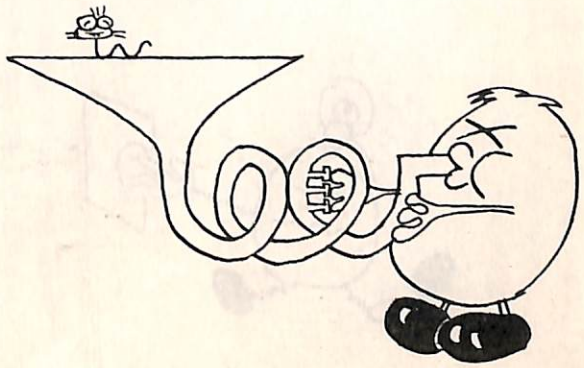
そして九月の文化祭は、我々ブラスバンド部の数少ない発表の場である。四月に入学した時に楽器を初めて持ったという人達が、上手に吹いているのには驚かされる。

次に体育祭で行進曲を演奏するのであるが、毎年文化祭と体育祭との間の日数が少なくて、体育祭の練習が足りないので困っている。そして今年度は、特に定時制の文化祭に出演した。というのは、この松高は全日制と定時制の交流が不活発で、これからの全定交流の活発化を願い、我々の演奏が少しでも役にたてばと思いながら演奏した。

そして昨年は、この行事を最後に部長を改選し、一年の区切りをつけて、また新しい気持ちで活動を開始した。

我々は、この一年間で貴重な経験をたくさんするのである。このクラブならではの経験は、これから生きて行くうえで、大変役にたつであろう。またこの楽しい思い出の数々は生涯忘れることはないだろう。

最後に、クラブの為に色々と骨を折って下さった顧問の先生に、心からお礼を申し上げます。



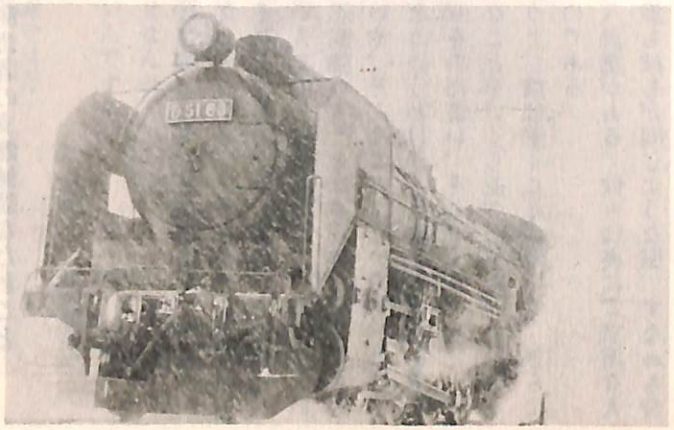
灯サークル

人間て何なのだろうか
人と人のつながり――それは何によって
また何をもたらすのか
生きることってそんなにもすばらしいこと

なのか
返してほしい
何かによって奪い去られたもの
あなたはなぜ生れて来たの？　愛から？
それは愛だろうか
求めることを忘れた人間
生きることを忘れた人間
何も知らずに、知ろうともせずにパンを食べている人
私の生きている事が誰かを殺している
何かを殺さなければ
生きて行けないのか人間て
灯サークルって何？
消えてしまいそうな何かを
必死に挿し続けている。
しかし――
あなたはなぜ
黙ったままサークルを去ってしまったのか
あなたはなぜ
私の叫びに横を向くのか
どうしようもない空しさ
薄暗い小さな部屋で
思いきりボリュームを上げた
ジャズが流れる
全身の陶酔が
私にはたまらない

鉄道研究会

「行動力」こそ我々鉄道のモットーとする所である。日一日とそのなつかしい姿を消してゆく蒸気機関車を求めて一昨年夏の北海道春の北陸、昨年夏の九州、冬の羽越、さらに消えゆく都電を初めとする市内電車を記録せんと日本国内所せましと歩き回っている。とにかく根からの鉄道マニア達なのである。校外活動が多く校内での発表は文化祭ぐらいしかないが文化部唯一の行動派である。今後校内活動においては写真展、旅行相談、鉄道映画上映等の活動を行って会員を増してゆきたい。また、校外的には全国の同誌と交流を深め、消えゆくものばかりでなく、現実的な問題として、大都市における通勤通学輸送問題や貨物輸送の近代化などを取り上げて研究してゆきたい。



第五章

昏迷の中での創造

私達は今、高校という社会に属し、それは人間社会へと属している。
ひとりの人間として……
〝人間〟　それを社会的動物という
〝人間〟　それは自ら考え、おもい、悩む……
そしてそれらにぶちあたり、とりくむ時・人間の人間たるゆえんがあらわれる。
自らそれを解決し、新たなみちへあゆむとき、人間の価値が生じる。
〝人間〟
それはいかなる時、いかなる場所、いかなる時代においても、自ら考え、おもい、悩み新たなものを創造する。
昏迷の中で……

先天性精神分裂症患者の支離滅裂なたわごと

二年　熊谷正弘

人間、特に日本人って奴は恐るべき働き者だ。感心なことに年がら年中働いてばかりいる。その仕事が好きで好きでしょうがない人はそれでいいのだが、驚くべきことに、その仕事を好きでない人まで一生懸命働いている。こういう人は世間からは、「忍耐強い人」とほめられ、自分でも内心そう思うのだが、「いや、そんなことはないです。」と心にもない謙虚な言葉（どういうわけか、日本ではこれを美徳とする習わしがある。）をのたまい、そして……。
もうよそう。こんなことをいくら並べたてたってしょうがない。結論から言うと、僕は働くことが嫌いで、さらに模範的人間も嫌いなのである。
エリート社員という言葉がある。彼らは実にご立派な人々だ。馬鹿みたいに誰も彼もが同じような服、すなわち背広を着、上役から認めてもらおうとして言葉巧みにゴマをすり、家に帰ったら帰ったで、「上役に認められるには」などという本を読んで、明日のゴマすり作戦のプランを立てる。そして見事に昇格し、すなわち月給を上げてもらい、平和な家庭を築き、老後のためにせっせと貯金し、そして

その金を使う前に死んでしまうのである。なんと素晴らしいことではないか。
エリート社員と対照的なものに乞喰がある。僕は今年の夏に渋谷駅前で、乞喰というものを生れて初めて見たのだが、二人いた乞喰の片方は、悪趣味なことにわざわざ半ズボンをはいて義足を露出させているのである。二人とも無論ぼろぼろの服を着ていた。その姿はまるで醜さの集合体……いや、それだからこそかえって、僕には彼らが美しく見えた。二人の乞喰のそばを、折り目正しい会社員達がさも軽蔑したような目付きで通る。僕は通り過ぎて行く模範生的会社員達を見て彼らを醜いと思った。彼らは機械だ。そして乞喰は明らかに人間だ。乞喰は時間にも上役にも支配されない。
時間……、こいつは恐るべき化け物だ。そして人々は、できるだけ時間を節約し、のんびりしている時間を「無駄な時間」と呼ぶ。しかし、僕に言わせれば、好きでない仕事に費やす時間の方がよっぽど「無駄な時間」だ。
今や世界は超スピード時代である。何でもかんでもスピード・アップだ。一例をあげると百メートル競走。たった0.1秒を縮めることにやっきになっている。たまには、百メートルをできる限りゆっくり歩き、一番遅くゴール・インした人が優勝、なんて競技がないものだろうか。この競技の実況放送「あっ、見えて参りました。〇山×男選手。39日間の苦闘のため、髭ぼうぼうです。スタート前はあんなに白かった同選手の顔が、38日間も顔を洗わなかったため、まっ黒です。それにしても百メートルを39日もかかるとは、何という天才的白痴。あっ今ゴール・インしました。」

幸せ

——あなたの幸せってなんですか？——

幸せってたくさんあるでしょう、
けれど、知らない人が多すぎる……
自分がどれほど幸せか、
考えてみるといいのに、
あまりに幸せが多すぎて、
びっくりすることでしょう。
みんな、ぜいたくなんですヨ、
それで、あなたの目の前にある
小さな幸せなんか、
わからないんですネ
小さな、小さな、幸せほど
私達にとって、大切なものはないのに、

現代のおばけ

二年　高瀬桂子

頭でっかちな自己意識の強いオバケ……
口からは理論だけが機関銃のようにとびだし手も足もない
オマエ達、これ何だか知っているかい、
〝エッ、見たことがない〟
おかしいナァ
たしか、一日一回はかならず見てるはずなのに、
これは、オマエ達だよ
鏡に写ったオマエ達の姿だよ
サァここに鏡がある。
見てごらん
オマエ達のみにくいこっけいな姿を……
美しいと思うかい
ビックリしているね、口もきけないかい……
アア、よしてくれ、口をひらくのは、
又、自己弁護のことばだけが機関銃のように
飛びだすにきまってる
ボクはもう聞きあきたよ……

なんとなく……

二年　鈴木美代

空地に〇〇階だてのマンションが立つ。
あの人なんでああせっせとハンマーふりあげてんのかな。
あんな大きな鉄骨にしがみつくようにして仕事をしている人、まるで象の背中のはえのように。
ものの創造か……
あなたは知っていますか
あの四角い箱の中になにがはいっているか
あのまあるい箱の中になにがはいっているか
わたしは見えるのです。
あの四角い箱の中になにがはいっているか
あのまあるい箱の中になにがはいっているか
どでかいマンションだな、でもあれもあの高さが限度だってきめられているようだな、
限度……限度か
でもなぜ行動するのか
限度のかべの存在をたしかめようと……
もしくは、そのかべをやぶろうと……
誰かに言わせればこんなこと自己満足だというだろう。

わたし自身そう思える。
でも行動する。
『世の中へのその人間のなすべきことがなくなったら死ぬんだな』　誰かがそう言ってたっけ。
今わたしのなすべきこと……あるのかもしれない。でもそのなすべきのべきが真のべきかどうか今のわたしにはわからない
ちらかしっぱなしの部屋をかたづける人がなく「それじゃわたしが……。」　と言ってその仕事にとりかかる。ただそれだけのことかもしれない。
仕事のない人間の死……仕事のないことイコール死……
だから死がこわくてその仕事をみつけようと行動する。そうなのかもしれない。
四角い箱の中の人間的な情、素朴で美しいもの、すごく抽象的ではあるけれどそれが存在しているのが四角い箱もしくはまあるい箱の中……
わたしは、こうやってベランダにでて音楽をききつめたいかぜと光の中でひとりをあじわうのがたのしい。
でも、どことなくはかない。
四角い箱のもしくはまあるい箱の中の存在だから……
あれは確か正月あけの三学期だったな、クラスのある人の欠席が急にめだったのは。そういえばそれについていろんなこと考えたっけ。
結局わかんなかったような気がしたな。でもその意味がなんとなくわかるような気がする今自分がそうしたいと思うから
無気力……
やたらに考える『死』
限度の中の行動……
皆いったい何を考えて行動しているんだろう。あの鉄こうにしがみついてハンマーをふるっている人はなにを考えて……できあがったマンションにむかっている自分をか、それとも現在の存在をたしかめているのか
確かに「限度と行動について考えたことがあるか」ときく、するとその人は答えるだろう、「おまえさんは考えすぎだよ。」と。
「努力、努力、今年こそはやるぞ。」と空にむかってさけぶ。それは、一九七〇年をむかえたのか……と思ったとき、ふっとわきでてくるきもちから。
ああ、せめてさくの中の人間ではなく、さくの中の牛か馬かにでもなりたい。
空地に〇〇階だてのマンションがたつ。

素粒子

三年　成川啓一

それは何時であったか？
銀河系宇宙など　まだなかった頃か？
それともメネス王の栄華を誇る時代だったろうか？
体つきが俺とそっくりで
脳細胞の数まで同じの
俺自身が生きて居たのは

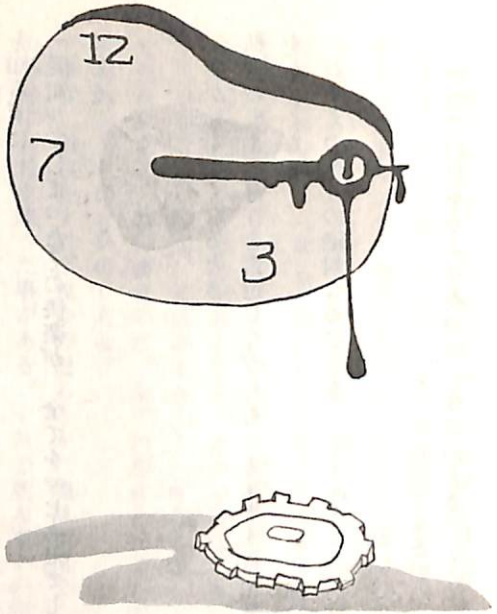
俺は何番目の俺なのだろう？
俺はきっと
無限番目の俺なのだ

ちょうど今の様に
彼は泣いていた
気の遠くなる程昔にも

黎明時

夜が明ける
暗闇が潮の様に引いて行く
朝が来た
薄明が広がって行く
朝もやが大自然の息吹きの様に
朦朧としている
太陽が言葉を取り戻す
街々に陽光は輝く
昨日の夢が消えて行く

心の動揺を押し殺して
又　一歩大人に近付いた二人が
その愛を歪めながら
何も得られなかったと別れて行く
心は太陽の輝きを忘れて
次の生活に向かう
そして新たなる憎悪の対象と
憎み合いながら口づけをかわす
昨日の夢が消えて行く



中毒者

二年　桐生玲子

完璧に注射しおわった魔薬中毒者の両眼には
するどく注射器がつきたてられているに違いない
　アー　夢があるかも……と
ながれてゆくときの　つかのまのときをもとめて

　第二時限に陣どって三時限をかえりみる
第一時限に陣どり三時限をあざわらう
第四時限を夢みつつ　今このとき
三時限の私は涙する
　私であって私でない影人が　私の内の時限に存在する
私の内に陣どる
各々(おのおの)の影人はこの私をあざわらう
この私はただそれのなすがままになっている
影人たちにふりまわされながら
　ときのながれのなかで
しかし　この私にもちからがあたえられた
私をあざわらった影人たちをみかえしてやる
ときがきたのだ
影人よ　おまえがいくらあがこうとも
いくらちからをふるおうとも　得れないものだ
今　この私にしか
　……
このおそろしく強く偉大なものよ
弱者を勇者と化し
新しき血潮を生みだし　新しき力をあたえるものよ

しかし　おまえの力はあまりにも
　強い！
弱者はそれゆえ　影人を抹殺し
自らを虚人となし
おまえの力のみにすがろうとする
全てを忘却となし　無となし
おまえのみに生きようとする
　おまえの真のすがたを知らずに！

かつて影人におびやかされた以上に　苦しまさせることを知らずに
一度知ってしまったその快楽が　全てをマヒさせてしまうことを

私が私でなくなるとき
私はおまえの存在を否定しながらも　ますます肯定せざるをえなくなる
　おまえの存在の絶対なることを

かつての私をかえりみつつ　今このとき
私は涙する
アー　夢がなされるように……と
　ながれゆくときの　つかのまのときをもとめて

生と死について

三年　成川啓一

生と死、これは全てにおける最も根本的問題だ。これを考えずして、我々における人生問題一般は考える事が出来ない。なぜならばそれらの諸問題は生を肯定した後に成り立つものであるから、この見解のもとに僕は生と死という最重要問題を論じたい。僕が高校時代で考え続けたものとして、脅され続けたものとして、次の世代に何らかの形で参考点に成り得ると信じて。(思い上がりかも知れないが。)

生きているという事は本当に意味があるのだろうか。本当に価値があるのだろうか。これは疑問だ。少なからず僕は人の生命というものは、他の全事物をも含めて全く意味がないと考える。なぜならば、この人間の魂、肉体は、他の現存している生物や無生物と同様に、大自然の中で単に一個の存在でしかないから。つまり、我々が一個の物体に対

した時、我々は、その物体が我々の生成作用に関与しないかぎり、それは我々にとって全く無価値である様に、大自然の中で我々は全く無価値なのだ。そして、時間の流れの中においても、過去の人々が我々に忘れられて行く様に我々の存在していた事も、遠い未来においては全く忘却され、生あるものは必ず死すという大自然の徹則の下に、人類もやがて滅亡し、まるで何事もなかったのかの様に闇が支配する事になる。結局、人間が生きようと死のうと、それは無意味であり、無価値なのだ。全ての存在というものが全く意味を持ち得ないのである。

では、自殺をすれば良いのだろうか。僕は実際ここまでの理論で自殺を謀った事がある。それで死んでいればもう何も関係ないのだが、どういうわけか生きのびてしまった。そしてよく考えると、全ての事物が無意味なのだから、自殺する事だって無意味ではないか。という事に気づき、かくて、何も出来ない状態、生きる事も、死ぬ事すらも出来ない状態(キルケゴールの絶望とは多少違う。)になってしまった。だがこれは致命的な誤謬だった。あれは、単に客観的事実でしかない。客観的に見たら、どんなものでも無価値であるのは、自明なのだ。ただ主観的発動だけがその発動者たる個人においてのみ意味を有するのである。つまり、人間の死にたくない、生きたいという根源的本能に基いてのみ人間は生きる意味を獲得するのである。それは、人間が精緒不安定であるという点だ。精緒不安定である故に人間は時として、生きていたくないという感情に取らわれる。すると、主観的にも客観的にも一致したのだから自殺するのが当然になる。だが、これも又、誤謬なのだ。確かに生きていたくないとは思うかもしれないが、厳密な意味で死にたいとは感じない筈である。つまり、死への恐怖はあるのである。「死への恐怖→死にたくない→生きる。」この三段論法で、自殺を謀った人間が生きのびるという事実は、世間によくあることだ。生きていたくないから死ぬというのは全く正当の様に思えるが、この理論で死への恐怖にもかかわらず自殺を敢行するという型態は、最も多い逃避の典型であると見てさしつかえないだろう。なぜならば、死への恐怖というこの根本的本能を歪曲しているからだ。突き詰めれば、この本能こそ、生命力の源泉であるのに、例え、生活苦の為とは故、この行為は不忠実としか言い得ない。(だかと言って、僕は自殺者達を批難する気にはならない。彼らの中にはもっと深く思索して悩み、死んで行った者もいる筈だから、そして生きている連中でももっと安易な逃避をして、それ故生きている者も多く見うけられるから。)第一、人間は、ほぼ周期的に死にたくなるものである。その度事に死のうとしていては大変だ。(人間程、死にたがるものは他にはいないだろう。)それら数多くの死意を危くもたないでいるものこそ死への恐怖であろうと思う。

それは、忍耐力の源とも思える。

次に生きる上で最も重要な事は何であるか、それを述べたい。僕自身の個人的見解に過ぎないが。

もし、人間が世界に自分一人しか居ないとしたらどうであろうか。我々は、自己を知ることなしに過ごさねばならないであろう。なぜならば、我々は、環境との対峙において自らを知るのであるから、つまり、自己の発する言葉に対する反応や、相手の自己に対する分析等によって、我々は自己を知るのである。相対の存在なくして存在するものは有り得ないであろう。相対のないただそれにおいては、それがそれである事さえも永久に知れないのである。それと同様に生も死を考えずしては、本来の生を過ごす事は出来まい。つまり、死について深く考えれば考える程、そして、生をその関連において突き詰める事が、生をより充実させることになると思う。だいたい、若ければ若い程、死を意識する者は少ない様だが、人間なんて何時死ぬか分からないのである。それを人間はどんな危険な窮地においても、「自分だけは」という気がある。全く根拠のない確信である。彼は年老いて死ぬ寸前まできっとそう想い続けるだろう。人間が悔恨満ちて断末魔のうちに死ぬ所以である。本当に人間は欠伸をした次の瞬間には死ぬかもしれないのだ。事実、世界のうちにはそういう種類で死んでいる人もいるのだ。それでも、人間は、まだ明日は生きられるという根拠のない幻想の上に生きているのである。だから、次の様な現象が起きるのであろう。自分には、卒業したら生活が待っているのでは、と考え、その年になると後五・六年したらとか、結婚したら、そこに生活があるのでは、と思いその年になると、また、安易に末来へ賭けるという様な人間は、その日、その日を充実して過ごさねば絶対に後悔する事になるのだ。しかるに、死を常に生の相対として取らえ、それを深く思索していれば、自ら死を意識して生の不安定を知り、日々の生活は充実性を帯びるだろう。悔恨の最中(さなか)で没する事程悲惨な生涯はない。

覚醒と自立のための六篇

二年　清水博之

転身の旅立

ぼくは極限の孤独のまえに跪づく
ぼくは極限の苛酷のまえに涙する
焦燥と挫折の感覚は
ぼくを異郷の空の元での号泣に駆り立てる
明るい車窓の光線は
ぼくをいっそう独りにする

唯一人の友との正負正反対の別離は
ぼくの存在と意識を研澄ます
原点の定まらぬ零下(マイナス)無限大への思考は
外界と内面との間に断絶を形成する
しかし
ぼくは飽迄正の整数としての存在を願っている
そしてそれはある値を持たねばならぬ
ぼくの存在は些かも外界に減少を齎すことを許されない
負数の存在を正とするために
他の正数との和を期待してはならない
ぼくは自らの絶対値を正とするために
今一つの負号を自らに付さねばならない

それは自らの魂の覚醒にほかならない
ぼくは自身の奥底に存在する自身を求めて旅に出た
真に覚醒し価値ある自身を求めて

異郷の空の下で

碧く広大無辺に拡がる空の下
雲は山ぎはより厚く白々と油絵のタッチを思わせている
しかし　ぼくはそれらと離脱された一片の雲を見た
ぼくはその雲に自身を見たような気がする

時計の文字盤に目をやり
方角を異にした異郷の友に愁いを馳せる
するとぼくの心を不安と後悔の念が通り過ぎる
自身を満すには友は余りにも小さく
友を満すには自身の空間を空虚の感が覆い尽す
満されぬ連立方程式のように

ぼくは再度根を捜し求めなければならない
しかもそれは自身の努力に拠らねばならない

ぼくは冷めたい北国の秋風の中で身震いをした
さらにその風はぼくのガラン洞の心で吹荒んだ
その時ぼくは友の温もりのためならば
自身の冷結をも躊躇せぬ思いになる
しかし期待によって必然化された行偽は
それが故に許されていないことをぼくは知っている
偽りのない自身を持って
偽りのない友を願わねばならぬ
そのためには自身の底にある鉛の扉を開けねばならない
ぼくはその扉の鍵を求めて旅に出たのだ

情景

照りつける太陽は吹きつける冷めたい風に快よかった
光と水の織成す幻想的(ファンタジック)な饗宴は
青白く透徹っている水のニンフ達の宮殿だ

水は冷めたい秋風に小さく白く波立ち
青い空にポッカリ浮かんだ
白い雲の分身を掻き撩す
水面のスクリーンとぼくの髪を乱した風は
突然生理のように通り過ぎていった
ぼくは再び静寂を取戻した水面に
美くしい裸体のニンフを見た
淡い光に透視されたそれは
水のベールにつつまれ
秘かな所を隠すように屈折していた
ぼくは光のなかで渇きを覚える
器官はしだいに熱さを増して来る

やがてニンフ達は静かにその美しい肢体を表わし始める
胸から腰――
そして恥部へ達する曲線は
山間のハイウェイを思わせるように
水の中をくねって行く
そしてニンフ達はぼくの視線を知らなかった

ぼくは沈黙のうちに
自身の内部が燃え始めていることに気がついた
ニンフ達の姿と光の量とは
ぼくを官能の狂宴へと導びく

が
ぼくは吹きつける風に
自身の欲情を癒してくれることを期待する
それでもニンフ達はそんなぼくを揶揄するかのように
美くしい肢体を見せびらかす

ぼくはとう〳〵自身の内部で爆発が起ったことに気がつく
そしてぼくは熱く堅い自身の性器をもって
ニンフ達に対抗する
ぼくは深遠な水に向かって射精を試みる

しかしニンフ達はそんなぼくの存在を無視するかのように
水の中を旋回する
まるで
ぼくが異数の世界の異質の生物であることを
嘲笑うかのように
やがてそれらのニンフ達は
風のための波立ちに何処となく
かき消されて行った

ぼくはひとり残され
水面に漂よう精液の青臭い臭気に
打ち拉枯たような

虚無と挫折を感じとった
それは自身への欺瞞に対する
苛酷な刑罰に他ならない

照りつける太陽は
そんなぼくの心を乾上がらせ
冷めたい風はそれを凍結させた

原点への郷愁

山間の渓流は
澄みきった空と塵埃のない空間に
快い響きを残して流れて行く
ある時は堅牢たる岩板より滝となって落下し
ある時は小鳥の旋律に美妙なハーモニーを添え
又ある時には行く手を阻む無数の岩石に
ろう〳〵たる瞋りの声をあげ
それらに挑みかかる

それらはきみの真なる感情だ
きみはそれらをもって自らの実態を余す所なく
傲然とぼくに立ち向かう
きみは些かも逃げ隠れはしない

ぼくはそんなきみに屈することを禁じ得ない
きみはぼくの欺瞞と虚栄に汚し尽されたぼくの心に
真なる自身を求める勇気を与えてくれた
ぼくは汚れきった自身を拭うために
新たな原点へ立ち戻る
そこには些かの装いも営利もあってはならない
ぼくはそこに到るために
過去というものを暗闇の底へ埋没する
自身を包んでいた不将な衣服を焼き捨てる

ぼくは真の自身
外界に生まれおちた自身に再び立ち戻ることにより
初めて外界の空気に接触することができる
その冷めたい外気は
きっとぼくのあるべき姿を目覚めさせてくれる

恋唄

孤独という観念は常に自己の利己心より派生する
人は寂しさの自覚を外界のせいにする
そして他人の領域に介入することによって
自身の欲求を満そうとする
そんな状態に於ける友人は人間でなくなる
それは単なる自身の分身であり
あるまじき嗜好性による偶像に過ぎない

友よ
ぼくはきみにとてつもなく大きな侮辱を与えてしまった
ぼくは自身の利己心のためにきみの全人格を
踏みにじってしまった
そしてきみの領域をも犯してしまったのだ

友よ
そんなぼくを許してはならない
ぼくはその偽りの自身に対する
きみの鞭を持っている
そして自身の奥底に内存する
真の自身への寛容を願っている

ぼくはそのときにこそ
真に覚醒し自立し得る魂をきみに与えよう
きみはぼくとの友情に
きみの持つ聡明さと英知を捧げ
ぼくは小さな胸に内存する大いなるパトスと
奇妙な音楽とをそれに捧げる

互いの生活と人格を認識し合い
真に自立した者のみに許される友情は
恋愛に勝る私欲を超越し得るものだから

小さな魂への助言

快楽の根元は自己の中にのみ存在する
暗闇の捺落の底における猿芝居は
一個人の全人格を埋め尽すことができる
しかし
人間は自己の脳裏にメロドラマを映写してはならない
人間は決してそのヒーローになることを許されない
人間は自身の造り上げた利己的な人間感情に
最大の快楽を追求しようとする
人間は喜びに泣き
悲しみに笑うことを最大の快楽とする
しかし
人間は再度自身を懐疑することが許される
現在の感情は真に真に自身の感情なのか
否　それは自己の内部に存在する
利己的ヒーローの感情に過ぎぬ
人間は生理的現像においてのみしか
自己を確認することができない
空腹は彼彼自身にほかならない

人間は真の意味で覚醒していなければならない
常に自身を確認しなければならない　認識
自己の最も奥底にある疑問は
人間が捺落の悪夢から目覚める唯一の手段なのだ
そして人間は誰でもその覚醒剤を有している
…

殺人に対する小論文

二年　大久保　堅司

私はときとして自分自身が解らなくなる。その一つとして、自分が最も親しくしてきた人を急に裏切りたくなったり、又殺してしまいたくなる。事実私がナイフ等を持っている時など、これを相手の胸につき立てたらどんなにおもしろいことになるだろうと思ったり、駅のホームで電車が来た時に、隣にいる人を突き落としたら人口減少に繋がるのではないかとか、とにかく本気でそう思うときがいくらでもある。それは親に対しても、何に対しても同じである。

ベトナムで大量虐殺があったのを週刊誌で見たが、たしかに残酷だと思う。反面この殺されているのが低開発国の土人ということで別に当然という様な気もする。はっきり自分でも分らないが、人間の生とは尊重しなくてはならないものと決められているらしい。(いったい誰が決めたのか知らないが)

確かに、母が良く言っていたし、小学校の先生もそんなことを言っていた。それは法律に決められているからであるらしい。

日本など確かに人を殺すと、たった一人でも大げさになる。戦争だと百人ほど殺してもよほどの事がない限り新聞の隅に載るだけである。果たして、武器を持っている者を撃っても良いが、持っていない者は撃ってはならないと、どこの国で決めているのだろうか。

交通事故が多くなったとギャアギャアと、テレビやラジオのアナウンサーがいっている反面、人口増加が問題だと又ギャアギャア言っている。これはちとおかしくはないか。交通事故で人が死んだら、アナウンサーは喜ぶべきではないのか、「みなさん、本日は五人も死んでくれました。ありがとう。」って、もっともアナウンサーだって内心喜んでいるかも知れない。

いったい殺人とは悪いことなのだろうか。「当り前だよ君。法律に出ているじゃないか。」

冗談を言うな。法律は国民が確めるから有るので、国民が作った様な物ではないか。だが法律以前に殺人をしてはいけないという物があるのであろうか。自分が人を殺すことを欲しないからかな。だが私の場合そんなことはない。戦争ではどうだ、交通事故では、でもやはり殺すことができない。それは法律という名のもとにナイフを呉れないからではないのか、いったい人を殺してはいけないなんて先天的に思っているのは、馬鹿かくそ真面目だろう。

でも私は、アリや鳥そして犬等は殺したくない。なぜなら私がそのアリや鳥を殺したり、殺されるのを見てきたからである。

「でもね君、人間というものは精神的な生き物だよ。則ちその様な経験から殺人にまで発展させれば良いではないか。」

くたばれ気違い、冗談を言うな、私はそんな適当にアリや鳥や犬を殺してきたわけでもないんだ。

私は人を殺したこともなければ、殺されるのを見たこともない。だから良いのか悪いのかはっきり分らない。いやそんなこと、誰にも分っていないのだろう。

結局人間というものは、本能的には殺すということを、どうとも思わない生き物ではないだろうか。

修学旅行

二年　長島茂男

二年の二学期になって、私達はようやく修学旅行というものを身近に感じるようになった。それまでも、予備知識を身につける意味で、班を組み、その土地の気候・風土などについて自由研究を行ったりして修学旅行に何らかの期待をいだいていたものの、それほど気には、かけていなかった。ところが、あと数週間というころになって、あわただしくなり、友達の間で修学旅行について話しているのを耳にするようになった。このような状態を経て、十月十七日に実施されることになり、その日から四泊五日（車中一泊）の予定で東北（今回の修学旅行は、東北コース・関西コースの二コースに分かれて実施された）に向かった。

私達の場合、スケジュールが非常に厳しく十七日当日は、午前六時二十分に上野駅に集合ということで、自宅の遠い人は、友達の家に泊らなくてはならなかった。それでも、ほとんどの人が、集合時間より前に着いていたようで、最初の行動、つまり集合は成功したようであった。

午前七時近く、いよいよ列車（上野発・特急おが一号）に乗り込み、東北に向けて出発した。列車に乗っている時間は、山形まで六時間半と非常に長く、どのようにして時間をつぶそうかと考え込むほどであった。ところが実際は、それほど退屈もせず、雑誌を読んだり、車窓から見える景色に見とれていたり、友達と雑談などしているうちに山形に着いてしまった。

その日は、たいへん良い天気であったので、山形駅ホームに降りたった時、まずとてもすがすがしく感じた。次に、ここの空気は〝うまい〟と思った。駅を出るとすぐバスガイドがバスに案内してくれた。私達の利用したバスは十和田観光バスで、割合ときれいであったが、ガイドの女性は、期待に反してあまり美しいとはいえなかった。生徒全員がバスに乗り込むと、バスはまず私達を山形の「立石寺」に運んだ。ここには長い長い、なにしろ長い石段があり、この石段を登りきるにはだいぶ時間がかかった。それで、他のものもたいして見物せずに、この登り降りに時間をかけただけだった。ここの見物を終えると、次に「大滝」に向かい、短時間の見物を終え、あたりが暗くなり始めたころ、やっとホテルに着いた。これでやっと一日目の見物が終了したと思ってほっとした。

このホテルは、松雲閣といい、東北の方では割合と大きい建物のようであった。ホテルに入ると、フロァーいっぱいにスリッパが用意されていた。それを各自はき、前もって決められていた部屋に案内された。私のグループの部屋は、三階の奥の部屋で、カーペットを敷いた廊下をだいぶ進んだところだった。廊下は、まるで迷路のようで、どのように来たのかわからなくなってしまうほどだった。私のグループは六人、皆とても気が合うのでとても楽しい。この旅行でなんといっても楽しいのが、グループごとに過ごす夜である。ただ、私達の場合ちょっと気になったことは、引卒の先生の部屋が非常に接近していることであった。このこともあって、あまりそうぞうしくはできなかったが、けっこう楽しく過ごせた。この晩・床についたのは、十二時をいくらか過ぎたころであった。

次の日の朝、私とMは、五時半ごろに目をさました。そして洗面所に行き、用をすませた。起床は六時のため、まだ誰も起きている様子はなかった。それで、部屋にもどり、起床まで待つことにした。その間、Mは耳ざわりな音をたてて、髪に一生懸命ドライヤーをかけていた。この音で目をさました者もいたが、起きようとはしなかった。起床時間になっても起きようとする者はなく、結局、先生にどなられて起きるといった状態であった。私達はいちばん起きるのが遅かったため、食事にまで遅れる始末だった。それで、バスに乗るまではせわしい状態が続いた。こうして、せわしく続いたホテルの朝は過ぎ、いよいよバスに乗り込んだ。その日は、船で「松島」に行くため、最初にバスは塩釜港に向かった。バスの中では、寝てしまうものもいて、あまりさわがしくはなく、むしろ静かなくらいであった。それでも港に近づくにつれて、だんだんさわがしくなってきた。

塩釜港はなんとなく、のんびりとしていた。船が塩釜港を出たのは九時、多くの島が海面に顔を出しているところを縫って船は、松島に向かった。松島に着くまで、私はずっと寝てしまっていたので景色は、ほとんど覚えていなかった。それでも別に後悔はしなかった。かえって、すっきりしたようだった。

「松島」に着くと、この日も良い天気で、とても気持ちがよかった。ここで私達は近くの寺などを見物した後、昼食をとった。この時、私は半日があっけなく過ぎてしまったことを妙な心持ちに感じていた。この後、バスは私達を平泉の「毛越寺」・「中尊寺」に運んだ。この両方の寺を見物し終えて、私は、この二日間なんとなく寺ばかり見物しているようでつまらなかった。それで早く宿に着たいものだと思った。他の人達だっておそらくこう思ったにちがいなかった。ちょうど「中尊寺」がこの日の最後の予定であったので気が楽になった。

バスは、平泉から一時間半ほどのところにある花巻温泉に向った。そこに、この日の宿が私達を待っているのだった。バスの中では、菓子を口にほうりこんだり、歌を歌ったりして、皆適当にやっていた。バスが花巻温泉に着いたのは、六時ごろでもう日はすっかり沈んでしまっていた。

この日は、花盛館という宿に泊った。この宿で私達は夕食後、この土地の郷土芸能である鹿踊りを見学したが、よくわからず結局、つまらなかった。この後、私と数人のものとで外へ散歩に出かけた。外はかなり冷えこんでいた。それで、セーターだけで出てきた私は寒いのをじっとこらえていなくてはならなかった。空には、雲ひとつなく、夜空いっぱいに星がぎっしりと詰っているように感じられた。それほど星がたくさん見えたのだった。「やはり東北だけあって、東京とはまるでちがっている……。」などと思っていると、空に流れ星。そこで私は、「……」と星に祈った。こんなことをしているうちに体がすっかり冷えこんでしまったので、私達は宿にもどることにした。宿にはいたとたん、暖かい空気が体を包み、救われた気がした。

私達の部屋にもどると、男子と女子とでゲームをしている最中だった。それで、さっそく仲間に加わってゲームを楽しんだ。こんなことをしているうちに夜もだいぶふけたので、皆、各部屋にもどった。けれどもすぐに寝てしまったわけではなく、この晩もかなり遅くまで起きていた。

こうして二日過ぎ、すべて予定どおり行なわれた。そしてあと残る二日、あとたったの二日、そう思うと、私はこの旅で抱いていた期待が消えていくような気がして、淋しく思った。

…　…

三日間目からは、おもに自然の美しさを見ることであった。たとえば、広々とした小岩井農場・紅葉のきれいな十和田湖などであった。いずれもとても印象深く、前半の二日間に比べると、後半のほうがずっとすばらしくと思った。また

他の面でも充実していたように思えた。しかし、いちばん残念なことは、スケージュールの多い割に、期間が短いことであった。もう少し余裕がほしいと思った。

四日間がたちまち過ぎ、何事なく全日程を終了し、四日目の夜、私達は青森駅のホームをたった。そして急行寝台に乗りこみ、上野への帰途に着いた。

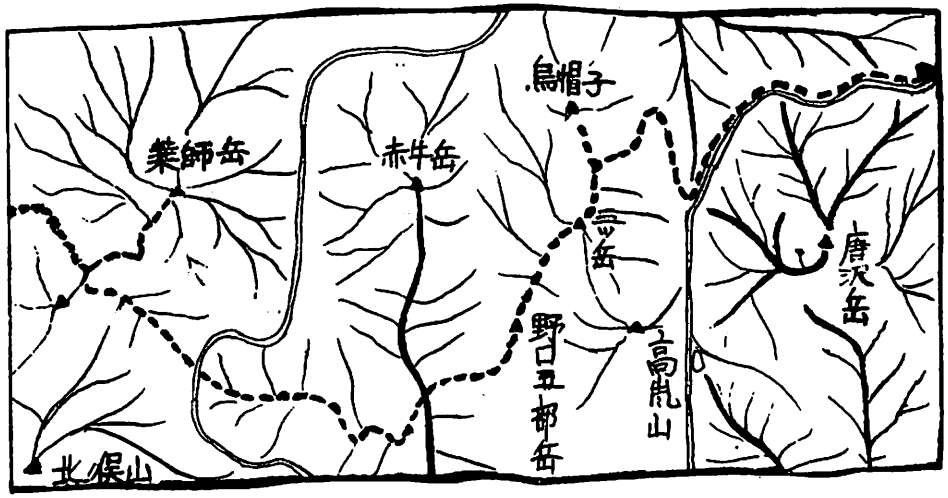
山岳紀行文

夏山合宿

前半……鈴木良紀
後半……海老沢一善

トロッコが走る軌道づたいに出発したのが、七月二十一日の朝の五時頃であった。一時間程歩いていたら、一年生の息が荒くなってきた。まだ山にかかっていないのに、この調子では、リーダーとして先が心配だった。濁小屋に着いて、それから北アルプス掘指の急坂というブナ立テ尾根に入った。予想通り一年生は、一人づつバテ始めてきた。そのためペースが遅くなり、予定通りに目的地に着けなくなってはいけないので、一年生はO・Bにまかせて、二年生だけで先に登ることにした。どうにかこうにか全員目的地に着き、六日分の食糧や衣類を積んだ重いザックを肩からおろして休む間もなく、テント張りと料理を作ることにした。しかし、皆、疲れているために動きが鈍い。山岳部伝統のまずい料理を食べ終えて、山での第一日を終えた。

あくる朝は、



四時に起きて、朝のうちに一部の一年生を残して、鳥帽子岳を往復した。その頂からの展望は、かなり素晴らしかった。

それから予定のコースを出発し始めた。もうすでに二千五百メートル以上の高度なので歩くには、比較的楽であったが、それでも一年生は、バテバテムードだった。それに、先頭の僕も全体のペースがうまくつかめなかったので、二番手と僕との間が離れてしまうことがたびたびであった。山での唯一の飲み水は、雪渓の水であるが、疲れているときは、この冷たい水は最高である。山に来ると水のうまさがしみじみとわかる。一年生の諸君も休憩中には、我々の目を盗んで実によく飲んだが、水のうまさを知っただけでも、彼らには山に来た甲斐があったと思った。五郎岳を過ぎたあたりから急に雲行きがあやしくなり、それに皆の疲れ方もひどかったので、目的地の前でテントを張ったが、水がそこには全然無いので、雪をあつめて、バーナーでとかして水をつくって料理をすることにしたが、装備の点検が悪かったために、バーナーも完全に使えるのは、一個だけだった。そのために料理も手間のかからないインスタントラーメンに急きょ変更したが、今回の山行の中で一番、このラーメンがうまく感じたのは皮肉だった。しかし、10人の男が鍋一杯のラーメンを食べるのだから一人当りの量はたかが知れいるので、皆、鍋の中に残っているわずかなラーメンを狙って、この時ばかりは、殺気がテントにみなぎった。

テントを張っているうちに、雨がポツリと降り始めてきた。傾料地に張ったので、雨が大降りになったら、一ペンに流されてしまうので、僕は多いに焦った。ヤケクソに溝をテントの回りに掘らせて、フライシートの上にポンチョもかぶせて万全を期したが、幸い雨は、じきにやんだ。

七月二十三日……夜中から朝まで風が吹き通しで、うるさくて、とても眠れなかった。ジャンパーを着て雪渓の水を先鋭と一諸に取りに行く。そろそろ疲れが出てきたと見

えて、一年生の動きが鈍いようであった。キャンプをたたんで出発。両側が切り立ったナイフの刃のような分水をみんなこわごわ登った。小晶小屋に着いて、今、登って来た所をふり返ってみると凄い眺めである。よくもこんな所を登ってきたと思った。水を補給して、僕達が休んでいる間に先生とO・Bは水晶岳（二九七七米）に行って来た。そして、すぐ出発してしばらくすると雨が降ってきた。我々一行はポンチョを着てほとんど走るようにして、三時間のコースタイムの所を一時間半で来てしまった。おかげで祖父岳の頂上での喜びを楽しむ間もなく雲ノ平に着いた。ここでテントを張るはずであったが、雨がひどいので、雲の平荘に泊まることになった。山荘ではみなくつろいでトランプなどをして遊んでいた。外は激しい雨と風の嵐であった。明日の天気を気にしながら、ラジオを聞いて落ちついて眠むった。

七月二十四日……朝、起きて見ると少し雨が降っていたが、朝食の用意をしているうちにやんでいた。まずい朝食を食べて山荘を発った。畳っていたので美しいはずの雲ノ平の景色もあまり素晴らしくはなかった。雲ノ平を過ぎて千米ほど下って行く間の道はひどい道であったが、今まではいつも、ビリであった一年生のMが調子が出てきて、凄いペースで下って行った。薬師沢の黒部源流で食べた昼食はうまかった。この辺に来ると、人の姿が多く見られるようになった。ここからは、太郎山（二三七四米）までは登りである。昨日の雨で風邪をひいた僕は、気持ちが悪くなり、みんなが調子が出て来たので、皆について行くのが、とても苦しかった。しかし、鈴木と川田の両名が僕の心をほぐしてくれたので、太郎山に着く少し前に調子を取りもどした。太郎山のキャンプ指定地に着くと、何と二十あまりのテントがひしめいていたのでビックリしてしまった。しかし、何とか張り場を見つけテントを立てて、夕食のまずいまずいスパゲッティーを食べてみた。

七月二十五日……朝、起きてみると全員とても気分が良さそうであった。なぜならば、きょうは山を下れるし、今、合宿の最大目的地の薬師岳（二九三三米）に登れるからである。ナップザックだけで、軽快なピッチで他の人を追い越しながら登って行った。頂上に立ち、回りの景色を見渡すと流石に素晴らしい眺めである。立山・穂高・槍ケ岳・白山・乗鞍岳など日本の有名な山々が一望できた。写真を撮ってキャンプ地まで下った。テントをたたんで折立つという所まで一挙に下る。下界におりられるうれしさも手伝ってか、一年生は非常に快調である。ヒドイ山道であったが、コースタイムの四分の三ぐらいで下ってしまった。とてもよい天気だったので下に有降湖が見え、広々とした高原状の所で小休止をとった時は、とても気持ちが良かった。小見まで一時間あまりバスに揺られたが、疲れのせいかみんな眠ていた。小見から富山まで電車に乗り、富山で富山城を見た後、川田と鈴木と共に喫茶店に入り、二年生だけでくつろいだ後、再び富山駅まで房り、上野まで電車に揺られて、うれしいながらも少しおしいような気持ちで、帰った。

ワンゲル紀行文

下　見

二年　木部一郎

七月十三日日曜、10時45分長岡行き鈍行。

我々松原高等学校ワンダーフォーゲル部夏山合宿下見隊二名は、見送りに来たワンゲル有志の松原第二応援歌を後に聞きながら上野駅十七ホームを後にした。

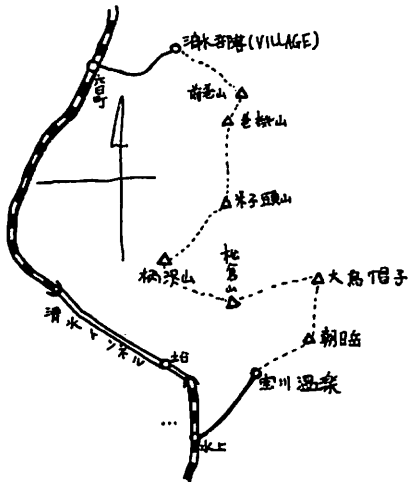
途中国鉄ではただ一つという地下にある駅、土合を通り三時半六日町に着いた。

我々、この地は去年の合宿以来一年ぶりである。列車の中では乗り越すといけないので一睡もしなかった。清水行きバスは六時二十五分発である。それまで駅のベンチで睡眠不足を補うべく仮眠した。そうしているうちにやっとバスが来た。エッチラホッチラ重いザックをバスに上げ、バスの発車を待った。六日町の車掌は東京のそれより親切で美人であった。バスは三十分あまりで清水部落に着いた。

さて、いよいよそれから山行きの始まりである。

山行一日目

重いザックを背負い第一の目的地、桜坂へ向かう。清水からの距離は歩いて、三十分あまりだが、三十五～三十六kgもあろうと思われるザックのため難儀した。我々はテント地を求め近くを低迷したあげく、東京大学ワンダーフォ



ーゲル部の小屋の附近にテントを張った。そして清水との間を合宿の時資料集めに3往復もした。それでもまだ時間があったので昼寝などをしてゆっくり一日を過し明日への鋭気を養った。

山行二日目

我々は、七時に起床しそして八時に桜坂を出発した。はるかかなたにこれから登る、巻機（まきはた）山が見える。きょうはすがすがしい日本晴れである。見上げる空には雲一つない巻機山めざして我々おおいにハッスル……と見えたが、ザックの重さのために意気消沈、我々はwalking machineになってもくもくと歩いた。やがて分岐に着いた。ここで我々は道を右にとった。そして又歩いた（この時点で、我々はすでに道をまちがえていたのだ。）しばらく歩いているうちに炭焼き小屋にぶつかり道らしきものがなくなってしまった。（ここでもどればよかったのだ。）我々は道を探した。そして道らしきかれ沢をやっと見つけ、それを登ることにした。その急なこととときたら、ほとんど垂直に見えるほどだった。

この時、時計はすでに0時をさしていた。私はガムシャラにそれを登りグングン高度をかせいだ。しかし、とうとうかれ沢は消え道はなくなってしまった。私は不安になった。あたりに人影はない。もどろうにも坂が急すぎてもどれない。前進あるのみだ。そこで我々は地図だけを頼りにヤブの中を本当の道を求めて前進した。数分後私の前を歩いていた我パートナー長島茂男氏の「アッタゾー」と言う叫び声がはるか前方で聞こえた。私は無我無中でその声の方に行った。

あったのである。道が、我々が捜していた本当の道が、その時のうれしさときたら、たとえようがなかった。この時すでに日は傾き、すでに午後三時になっていた。我々はそこで昼食をとり、巻機山へと牛歩の前進を開始した。（この時点において我々は道なき道を進んだゆえ、相当疲れていたのだ。）そうしてやっと、前巻機山の山頂附近へ到達した。そこで休憩の時私は一大パノラマを見ることができた。日は西に傾き、太陽が落ちゆく所には日本海がきらきらと輝き、かなたに見える山なみは、ある所は残照を浴びて赤々と燃え、ある所はすでに暗く、これから来る山の真の闇を暗示しているようであった。青くすみきっていた空は、青から朱色へ、朱色から灰色へと刻々と変化していった。そして足もとには雲海が広がり、地上と私とを遮断し、私を増々現実から遠ざけて行った。そうしていた時おそろしていたザックが目に入り「ハッ」と我に帰った。そこで我々は前巻機山から巻機山へと前進を開始し、闇の中を目的地巻機山へ着いた。私は強行軍でそうとう腹が減っていた。昼食はろくな物を食っていない。その夜の夕食のスープのうまかった事……。

山行三日目

きょうはいよいよ待ちに待った縦歩である。予定コースは巻機山—米子頭（こめがしら）山である。きょうも快晴である。我々は巻機山ですが、すがすがしい朝をむかえ進路を南へと取った。距離は相当ある。しかし、縦走なので楽である。昨日に続き山道をノロノロ歩いた。そして予定より少しおくれて六時に桧倉山へ着いた。ここから人気のある所へ行くには前進しても後退しても二日は確実にかかる。そのうえこのコースはあまり人に知られていないため、この辺で一発大砲をブッぱなしても驚く者は誰もいないであろう。しかし、今回は荷物が多いため大砲は持ってこなかった。

桧倉山の山頂は平らで広々として湿った草原であって頂上にある大きな池の回りには食虫植物のモウモウセンゴケが赤っぽい不気味な色で群生していた。我々はその草原の片隅にテントを張った。そして夕食を取り、シェラフにもぐり込んだ。もぐり込んだまでは良かったが、あまりにも静かなのでなかなか眠れなかった。そこで私は色々と変な妄想に悩まされた。モウセンゴケが夜ゾロゾロと歩いて我々のテントを襲うとか、クマに襲われるとか、カミナリでテントが吹き飛ばされるとか、etc。今考えるとみなくだらない事だが、その時は真面目に恐れたのだ。そして眠らずテントから一寸顔を出して外を見た。やはり外はなにもない。ただ見えるのは闇の中に霞む遠くの山なみだけだ。その時私はふっと星があるのに気がついた。とても美しい、私はたまらずテントから出た。その星の美しい事。たとえ芸術家が卓越した感覚を持ってこの星空に挑んだとしてもそれははかない挑戦であろう。

星の美しさについては古来何千何百という人々が描き歌い上げて来た。それだけ魅力的であり完成している。特に山の星は、この澄みきった空の星は、私はしばし星を見つめた。

山行四日目

朝六時起床、近くの雪渓で水を補給し、雪で顔を洗った。冷たいので美容効果はバツグンだ。きょうも又々暑い〈、晴れである。

きょうの予定は桧倉山——大鳥帽子（おおえぼし）山—朝日岳である。しかし、朝の会議の結果我々双方も少々人里が恋しくなったという事で朝日岳から宝川温泉まで一気に二日分を一日で歩く事にした。宝川めざして出発。我々は人里恋しさに大いにハッスルした。もういい加減お互いに同じ顔を見ているのでウンザリしている。清水から女性にはとんとお目にかかっていない。ヒイコラ、ヒイコラやりながら、やっと三時に朝日岳へ到着。そして十五分ばかり休憩して、一路宝川温泉へと向う。途中朝日岳を駆け落り、川沿いの道をセッセと歩き、相当の路離を歩いた。しかし、着かないのである。宝川温泉へ、その時、はるかか

なたにエンジンの力強い音が聞えて来た。人の臭いがプンプンする。

我々は大いにハッスルした。しかし、着かない。「もうだめだ……。」エンジンの音は山の木々を切るキコリのチェーソーの音であった。私は何度もくじけそうになかった。しかし、ワンゲルのド根性を出してガンバッタ。そしてとうとう林道に出たのである。しかし、まだここから宝川温泉へ出るには一時間はかかる。もう午後六十五十分だ、七時十五分発水上行き最終バスに乗れるわけがない。そうしている時思わぬ救いの神が現われた。そこで出合った山のキコリのおじさんが、我々をボロトラックで宝川まで運んでくれと言うのだ。我々は御好意に甘えトラックに乗り込んだ。そしてかろうじてバスに乗れた。このバスの車掌が又々美人であったのだ。それに反し運転手のひどい事。「もったいない。」、「俺も一発ここらのバスの運ちゃんにでもなるか。」などと考えているうちにバスは水上停車で一路東京へとつっ走った。そして午前二時、我々は在住の地百合ケ丘に着いた。私の心は下見を無事完了した事と山のすばらしさを満喫できた事で満足感で満ちていた。

交通戦争下に見る人間愛

二年　木村将裕

人間は本来エゴな存在であり、自らの欲望の為に行動しているがゆえに、他人を愛することはむずかしい。しかし、愛のすべては広大で、深淵で、美しくそしてすばらしい、たとえ異性間における情愛一つとってみても真剣に互いを愛する姿はまさにそれである。

しかし、今日物質文明が発達し、人間が機械化された社会では、この一番大切なものが忘れられがちである。すなわち、人間が人間を愛することである。人々は、金銭や物品をこぞって愛し、つい人を愛することを忘れてしまう。つまり精心面に於てかたわになりつつあるのだ。

たとえば日本の社会に目を向ければ、交通戦争はまさにその名のごとく戦争となり、毎日〳〵数多くの愛すべき人々の命が奪われている。こうなった現在、責任は各個人ではなく、原因を作り出すメーカーと国家にあるといって過言ではないだろう。メーカー各社は今日の現状を、ドライバーや歩行者、ひいては車でうめ尽くされ、限界に達した道路のせいにしている。そして、罪の意識一つ持たず、おのれの利益の為、日夜殺人兵器の増産販売に心血を注いでいる。一方、行政公官庁では多額の政治献金によって業者と結びつき、あるいはことなかれ主義、責任転加方式により根本的解決に乗り出そうとはしない。

新聞の一面では正月四日間に、国内において百数十人が命を奪われ、ニューヨークでは実に十五分に一人が車の犠牲となったと報じているが、他の一面ではデカデカと高速力をキャッツフレーズに新車発売の広告が掲載されている。まるで、速い車が優秀であるかのような錯覚を起こさせ、スピードを求める人間の本能をくすぐって車を売り、そして、ドライバーがついそのスピードに手を出し、事故を招く。しかし、メーカーはやる方が悪いとウソぶく、又最近は高速力の他に加速をうたうようになった。交差点で赤信号が青に変った瞬間、寸秒を争って他の車より先に出る必要がどこにあろうか。やはりドライバーの優越感を満す為である。そして安全対策と銘うって未梢的な改良をほどこし、人々の目をごまかしている。

「自動車メーカーのみなさん、あなたがもし人間なら、少しでも人を愛する気持ちがあったなら五年、いや一年でもいい、国内向けの車の生産を止めて下さい。そしてこの次売り出す時は、スピードが80㎞ぐらいで安全第一主義に作った車を発表して下さい。そして膨大な利益のごく一部で結構です、安全対策や被災者福祉にあてて下さい。また国家は万民の為本当の愛に満ちた政治をして下さい。」これは身近に感じるごく一部の例だが世界いたる所で人々の命があまりにも軽くみられ、人間愛が失われていると思う。人を愛することは人の命を愛することだ。生まれてから死ぬまでのこんな短かく、はかない人間の命を、もっともっと大切にしたい。人間の持つ大きな大きな愛によって。

あるく

二年　武岡哲郎

その夜、彼は銀座の街角にポツンと一人、シトシトと降り続く雨を、その細長い体いっぱい受けながら立っていた。天を仰いだその顔は、雨つぶで光っていた。急にガックリと頭を落とすと、彼はものうげにつぶやいた。「もう終ったんだな。」

彼はもう一度、彼のあわれな姿を見つめていた。彼は真からビッショリだった。

さっきまでも、やっぱりビッショリだったけれど、彼の体からは、モヤモヤと湯気が出るほどだったのに。

彼は頭を少し起こすとしき石をはがされた歩道をゆっくりと歩き出した。

——歩くって、こんなに大変なことだったのかな。——と彼は思った。今の今まで、ちっとも気付かなかったのだけれども、彼が足を地につけるたんびに　靴が、グチュ〳〵と、気持の悪い音を立て続けていた。帰ろうにも電車がない。いや、あっても乗れないんだ。

彼の脳裏に、あのいやらしい光影が、再び浮かんでは消えた。

彼はずっと前、おそらく中学校のころだろう、こんな夢を見たことがあった。

——なぜだかぜんぜんわからないのだけれど、とにかく自分が追われている。そして、なぜだか、自分が追われていることだけは良く知っていて、逃げ回っている。そして、自分がどこへ逃げようとも相手は知っている。でも、すぐには追って来ず、自分が、もう平気だろうと思うころ、どこからともなくやってきて、自分をピンチに追い込む。すると、自分はビルの屋上から、断崖やらから、それこそ必死の思いで、いや、死のうとさえ思って飛び降りるのだが、いつも助かってしまいいつまでも同じことをくり返す。

彼は我にもどると、わざと苦々しい笑いをこしらえてみた。が、あまりにも白々しいので、こんどは本当に苦笑いするはめになった。彼自身、なんでこんなことを急に思い出したのかわけがわからなかった。もうどれくらい歩いただろう。彼にはだんだんに自分の心が静まってゆくのがわかった。

——家にいさえすれば、こんなことにならずにすんだのに。——と彼は思った。

——どこで何が起ころうと、誰がつかまろうと、そんなことは自分に関係ない、テレビの中の事だったのに。——でも、現実に彼はその場にいた。そして、石こう投げなかったが、彼の五メートルと離れていない所で一人の高校生がつかまった。そして彼はそれを指をくわえて見ているほかなかった。その男が警棒でなぐられ、けとばされ、投石をさける盾代わりにひきづり回されるのを見ながら、手も足も出せなかった。そして、彼がつかまった時、彼は気が遠くなるような気がした。まさか自分がつかまろうとは思ってもいなかった。彼はもちろんデモはした。でも投石にも加わらなかったし、いや、加われなかったし、バリケードだって作れはしなかった。彼は犬のように、えり首をつかまれ、こずき回された。そして、彼の半分聞こえなくなった耳に人間のものとは思えない怒号がいやおうなしに響いてきた。彼の心臓はドキドキと波うち、手足はふるえながら止まらなかった。彼は釈放された。こんなことはめったにないということはついさっき、それを見たばかりの彼にはわかりすぎるほどわかっていた。

——こんな目にまであって行動したのに、これがいったい何になったんだろう。結局なんにも変わらなかったんじゃないか。——

——いやそんなことはない。おまえは自分の意志を　何千人かのデモ隊の一人として表現したじゃないか。——

——なにを表現しえたと言うんだ。結局何にも伝えられなかったじゃないか。——

——とにかく、おまえは精いっぱいやったんだ。——

——きっと明日(あした)の朝刊に〝暴力学生また暴れる〟なんて見出しで書き立てられて結局悪物にされちまうんだ。いつも先に手を出すのはやつらの方なのに——

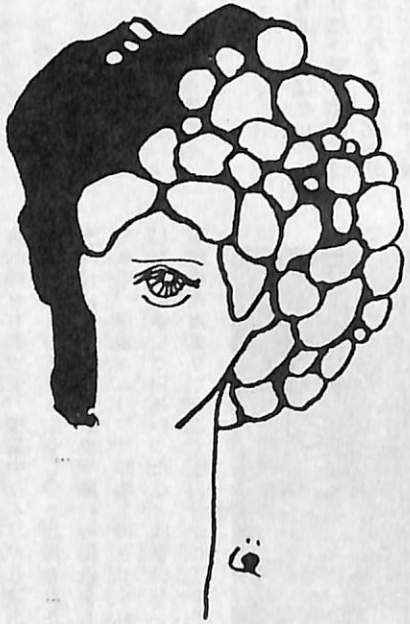
彼はこんなことをとりとめもなく頭の中でめぐらし続けた。彼は口をやたらと動かしていたが、声は出なかった。そして時たま大きなため息をしては灰色の天を見上げるのだった。——駅か。気をつけて行かないとこんどこそ捕まっちまうな。——

彼は　ぼそっとつぶやいて、その光の方へ向かっていった。

〜起きてェうたえる者ォよ　いまぞ日わァ近しィ〜

——ちきしょう。いい気なもんだ。肩なんか組みやがって。あんなに楽しそうにしてやがる。——

彼は何だか、悲しいような、怒りたいようなへんてこな気分で、その歌を聞いていた。そして、彼は、回りに気をくばりながら、駅の構内に消えていった。



第六章

我が志を君に

評議会開催の真際中。
「総務、そんな考えでどうするんだ！」
「会長、これはどうなってるんだ…。」……
よくどなられたっけ。
その度毎に
（威張るな三年、自分達だってできなかったじゃないか……）
（そう、三年は口だけさ…）
なんて、負け借しみを言ったっけ。
そのくせ三年がいなくなると、なんとなく心さびしくて……。

放課後の校庭
「一・二年は柔軟、早くする！」
「どこで会っても必ず挨拶すること。」
（いちいち騒さいナ、古ダヌキめ。）
なんて、くやしまぎれに思ったっけ ……。
それも今じゃ、おもいで……。

でも、決っしておもいでだけには、とどめません。
おもいでだけには……。

ETC・

泉田　茂二

後数ケ月でこの松高ともおさらばというころ、ル・クールから原稿を急いで書けといってきた。（実は前からたのまれていたのだが……。）少し気がむいたから、ただ思いついた事を書くことにする。

その一　教師！

静岡県立沼津工高二年A君は、昨年九月、自殺を図った。幸い一命はとりとめた。同君は、同年六月のアスパック闘争に参加。その後、生徒課による授業中の呼び出し、家庭訪問で、「自主退学せよ。」と、説諭され、母親が退学届けに印鑑を押してしまった。

病院でA君はつぎのように語った。
「形の上では自主的退学だが、本当は完全に強制的なものです。授業中にムリヤリ連出されて、三人の先生に退学しろと説得された。十八日に先生の一人が退学願いの用紙をもってきて、母親がムリヤリ印鑑を押させられました。退学したいといったことはないし、母も学校があまりしつこく圧力をかけてきたの

と、友人関係についても生徒指導の先生が干渉して、手紙などを勝手に読み、友だちと会わせようとしないのでいや気がさしました。ともかくイヤになりました。本当に死んでしまいたい。」（『朝日新聞』一九六九年　九月二十二日付）

同じアスパック闘争に参加した静岡県立掛川西高でも「自主的に退学届けを出さねば、退学処分を出す」と圧力をかけ、結局七人が退学となっている。

自主退学の強制によって、両校の当局者は、教育者として、その責任を放棄している。しかもこのような抑圧が、国家権力の意思であったと見られる跡がある。現に、掛川西高の処分が決まる直前に、校長会議、生徒課会議が開かれていた。

また、神奈川県立平塚江南高では、「安保・沖縄研究会」が、「観光、風土を除く沖縄研究発表を許さない」と全くバカみたいな圧力がかかった。

多くの教師が、自由な教育を守ろうとしている。しかし、自主退学を強制する教師、沖縄の現実の状態を教えようとしない教師も多くいる。A君が自殺を行なおうとしたのも、このような教師に原因がある。

権力のため、我々高校生の基本的人権を踏みにじり、思想表現の自由を抑圧している。被害者は、処分を受けた生徒だけでなく、我々高校生全員、いや国民全員がこのような教育をうけているのだ！

その二　文化祭？

本年度の文化祭で「文化祭とは？」という問題提起を「文化祭ゲリラ」という形でやろうとしたが、もののみごとに失敗した。原因は、我々三・Dの考えのあまさ、行動のあまさと一般生徒の意識の高まりがその段階まで達していなかったことからである。

卒業するにあたって、もう一度文化祭の問題提起を少ししたいと思う。

文化祭は、約二十年間来学校のやらねばならない行事の一つとして存在している。ただ一時的な楽しみとしての文化祭であり、終ればただ空虚感だけしか残らない。ここ数年掲げられる目的は、「クラスの親睦」ということでお茶を濁してしまう。「クラスの親睦」もただ文化祭にどこからか持ってきた目的の為、ただ義務感と授業がなくてさわげることなら何でもよいという気持ちで文化祭をやる。高校生なら精神の発達がある。考える力がある。なぜ文化祭において、これらに逆行するようなことしかやらないのか。文化祭は考える場であり、その考えを行動する場である。何でもいいのだ。反戦でも安保粉砕でも。ともかくいつも考えている事を、もう一度考え行動にうつす絶好の場なのである。

今や、大学はばかでかくなり、個人〳〵の立場など全く無視されている。しかし高校はそれを十分発揮できる場なのであることを忘れてはならない。

また、支離滅裂な文章を書いてしまった。おいらは高校生活の三年間このような事を多少は考えていたのだが、時々おもいだしたようにわめいて、行動はほとんどしなかった。これでいいわけはない。そして、現在の一・二年生をみていると、どうもこのような傾向があるような気がしてならない。

つねに考え行動することを忘れるな！

（一九七〇年一月十五日
ラジオを聞きながら）

革命の志に告ぐ
―人民政府樹立のために―

秋葉　成人

我々は革命の志でなくてはならない。

我々が人民である限りさけられない現実である。人民は革命それ自身を実践活動を通じて認識し、その認識を再び実践活動に移さなければその認識は空論になってしまう。実践活動において人民は変革（飛躍）し、偽りと社会体制から解決に導びかれるのである。

人民よ起きて目を開きこの現実の残酷性を直視しなければならない。現体制は人間を黙殺し、機械の歯車に押し込み、人間に日常的、欺瞞的な行為を強いている現状を自らの目で見よ。

資本主義社会は常に企業の独占性を見せている。その中で労働している革命同志よ！企業内の民主的合理化（人民民主主義革命）を起こす志をも企業に賃金と物々交換してしまって現状維持で満足しきっているのか。革命の志よ。今、全国の大企業の上に太陽が昇りつつある時に、マイホーム主義に、ブルジョワ的マスコミによってコンクリートづめにされてしまって政府と企業の関係を把握し、現実に合った実践活動（革命）を忘れてしまったのか。民主革命は常に金には目のない、首だけのモンスター（権力）を打ち倒して来た。人民は何らかの手段（革命）によって、そのモンスターの規律からの解放によって社会的自由を得て来た。しかし、哲学的自由というものは人民が現在の生活の習慣、因習から脱却し、それらを客観的認識まで高めることによって始めて真の自由、平等が得られるのである。革命の同志諸君！　非人間的、機械的、ブルジョワ本位の社会に真の太陽を昇らせ、人民の自給自足生活を基盤として展開させるのが義務ではないのか。

君の父母は、はたして誰れのために働いているのだろうか。

笑い話しにモーレツ社員を教育（？）するために先輩曰く

『諸君は会社のため、ひいてはタヌキ社長のために骨身をおしんで働きたまえ』とネェ。俗語的に曰く『ハレハレハレ』　これが現社会の正しいとされている行為である。裏では

金をつめば名誉や地位etc……は得られる。聖職者曰く「人間は金じゃかえません。」　又王女様曰く「愛は金じゃ買えないワ。」　とアット　オドロク　タメゴロウ？……ナヌ!!

これ以上例をあげるまでもないと思う。人民は今こそ民主主義を自分の手に握るか、又は新しい民主主義を掲げるかである。今、実践生活において多くの認識を得、社会的実践活動を推進しなければ、又同じ圧政の道をたどらされるばかりである。

たて、革命の志よ
つねに真の民主主義を求めて

親展　拝啓　教師殿

巷では、下火とは言え未だ未だ学校内の問題が多い様ですが当局の貴殿方は如何御過しですか。偖、此の一年間の我が東京都立松原高校に於いて大した嵐も吹き荒れず嘸ほっとした事でせう。若、都立高校の中でも、そして二十五群の中に於いても一段と姿を響ろかすことのない、松原高校にも何とは無しに霧がかかり冷たい小雨が降った事は貴殿方の記憶の新しい処でしょう。実際問題に成りましかた。〝検閲〟、貴殿方は如何に御考えでせうか。我々生徒に取って其の物よりその根底を貴殿方に考えて頂きたいのです。

某曰く「我が校には、先生は少ない。其の大半が教師だ。」と。貴殿方の中で自分は、自信を持って「俺は、教師ではない。先生だっ！」と言える方は如何程いらっしゃるでせうか。

教師と先生が、同一だと考えている方は、今一度、六人いらっしゃる名誉ある国語科の方がたか。辞典に従って確かめて見て下さい。

教師―学業を教える人。宗教指導者。
先生―学識のある指導的立場にある人。自分が師事する人に対する敬秒。親しみや尊敬を含んだ呼びかけ。

幸いな事に教師には先生と出ていた事は、貴殿方の心に一種の安心感が出て来た事でしょう。両者とも、職業間目的は同じ様です。併、其の目的に達する手段が、少し違っている事に気が付かれる事でせう。学識という権威のみに生徒に知識を詰め込む、つまり、時間内で其の課程を終わらすのに精一杯である様な知的労働者が教師なのです。極端に言えば、授業の前、彼は、其の日の授業内容をテープに入れ、教室に持ち込み、出席をとりテープを回わす。生徒は、ノートするなり、彼の心のこもらぬ声を自らのテープに録音する。彼は今風に基づいた合理化されたテイチングマシンです。彼と生徒の間には、心の結び付きはいったいあるでせうか。

其れに対し、生徒自身が親しみを持って、「先生」と呼べる人の授業には、心の結び付きと、其の授業の枠を出た知識が身に付くのです。

果して多くの生徒は、どちらの教育者を選ぶでしょうか。我が校に於いては、よく、先生と生徒の交流が少ないと言われております。それは、その両者間に親頼と教育が両立していないからではありませんか。もちろん、生徒とは、まことに弱い立場にあるのです。その事は、旧・新制の高等教育を受けていらした貴殿方も御存知と思います。成績を付けるのは、教育者であります。生徒が、自から好まずとも其れに従わねば、彼は高校生活に於いての墜落者になるのです。そうした彼でも誰か一人でも教師としてでなく先生として尊

敬出来る教育者がいたなら彼はある面での成功者なのです。

私は多くの教師に声を大にして言いたい。知識のある教師陣、ゆきとどいた個人指導（これは某ゼミナールのキャッチフレーズみたいですが）実際に心の結び付いた先生は、どんなに親しまれ、信頼され、貴殿の授業がしやすくなるかということが。

後記として小生たちと、短い間でしたが思い出ある付き合いをしてくださった校長はじめ諸恩師に敬意を表わすと共に、松原高校の発展のために、明日に向って前進している有能な後輩諸君「おいっ、がんばれよ！」尚今後の御健康と松原高校の発展をお祈り申し上げまして卒辞に変えさせていただきます。

敬具

昭和四十五年三月十五日

村井　龍

遺　言

角山　正之

一、その初め

我が松高三年間の生活を省り見るに、あまりにも多くの悔悟が胸に迫ってくる。

我是に至り、我が道を、我が誤ちを二度と行させない為に諸君等に問いかけるものである。

先づ、遺言として残したい言葉は、「やる気を持て！」という一文句である。

松高生は明るいと良く口にされる。確かに明るい。だが、その明るさが倦怠と無気力から出てはいないだろうか。その明るさが、なんでもいいじゃないかというしごくニヒリズム的な、退廃的なものから端を発しているのではないだろうか。

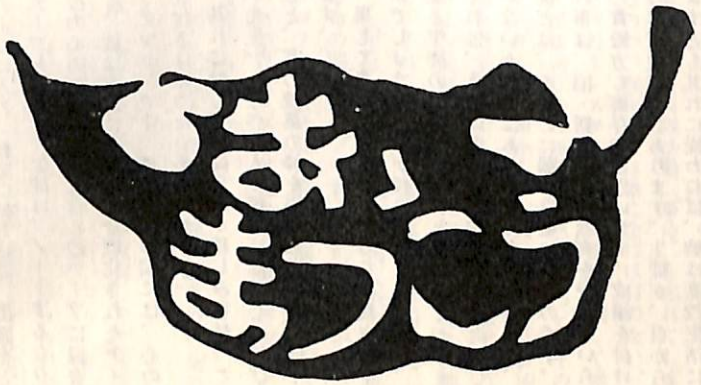
もう一度考え直して見つめてもらいたい。

二、その次目

我々の所属する生徒会の不活発さというのもその根本的原因はそこにあるのだ。

生徒会活動において、先代達があらゆる策を労してその倦怠を打開しようとしたがすべて中途のまま終りを告げたものだった。

今の生徒会もどこにその存在があるのか存ぜぬ（と言っては怒りをかうかもしれないが）全く無の存在になりつつあるという。



生徒会室にはありとあらゆる退廃的なラクガキが書かれ、冷たい風が机の上の一枚のうす紙を巻き上げては通り過ぎてゆく。ストーブにはもえかすだけが残り、本にはほこりの山、ただ見えるのは窓からさし込む木の影。

現在ではそれ程でもないにしても、なんとさびしい光景ではないか。

三、その変わり目

今の生徒会役員の姿には、何か奇妙な悲壮感が漂っている。彼の吹けば飛ぶような姿。

彼の影は、「会員どもは一体何を考えているんだ。おれ達が一生懸命やっているのに、彼らは文句だけしか言わない。まあいい。だからおれは勝手にやっていくさ。」とでも言いたげにゆれている。

人間は英雄を好む。

彼は生徒会を自分一人でささえているような心持ちになり、その結果味わう悲壮な決意は、彼の心に一種の自己欺瞞的な喜びをかきたてるのである。

だが、彼一人の奉仕では生徒会を発展させる力にはなりえない。ただかろうじて生徒会の名称のみを継続させるのみである。

彼らが動いても、我々会員が動かなければ発展はない。会員が何もやらないという声を彼らはだすが、誰だってやってもいいという気持ちはあるはずだがただ毎日過ごせれば良いという者はいないはずだ。そのやる気を生徒会活動に向けるのが役員の役目ではないか。

生徒会よ地に落ちろ。みんな生徒会会員なのだ。それは、君達が動かしてゆくものなのだ。それは、我々が動かしてゆくものなのだ。

四、終りの前

また、我々も良く考えねばなるまい。

生徒会はなぜあるのだ？……

なにも、予算や行事を決めたりするだけなら、先生方にまかしたほうがよっぽどましなはずだ。

それなら、生徒会は何の為に？……

諸君らの心に自問してもらいたい。これが私の君達へのささやかな贈り物である。

五、終りに

生徒会とは、我々の自治の為にあるのではなかろうか。

やがて、社会の一員となる我々に自立精神を、自覚を植えつけんが為の、自治の尊さを知る唯一の機関ではあるまいか。

人間は、それがなくなって初めてその尊さを知るという。

松高生徒会改革の発火点は何になるか？

今卒業してゆく私には、その影がうっすらと見えるのである。

六、終りの終りに

我々は、松高に三年（もしくはx年）いたことを、三年いることを誇りに思うべきである。

今、松高を卒業する生徒は我々だけであり、昭和四十六・七年頃に松高を卒業できるのは君達だけなのだから……。

松高三年ただ一筋！

松高暇人ただ一筋！

松高中義ただ一筋！

我今ぞここを去らん……。

第七章

さよならの総括

—変見伝—

ル・クールによせて

'70のル・クールはいかに松高生に侵透していくかが、このル・クールというわけのわからぬフランス語のオバケ雑誌の、テーマではないだろうか？　ソオ、重要な代物ですョ。今までのル・クールの歴史は道端の石ころにすぎなかった。ただその石は血とあせと涙でつづった物語が刻まれているロゼッタ石です。今に国立博物館から展示を求むなんて来るかも？

常に新しいバイタリティを求めて走って行く時間。それに引っぱられて、ひきずられている私達。その苦痛、恐怖を白紙に書きなぐっている血書である。〝青春〟という上からあたえられた俗物でない、霧に消され、スモッグによごされた魂（ソウル）、そんなソウルの一部をペンさきにたくして打つ。当世流行のBeatです。

まず、読まなければならない。ソゥ、本は見るものでないから、一般に内容が薄弱だと、それはクズ屋行のキップをもらってしまう。

（1'66 日？）

第一に編集の良い悪し。これは手がつけられない。

第二に読者（？）です。これは図書の先生のお話を聞けば凡才は理解できるでしょう。それがいやならマンガの本から始めるのですネェ。資金がない時は立読みをしろョ。（それぐらいの事しなきゃ読めないョ）

ル・クールの話にもどろう。君達（松高生諸君）のリクエストで決まるこの雑居本。知識者（？）だけの限られた物でもない。童話？小説？専門書？　雑居本なんだ。カステラの味は食べてみなきゃわかりませんョ。

最後にル・クールを作った人々に。

一・二年のル・クール委員の皆々様。お元気でフンセン中だと思い、陰ながら苦しんでいる姿を想像してやみません。暇な方ばかりの寄り合いがスバラシイ（？）

創造物を、ヤッタゼBabyの御心境だと思うョ。

そこで、何か言いたいことが沢山あると思う。一人、一人言えば時間は限りなく過ぎ去ってしまう。代表して委員長が一言、

『二度とやるものか』

ル・クールを想う（？）三年生

秋葉　成人

しらじらしく…

サァーテ、フムー、何から言ってよいのやら。この心理、微妙な乙女心とでも申しましょうか（しらじらしい…）感無量とでも申しましょうか……。

前記の委員長曰く『もう、二度とやるものか……』ではないが、このことば何度口にしたことだろう。昨年の今ごろ、やはり御承知のとおり、おいこみの真際中、その時つくづく、

「もう、やるものか！」

と、決心したはずなのに、再びその感を抱きつつ、今日とあいなった。

明日は印刷所へ行く日

明大前二時二十分。編集後記を書き上げる為にここに二時の約束で待ち合わせる。しかし二十分たった今になっても、細かいのが一人足りない。待たされ、冷え込み頭へ来た我々は、彼女の家へ電話でなぐり込み。するとまあ、お疲れのためまだお目ざめでないと言うではありませんか。そこで我々、電話口で声を合わせて「バカメ！　早く来い！」

そして編長、ねぼけまなこで御到着。割り付けの中間報告から話は本題の編集後記に入り、各人この一年を、うす暗い喫茶店のかた隅で、バックに未完成を聞きながら思いだすことになった。

当　初

難なく（？）二年生になれた我々には、たとえ誰に妨げられようとも、この一年再びル・クールをやると決めていた。ル・クールの根本を考え、話し合って、十八号の構想を各々の頭の中に描いた。そして新しく入って来る一年生に多大な期待を持ちながら。年間の計画をたて、予算のぶんどり合戦にも一応の勝利を得、あとは動くのみであった。

一年生どうしたの？

ジャーン。新一年の入学。と共にル・クールにも一年生が登場。

しかし我々が多大な期待を寄せていたにしては、チトばかりお上品で、つつましやかな連中ばかりだった。我々が、身を粉にする想いで過した一年間を、この連中果たして過し通せるかどうか心配だった。

週に一度の委員会も、日増しに出席者が減り、早くも四、五月にタメ息が出始める始末となった。これは二年生の統率力が足りないのか、一年生の意欲が足りないのか、年の明けた今でも未解決のままの問題です。

又、委員同志のタテのつながりは殆んどなく、つき合いと言えば委員会の仕事上だけでした。今、二年生の委員が残念に思い、且つ反省していることの一つに、この一年生とのつながりの問題が上るでしょう。一冊の本、ル・クールを作り上げるという、大変労力のいる事を共にやって行くのですから、他の委員会以外に、深いつながりが出来ていいはずなのに、今年はどうもうまく行きませんでした。これは一年生の委員諸君にも、申し訳ないことだと思っています。もっとル・クール委員会の良さを知ってもらいたかったナ。

二学期になったら

文化祭近くになると、全員本業を忘れたかのようにクラス、クラブの手伝に余念がなく、果ては、集長がクラスの演出家に、長長、編長が、そろいもそろって文化祭執行委員会の手伝を始めたではないか。プログラムの製作から、照明、お弁当作り、そして後夜祭の進行まで幅をひろげた。今思うこと、「ああ、あの頃あの位に本業の方に打ち込んでいたらなあ。」

その文化祭の中で、ル・クール編集委員会として行なったことは、他校生を主とし、外来者も少々含めて、文化祭について述べてもらった。又、三年生によって集会が開かれ、現状を考えさせられる問題を提示されたが、それについての意見も聞いて回った。この二方法を通じて強く感じたことは、松高生は思っていても、自分から進んでそれを表わすのではなく、誰かに聞かれたり、同じ意見の人をみつけてから初めて話し、答えるということである。

これはル・クールの一年生にも共通して言えることなのであろうか。もしそうだとしたら、ズバズバ言ってもらった方がずっとよかったのにねェ。

俗に言う断絶

そんな訳で、文化祭、体育祭附近は一年生と離れていた上に、長長と集長が修学旅行委員なんぞを兼ねていたことから、委員会が思うように開けず、一年生と話すこともなかった。旅行先でも、ル・クールが心配で心配でいてもたっても居られなかった。というのは真赤なウソで、二年生の皆さんはどうやら勝手に楽しんで来たようです。

帰って来ても、修学旅行気分が抜けなくてフワフワ、すると一週間後に中間テストという調子。これまた以て、最悪の状態でした。

迫る！迫る！

はや十二月。こがらしが身に浸み入るようにル・クールの発刊期限が近いことを、ヒシヒシと感じ、今度は夜も寝られないという状態に落ち入った。

より多くの松高生の意見をと、討論会を開いたり、アンケートをとったり、原稿を整理したり。委員会として書くものはいいが、その他の委員会、クラブ等の原稿は、お話のほか集まりが悪い。試験休み、冬休み共連日返上して原稿集めにコレ努め、連日原稿催促の電話のしどおし。電話代にどれだけ使ったことか。毎日の平均睡眠時間は四～五時間。口に出すことばは、「ああどうしよう、やらなきゃ」と「ねむたいなァ」に尽きた毎日。最終会談十二月三十日。

とうとう年が明けちゃった。

一九七〇年、早々五日に委員会を開く。はるばる吹雪の蓼科から、潮騒の房総からと、この日の為に遠路一人で帰って来た連中もいる。「おめでとう！」の次に出た言葉はなんと「原稿どうなった？」――――

つらいものよのう。

こりもせず、また毎日ペンと原稿用紙と共に過すことが始まった。一日として彼等と会わない日はない。寝ては夢、起きてはうつつのその中に、いつも浮んで来るのはあのいとしい（？）原稿用紙とペンなのである。

応接室を借り切って、一番星どころか、十番星、二十番星の出る頃まで頑張った。疲れと空腹感と戦いながらやっとの想いで家にたどりつくと、そこに待っているのは、普段とは打って変った親のあの冷たい目なのである。あーあ、涙が出るョ！

○　○

そんな中で出来上ったル・クール十八号。しかし、終始一貫して各人の心に、作りたいンだ、作るンだという意欲と、ル・クールが好きなンだという愛着心が存在していたことを知っておいて欲しいのです。

今現在、ル・クールは多くの問題をかかえています。その中で最も大きな問題は、しっかりした後任がいないことと、ル・クールが松高生の大の味方で、松高生と共に生きといる事を解ってくれない松高生が多いということです。これは、ル・クールの今後を大いに左右する大問題です。

こんな時、私達は、「ル・クールをもっともっと可愛がってくれる人がいたらなァ」と思うのです。

しかし、ル・クール十八号は終ったのです。

ル・クール十八号

そして……

ル・クール18号

委員紹介全員集合！

編集委員

2年	小川　志のぶ	昆　菊美	
	桐生　玲子	高瀬　桂子	
	小池　朝美	立石　康明	
1年	阿久津信子	塩沢　勝	
	小田　早苗	菅谷　夫美子	
表紙	村井　籠		
カット	小川　志のぶ		
	立石　康明		
写真	松原高校写真部		
協力	2年生の委員を取り巻く仲間達		
顧問	斎藤　仁男		

昭和45年3月発行

編集　松原高校生徒会誌編集委員会

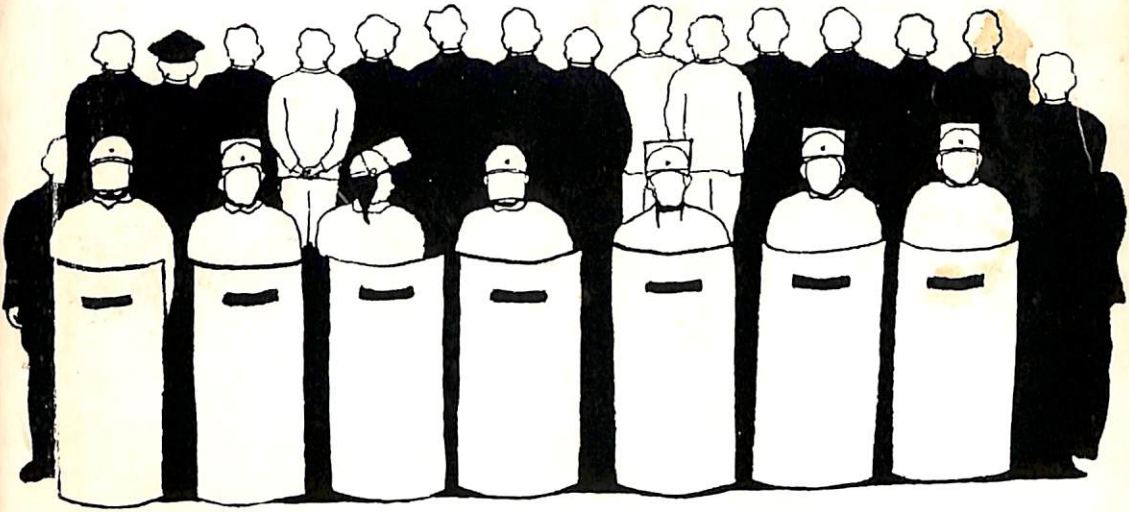
発行　東京都立松原高等学校生徒会

東京都世田谷区楼上水4－3－5

印刷　東京都世田谷区船橋5－1－6

株式会社　丸井工文社

電話　302－4331



東京都立松原高等學校生徒会